

黒の番犬

上荒磯 佑哉

プロローグ

「恋をすれば世界は美しく見える」って、どっかの誰かが言っていた気がする。もしかしたら何かの本に書かれていたかもしれない。

三十分前の僕もその言葉に賛同していた。好きな人が出来て、その人を一目見るためにだけに朝起きることができた。その人と釣り合う存在になるために勉強も苦手な運動も頑張った。

え、じゃあ今の僕はそう思わないって。うん、思わない。今の僕の心境は「恋をすれば世界はバイオレンスでデンジャーな物に変わる」だ。

僕の眼前に銃口を向けて僕が恋をしている影狗奈央えいこくなおさんは冷たく僕に言い放つ。

「藤堂楽。選とらびなさい。今ここで死ぬか。私の番犬ばんいぬになるか」

その時、雲が晴れ月光が僕の好きな人である奈央さんを照らし出す。

それにより、夜闇に覆われていた奈央さんの姿が露わになる。陶磁器を想起させる白い肌に濡羽色ぬればいろの長髪。そして、氷のように冷たい瞳。

——ああ、美しい——

僕自身、馬鹿だと思っけれど、彼女の姿を見るだけで僕の恋愛感情は激しく燃え上がる。例えばそれが、彼女に命を奪われる今、この瞬間だったとしても。

奈央さんは、中々答えが出さないうでいる僕に怒りを憶えたのだろう。触れたら折れてしまいうなほど細い指を拳銃の引き金に強く押し当てる。

——パン！

破裂音が夜の学校の中庭に木霊した。

一章 寄宿学校と番犬

一話

『ジジジジジジ！！ おーきーろ！ ガンガンガンガン！！ パァン！ パァン！』

「あー！ うるせえ！ 起きろ楽！ 早く目覚まし止めろよ！」

「があー！ 頭が！ 頭が割れる！」

『ピー 後十秒で爆発します。十！ 九！ 八！』

「やべー！ 起きろ楽！ お前しか止め方知らないんだから！」

『七、六、五』

「んー……うるさいなあー」

僕は同室者の一樹と鳥羽の騒がしい声で目を覚まし、重たい体をゆっくりとベッドから離す。

そんな僕を見て二人は耳を塞ぎながら僕に駆け寄る。

「あぁーハイハイ」

『四、三、二』

僕は枕元に置いてある自作の目覚まし時計の三つのボタンを昨日決めた順番に押す。するとピタリと目覚まし時計は止まる。

二人は、はぁーと安堵の息を吐きその場に倒れこむように腰を下ろす。

「楽、お前その自作の目覚ましどうにかしてくれ。」

同室者のヒロイ方一樹<sup>かずき</sup>が疲労の色に染まった顔で言う。

「そうそう。せめて自爆機能は取り外してくれよお」

同じくで小太りの鳥羽<sup>とば</sup>が言う。

「アハハ、ゴメンゴメン。でも、この目覚ましを作ってから寝坊での連帯責任は無くなっただでしょ」

「それもお前が起きないせいだけだな。お前、今日の朝食一品おごれよ」

「本当だよ！」

「あ、ゴメン。今日はもう一緒に食べる人が決まってるんだ。その代り、今度晩ご飯おごるから」

僕はチラリと時計を見る。ヤバいな約束の時間に遅れるかも。僕はベッドから出ると、急いで洗面所に行き歯磨きを済ませる。

そして制服である黒い学ランと外套。そして、学生帽を被る。

僕の言葉に一樹が不服そうに顔を歪める。

「お前またレオンとカスタの奴らと連でるのかよ。あんまり他寮の奴らと連でると先輩達に目エつけられるぞ。いや、その前に他寮の奴らにお前がボコボコにされる可能性も」

「そんなこと無いって、じゃあ、僕もう行くね」

僕は鞆を持ち部屋を出る。そして、三階建ての木材と瓦で出来た黒鴉男子寮を出た。少し歩くと、目の前には煉瓦で建てられた西洋風の大きな建物が見えてくる。帝都寄宿学園の本校だ。

帝都寄宿学校。帝暦一八七五年に建てられ今年で創立四三年になる。在籍数は約千人。

中等部から大学部まで存在する。そして、生徒達は自分の好きな分野を研究、勉強出来る。場所は極東の島国である倭国の領海に存在する小さな島の中央に建てられている。そして学園の周りを森が囲み、そして更にその周りを街が囲んでいる。

この学校の特筆するところは、主に二つ。

一つ目はこの学園の成り立ち。この学園は元々、倭国、ラージャ王国、イギリス帝国の若く才能溢れる研究者達が国のしがらみに囚われず自由に研究する場所として建てられたそのためこの学園では、あらゆる分野の最先端技術を学び、研究できる。

もう一つはこの学園は倭国、ラージャ王国、イギリス帝国が共同で運営しているため必然的にこの学校に通う生徒はこの三つの国のどれかの国籍を持っている。生徒達は自分の国籍に合わせて三つの寮に分けられるのだ。倭国の生徒は黒鴉寮、イギリス帝国の生

徒は紅獅子寮、ラージャ王国は黄象寮

僕は帝都寄宿学校、本校にある食堂に向かう。

食堂の扉を開けると

「テメエ！そこは俺達、黒鴉寮の席だろうが！紅茶野郎は出てけよ！紅茶臭くなる！」

「おやおや相変わらず、君達レイブンはカーカーとうるさいね。朝食は静かに食べる物だよ」

「言ってエくれるじゃねえかあ！ああ！」

「なんだ、なんだ祭りか？アハハ、俺も混ぜてくれー」

「スパイシー臭いからそれ以上近づくんじゃねえ！（じゃない）黄象（野郎）！」

僕はそのいつもの光景をみて溜息をつく。

もう一つこの学校の特徴があった。この学校に通うには難関な試験に合格しなければいけない。そして、難関な試験に合格するにはそれ相応の勉強をする必要がある。

ただし未だ貧富の差が激しいこの世界では、それ相応の勉強をするにはそれなりの金がある。結果、この学校に通うのは各国でもトップの頭脳を持ち尚且つ、文字通り将来の国を背負う生徒達。つまり、王族や貴族、どこかの大企業の社長令嬢や跡継ぎが多く通うことになる。

そして、そういう生徒達の多くはプライドが高く似たような生徒達を適視する。それが、他寮という自分とは違う組織に入っていれば尚更だ。

結果、生徒達は他寮の生徒達と良く喧嘩するのだ。まあ、よく他寮と競うように何かと催し物をするこの学園の運営にも問題があると思うけど。

僕は三つの寮の生徒達が入り乱れる食堂をなんとか進み、食堂のシェフにお金を渡す。

「おぼちゃん！ 黒の壱定食をちょうだい！」

「あいよ！」

数分後、僕の前に白米と味噌汁、鮭の塩焼きが僕の手持っているお盆に載せられる。僕はお盆を手を持ち辺りを見渡す。

「おーい！ ラク！ こっち、こっち！」

声のした方に視線を向ける。そこには白い肌にはソバカス、赤髪の男子生徒が手を振っている。着ている服装は赤いシャツに黒いベスト。紅獅子寮の高等部の制服だ。僕はその生徒に近づく。一学年上のエヴァン・マーサー先輩だ。

「エヴァン先輩。おはようございます」

「グッモーニング！ ラク。これで無遅刻の記録はあ……」

エヴァン先輩が指折り数えていると隣から

「これで十日連続だ」

とエヴァン先輩の隣から静かな声が聞える。見ると、そこには褐色の肌と銀髪の男子生徒がいた。着ている服は白に黄色の刺繍が施された丈の長いシャツ、タルクに白いズボン。僕と同じ高等部一年生で、黄象寮の寮生ラビ・ガラだ。

ラビの言葉にエヴァン先輩はオーバーに答える。

「ワオ！ とても凄いデス！ ご褒美にこれ上げマス！」

エヴァン先輩は僕の皿にソーセージを載せようとする。すると皿に載せる前にパクリと食べられてしまう。

僕と先輩は同時に顔を上げる。そこには深い紺色の髪と丸っこい瞳を持った女子生徒がいた。着ている服は上は地味な緑色の着物に髪と同じ深い紺色の袴。黒鴉寮の女子が着る服装だ。

「んー！ 美味しい！」

女子は頬に手をおき心底美味しそうにソーセージを食べる。

「あ、里沙！ それ僕のソーセージ！」

彼女の名前は美空理沙。僕と同じ高等部一年の女子だ。

「ええ！ 良いじゃん！ 少しぐらい。私のおかずこれだけなんだから〜」

里沙のお盆には白米と味噌汁。そして沢庵だった。

「里沙、またお金使い過ぎたの？ 実験に熱中するのは良いけど、自分が生活するお金ぐらいは残さない」と

「うるさいなあー。そんなの分かってるよおだ」

里沙は唇を尖らせて沢庵をボリボリと食べる。里沙はこの学校の薬学部を専攻している。薬学部は、その名前の通り薬の研究をする専攻だ。そして、研究に必要な物は自分で買わないといけないらしい。

「ていうか、そんな事いうならお金貸してよお」

「嫌だよ。僕もキツいんだから」

僕は鮭の塩焼きを口に運ぶ。

「大変ですねえ。平民組は。もし良かったら里沙、お仕事紹介しましょうか？」

平民組とは僕や理沙、ラビのような家が裕福ではない生徒の総称だ。

「えっ！ 本当ですか！ エヴァン先輩！ やります、やります！ どんなお仕事ですか！」

「一日、メイド服を着てレオン寮の男子部屋の掃除」

「やっぱり遠慮します」

「ええ！ なんでデスカ！」

「だってメイド服ってあのフリフリしたスカートですよね！ あんな恥ずかしいワタシ嫌ですよ！ ……それに！ レイブンの生徒はレオン寮に入ったらなにをされるか。私聞きましたよ！ レオンの生徒達が夜な夜な怪しい儀式をしてたって！」

「それは誤解デス。アレは」

エヴァン先輩と里沙の会話が白熱した時、今まで黙っていたラビが静かに口を開く。

「来たぞ」

その言葉に僕達はピタリと会話を止める。

「来たって誰が？」

「アレ？」

ラビは食堂の扉を指刺す。その直後、勢いよく扉が開き一人の生徒が食堂に訪れた。

「奈央……さん」

僕は食堂に現われた女子生徒の美しさに思わず名前を言ってしまった。

影狗奈央。えいこくなお倭国の華族の一つ影狗家の令嬢。

奈央さんは、真っ直ぐカウンターに向かって歩く。背筋を真っ直ぐ伸ばしたただ、目的地に向かって歩く。その姿を見るだけで、僕の心拍は急激に上がり、倒れそうになる。

「すいません。どいて下さる」

「あ、ああ」

たまたま進路上にいた他寮であるレオン寮の先輩にも臆さず言葉を投げかける。そして、奈央さんの雰囲気威圧され道を譲った。格好いい！

そこから数分間、食堂では誰一人動くことは無かった。そして奈央さんが去った後は、今まで争っていた生徒達はおずおずと、席に座るのだった。

「格好いいし綺麗だよねえ。影狗奈央さん。陶磁器を想起させる白い肌に濡羽色ぬればいろの長髪。

しかも史上初めて女性で、高等部一年を纏める学年長でしょー。同性の私でも憧れちゃうわあ……で、今日告白するんでしょ。覚悟決まってるわけ？」

里沙はグイッと顔を僕に近づける。

「う、うん。そのつもり」

そう、僕は恐れ多くも影狗奈央さんに恋をしている。勿論、不釣り合いなのは分かっている。平民出身で顔も普通。取り柄といったら少し発明が出来る程度の僕と、由緒正しい影狗家のご令嬢にして完璧女性である奈央さんとは天と地ほどの差がある。それでも、少しでも近づぐために苦手な早起きも、運動も頑張った。家柄は無理でも学園内の身分だけでも釣り合うように自分のクラスを纏める学級長にもなった。

里沙達も僕の無謀な恋愛に相談に乗ってくれた。

「プランはどうするのデスカ？」

続いてエヴァン先輩が身を乗り出して机の中央に顔を近づける。

「え、えっと。夜に中庭の伝説の桜の木の下で告白する……つもり」

伝説の桜の木とは、この学校の中庭にそんざいする一本の大きな木だ。この学校が作られた時に植えられ、その木の下で夜告白した男女は結ばれるという噂がある。

「良いと思う。後は、いつ中庭に呼び出すかだな」

ラビも机の中央に顔を近づける。

「そんなのガット言って夜、中庭に来て下さい、って言うしかない？」

「無理無理無理無理！ だいたい、夜に中庭に来てくれて言われたら、絶対何するつも

もり！　ってなるじゃん、完全に不審者じゃん！」

「……下駄箱に手紙はどうだろう」

「ラビ、この学校に下駄箱は無い」

「すまない」

「しようがありませんね！　このワタシが占ってアゲます！」

エヴァン先輩は上着のポケットから水晶玉と星座を見るために羅針盤を取り出す。エヴァン先輩はこの学校で天文学を習っている。そして天文学の知識を活かした独自の星占いが出来るのだ。しかも、かなりの確立で当ると学園内でも有名だ。

「ムム！　見えマス！　ラク。アナタは、お昼に殴られます！　そして、ナオさん呼び出すことに成功シマス！」

「なるほど……ってなりませんよ！　どういう意味ですか！」

僕はエヴァン先輩の肩を掴み前後に揺らす。

「ノー！　信じるのです！　信じればきつと星は力を貸してくれマス」

そこで朝食の時間の終了を告げる鐘の音が食堂に響く。

「ヤバ！　ソロソロ行かないと。じゃあ楽、頑張って殴られて告白頑張るのよ」

「検討を祈る」

「信じるのデス！　占いを星を！」

そう言い三人は食堂を後にする。僕も残りの朝食を口に詰め込むと一抹の不安を感じながら食堂を出て行った。

## 二話

時間は流れ現在、四限目の数学。一纏めにした黒い長髪と、メリハリのある体。朱色に

花柄の着物と深い黒の袴を着た女性は数学担当の犬山千草先生だ。千草先生は忙しく黒板に数式を書いて、説明している。

が、僕はそんな千草先生の授業に一切耳を傾けてはいない。

教科書を机に立たせ部品を組み立てる。

「つまり、ここの公式を作ることで、この問題は解くことが出来ますッ！」

「あだッ！」

突然、僕の額に鋭い痛みが走り、僕は後ろにのけぞるが、ギリギリの所で踏ん張り椅子からの転落を回避する。そしてすかさず、自分の机の上を確認する。よし、部品は何も落ちてないな。

僕は人の気配を感じ目線を上に移す。そこには、数学担当の犬山千草先生が笑みを浮かべて僕を見下ろしていた。

「藤堂楽君」

「は、はい」

「授業を聞かずに発明をしているという事は、数学は完璧ということですよね」

「え、えつと……」

「よろしい。では、この問題を解いてみなさい！」

千草先生は僕の答えを聞くよりも早く、黒板を指さす。黒板には無数の公式と数字が規則正しく、黒板を埋め尽くしている。……えつと多分——……

「 $X \parallel Y$ の二乗」

数秒感、教室に沈黙が入る。そして、千草先生ははあと大きく溜息を吐くと

「正解です」

と少し忌々しそうに答える。

「おぉー」

教室から感嘆な声が聞える。

僕はホツと安堵の息を吐く。幸いにも予習したところで助かった。これで、千草先生からお叱りを受けることは無いだろう。

「では、反省文五枚を放課後に提出ですね」

「えっ！ 答えたんだからお咎め無しじゃないですか！」

「誰もそんなこと言ってませんよ。私は、この問題を解いてみなさいとしか言ってませんでした、確かにそうですね」

「それに大体これは何ですか？ ステッキ？ 貴族の学生にでも渡すつもりですか？」

千草先生は僕の机に置かれていた発明品であるステッキを持ち上げる。

「あ、先生それまだ作りかけ！」

僕が言った瞬間、千草先生の指がたまたまスイッチに辺りステッキの端のパーツが勢いよく跳ぶ。そして千草先生の額に直撃した。

千草先生のかめかみに血管が浮き出る。

「藤堂楽君。反省文十枚追加です」

「……はい」

そこで見計らったように教室に授業終了のチャイムが鳴る。

「どうやら今日はここまでのようですね。皆さん、各自予習と復習を怠らないように。ではさようなら」

千草先生はそう言い残すとその場を後にした。それに釣られて他の生徒達もゾロゾロと教室に出て行く。

僕は机に散らばっている部品を手早く片付け鞆に入れると教室を後にする。確か次の教室は三階だったよな。



「ラク」

「あ、ラビか。今から昼食か？」

教室を出ると、朝一緒に朝食を取ったラビに呼び止められる。

「そうだ。ラクも一緒にどうだ？」

ラクは手に持っている昼食であるパンを僕に見せる。

「ゴメン。今日は昼食はいいかな」

「そうなのか？ どうして」

「その……これ完成させたくてさ」

僕は今し方、授業中に作っていたステッキを見せる。

「もしかして、今日の告白のプレゼントか？」

「そう……って言っても完成できるか分からないけど」

「ラクなら完成出来るさ……まあ、その前に件のナオをどうやって告白の現場に呼び出すかのほうが大事なんだがな」

「う、それは……そうだな」

そうなんだよな。結局、奈央さんに会わないと始まらないんだよな。でも……会う機会が無い。

奈央さんは経済学科。その名前の通り、経済やお金について考える学科。それに比べて僕は発明学科。機械の研究、発明をする学科。

つまり同じ学年でも違う学科だとまったく会う機会がないのだ。しかも、僕は貴族や大企業の息子とかではないのでそう言う人達の集まりに参加して会うことも出来ない。

「そう言えば占いは当たったのか？」

「占いって、エヴァン先輩の占いか？」

「そう。殴られたか？」

「いや……ただけど」

まあチヨークはぶつけられたけど。

「なら、今から殴られに行くか？」

「いきなりだね。ていうか殴られによって、何処に行くの？」

「それは、沢山人がいるところだ」

僕は頭を捻るとラビが僕の腕を引く。そして、連れられたのは今日の夜に告白する予定の中庭だった。

そこでは数十人の学生が、複数のグループを作り昼食を取っている。昼の中庭は、生徒達にとって憩いの場なのだ。

「人がいるところならラクを殴りたいと思っっている人がいると思っただが」

「いや、そんな僕人に恨まれることしてないよ」

ラビは一見クールで物静かに見えるがかなり天然だ。さっきみたいに急に突拍子もないことを言ったりする。ただ、たまにその意見が僕達を救う事があるためラビの意見を聞くのは僕とエヴァン先輩、里沙の共通認識なのだが……今回は、どうやらハズレだったらしい。

「そこを通して下さい」

僕の鼓膜がその艶やかな声を察知する。この声は！

僕はくまなく中庭を見渡す。すると中庭の隅に数人の男子生徒達が集まっていた。それだけなら何も問題ない。

ただしその男子生徒の間には見覚えのある黒髪が見えた。僕は気がつくとその場に向かっていった。

「あ、ラクどうした！」

ラビの静止の声など既に聞えない。

僕は、男達の側まで来ると声を張り上げる。

「あんた達！ 何をしているんですか！」

僕の声聞き、男子生徒達がコチラを向く。顔立ちから紅獅子寮の生徒達だろう。ただし制服は改造し髪は染色していた。

恐らく両親のコネで入ったが、この学校の授業について行けず落ちぶれた落伍者生徒だろう。どの寮にも数人はそういう学生が存在する。

「ああ？ てめえ、何だよ？」

「レイブンが話かけんじゃねえよ！」

そして、僕の耳は確かだった。彼ら落第不良生徒の間には黒狗奈央さんがいた。

紅獅子寮の生徒達に睨まれて怖くないと言えば嘘だ。滅茶苦茶怖いし、声をかけたことを後悔している。しかし、奈央さんの目の前がかっこ悪いところを見せたくないという、気持ちしがギリギリ僕をこの場にト止める。

「そ、その人を離して上げてください！ 嫌がってるじゃないですか」

僕はなけなしの勇気を振り絞り男子生徒達に声をかける。しかし、男子生徒達にまったく効果は無い。

「俺達は何もしてねえよ」

「ただ、少し話をしてただけだよ、なあ」

男子生徒の一人が奈央さんの肩に触れる。奈央さんは触れた瞬間、ビクリと肩を震わす。その瞬間、僕の中の何かが切れた。

「辞めろって言ってるだろ！」

僕はレオン寮の生徒達に向かって突進する。そして拳を握り一直線に拳を突き出した。しかし、喧嘩なんて一度もしたことが無い僕の拳が、曲がりなりにも不良をしている彼ら

に当るわけも無くスカッと僕の拳は簡単に避けられた。そして僕はそのまま勢い余ってその場に転ぶ。

不良生徒の間で下卑た笑いが巻き起こる。

不良生徒の一人が僕の髪を掴み持ち上げる。僕は髪を引っぱられ鋭い痛みを感じる。

「あのさあ、正義感かなんだか知らないけどお前ウゼエよ。さっさと消えてくれない？」

僕の髪を持ち上げた不良生徒は心底僕を馬鹿にした瞳を向ける。その瞳が僕の心を打ち砕く。この場から逃げ出したくなる。

けれど――

僕はチラリと奈央さんを見る。奈央さんは心配そうに僕を見ている。もし、ここで逃げたら奈央さんはどうなる。きっと、酷い目にあってしまう。僕の脳裏には、様々な嫌な想像が駆け巡る。そんなのは絶対に――

「……い、嫌だ」

「あっそう」

次の瞬間、僕は勢いよく額を地面に打ち付けられた。額は割れ、鼻はツーンとした痛みと共に鼻血が出る。僕は顔の痛みを必死に我慢して、その場に蹲ることしか出来なかった。そんな僕を見て不良生徒達の間で再びゲラゲラと醜い笑いをする。そして、容赦なく蹴り、踏んづけ僕をトコトン痛みつける。次第に痛みと情けなさから涙が溢れる。

「ああ泣いちゃった。可哀想にっ！」

次の瞬間、僕の背中に鈍い痛みが走る。

「ほらほら、立たないと！」

次に僕は腹を蹴られる。腹のなかの物が出てきそうになるのを必死に飲み込む。

「テメェら！ 何してやがる！」

その時だった少し離れたところから、野太い声が聞える。恐らく、僕のこの現状を見た誰かが助けを呼んだのだろう。

「やっべ。ずらかるぞ！」

不良生徒の一人がそう言うどゾロゾロとその場を後にした。

どうやら不良生徒達は、こんな人目のつくところで暴力を振るうほどの馬鹿だが学校の教員などに手を出すほどの馬鹿では無いらしい。

不良生徒達が完全にいなくなると僕の体はグイッと地面から起こされる。隣を見ると三

十代ぐらいの無精髭を生やしたおっさんが肩を貸してくれた。確か……この用務員の白川

銀司ぎんじさんだったはず。

「カスタの褐色の坊主がお前を助けて欲しいって言ってよ。坊主大丈夫か？」

「あ、はい……あの、それよりも奈央さんは」

「私なら大丈夫よ」

声のしたほうに目線を移す。目の前にはまるで、人形だと思えるほどの美しい奈央さんの顔がそこにはあった。ていうか近い！ 僕の体は燃えたのかと思うほど熱くなる。気恥ずかしさから、顔をそらそうとすると

「そらさないで」

奈央さんの白魚のような手が僕の頬に触れる。その手はヒンヤリしていて気持が良い。奈央さんはポケットからハンカチを、鞆から水筒を取り出す。そして、水筒に入っている水でハンカチを濡らすと優しく傷に押し当ててくれた。

「応急処置よ。傷はすぐに手当しないと感染症にかかる恐れがあるわ。すぐに医務室に行くこと。そのハンカチは上げるから傷に押し当てておきなさい」

「は、はい。分かりまし……た」

僕は奈央さんからハンカチを受け取る。

「それと、ありがとう。とても、かっこよかったわ」

奈央さんはいつものクールな表情から一変、僕に優しく微笑みかける。

「それじゃ、また」

「あ、あの！ 今夜十時！ 中庭の桜の木の前に来てくれませんか！」

気がつくくと、僕はその場を立ち去ろうとする奈央さんに声をかけていた。って、僕は何を言ってるんだ！ 何か弁明を口にしようとするが、中々言葉が出ない。

奈央さんは、クルリと僕のほうに向き直る。

「それは、私に見返りを求めているのかしら？」

振返った奈央さんの表情はいつものクールな表情に戻っていた。僕はどう答えるのが正解か分からずしどろもどろに答える。

「えっと……その……」

「良いですよ。来てあげます」

それだけ言い残すと奈央さんは踵を返してその場を後にした。僕はまさかの奈央さんの言葉に呆けていると肩を貸してくれている銀司さんが茶化すように僕にいう。

「ヒュー。中々やるじゃねえか。坊主。じゃあ、医務室行くぞ」

「は、はい」

その後、僕は銀司さんに寄って保健室に担ぎ込まれた。午後からの授業も欠席した。

余談だが今回の一件が千草先生の耳に入り反省文の件はチャラになった。そして僕午後授業を欠席したことで、なんとか奈央さんに告白の時に渡すプレゼントを完成させることが出来た。

三話

月明かりが顔にかかり僕は自分の寮部屋のベッドから上半身を起こす。手作りの目覚まし時計を見ると時刻は、深夜九時三十分。約束の時間まで後三十分。ここから、中庭まで片道約二十分。十分約束の時間に間に合う。

僕は、一樹と鳥羽を起こさないようにゆっくりベッドから出ると、寝間着から制服に着替える。そして手早く必要な物を風呂敷に詰める。

「よし……行こう」

僕は高鳴る心臓を深呼吸をすることで沈めると、ゆっくりと扉を開く。そして左右を確認すると廊下に出た。因みに、今は消灯時間なため一歩でも部屋を出たところを見回りの先生に見つかれば、反省文五枚ではすまない。下手をすれば退学だ。

そのため僕は息を殺し、足音を極力抑えて廊下を歩く……緊張するーッ！ 今から告白することに対してもそうだけど、今はどちらかと言うと校則を破っていることに恐怖で心臓が飛び出そうだ。一歩歩くごとに周りを確認してなかなか前に進めない。

「ハッハックシユン！」

——ッ！ 僕は咄嗟に出してしまったくしゃみに全身の鳥肌が立つ。すぐにその場から離れ物陰に隠れた……どうやら大丈夫みたいだ。

僕は安堵の息を吐きながら、また一歩一歩と前に進む。

百メートル進んだところで第一の関門である下階層に行くための階段が現われる。なぜこれが第一の関門かというと、この階段は老朽化からか歩くごとにギィギィと音になるからだ。

昼間、普通に生活するぶんには気にならないのだがこの状況では致命的だ。ただ、そこは対策済み。僕は、背中に背負っている風呂敷をゆつくりと下ろすと中から、先端に四つのもう猛禽類のような爪がついたフックがついた自作のワイヤーガン『ヤミタカ』を取り出す。僕は下の階層にある柱に向かって『ヤミタカ』の引き金を引く。すると、フックのついたワイヤーが勢いよく射出され、柱にグルグルと巻きつく。

僕はキチンと固定されたことを確認すると、引き金を二回引く。すると、ワイヤーガンは凄まじい力でワイヤーを巻き取っていく。僕は、その巻き取る力を利用して階段を使うこと無く下の階層に辿りつくって！ これヤバ！

ゴチンッ！

「痛ッ！」

『ヤミタカ』のワイヤーを巻き取る力が強すぎて僕は、頭から柱にぶつかつた。よう改造だな。

僕はぶつけたところをさすりながら、柱に巻き付けたワイヤーを取り外す。

その時だった。僕の首にヌメリと嫌な感覚が纏わり付く。僕はすぐに風呂敷の中から二

つの機械を取り出す。一つは先端に多角形の宝石のような物が短い棒『ヤミモグラ』も一つは兎の耳のような楕円形のアンテナがついた代物『ヤミウサギ』。

僕は『ヤミモグラ』の棒状の部分伸ばす。多角形の鉋物からは配線が伸びており棒状の部分と繋がっている。

『ヤミモグラ』の多角形の鉋物を地面に押し当てる。そして、鉋物のついていないもう片方の先端からコードを延ばし『ヤミウサギ』に取り付ける。

風呂敷から取り出した機械はどちらも遠くの物音を聞くために開発したものだ。『ヤミモグラ』についている多角形の鉋物は地面の震動から足音を検知する装置。『ヤミウサギ』は『ヤミモグラ』が拾った足音を耳で聞くことが出来る機械だ。勿論、『ヤミウサギ』だけでも遠くの音を聞くことが出来るが、その距離は『ヤミモグラ』と組み合わせた時よりも短い。

まあ、どちらもまだ未完成で長時間使えばショートして爆発するんだけど。

ただ、今回は爆発することはなさそうだ。なぜなら、僕の勘は当っておりコツコツと足音が聞えたからだ。だが、まだだいぶ距離はある。大丈夫、慌てる場面ではない。僕はすぐに風呂敷をからいその場から離れる。

こんなこともあるうかと、すぐ隠れられるように昼の間に空き部屋の鍵を開けておいたんだ。

たしかここら辺に……あれ？ 空いてない？ 僕は何度もガチャガチャとドアノブを下げて引くがまったく空かない。

どんなん僕の中に焦りが募る。背中に汗が出る。このままだと見回りの先生に見つかる。そしたら……最悪……退学……。

僕は再度、ドアノブを下に下げて扉を開くがやはり空かない。そのときコツコツと足音が近づいているような気がした。

そのときだったゴトリと足下に『ヤミタカ』が落ちる。急いで風呂敷に直そうとした時だった。僕の中に、一つの妙案が思い浮かぶ。

僕は急いで『ヤミタカ』を拾うと、近くの窓を開けて下を確認する。下には一本の木が生えていた。

「よし！」

僕は思わず小さくガッツポーズをする。ここから『ヤミタカ』を使って爪を下の木に引っかければ、ショートカットで見回りの先生に見つかること無く、約束の場所に行ける。問題はワイヤーの長さが足りるかどうか……イヤ！ ギリギリ足りる！ 設計者の僕が僕の作った発明品を信じないで誰が信じる！

僕は下の木に照準を合わせる。引き金を引く直前、ゴクリと唾を飲み込む。大丈夫、大丈夫、大丈夫、大丈夫！

僕はいつもよりも強く引き金を引く。直後『ヤミタカ』のフックが勢いよく射出される。フックは放物線を描き、僕の狙い通り木の枝にくくりつけられる。

念の為、何度か引つ張り枝が折れないか、ワイヤーが途中で外れないかを確認する。チラリと下を見る。ここは三階。恐怖心がない訳ではない。でも！ 奈央さんに会うためならこれぐらい！

僕は意を決して窓枠を蹴る！ 同時に引き金を引く。ワイヤーが勢いよく巻き取られ僕の体は下ではなく前に行く。あつという間に眼前に木が迫る。僕は先ほどの階段の一件から体を半回転させる。そして木にぶつかる直前、膝を曲げて衝撃を吸収する。ジーンとした鈍い痛みが体に走る。

「ッ痛！ いけど、さつきほどじゃない」

僕はワイヤーを取り外すと、風呂敷の中に他の発明品と共にしまう。そして、約束の場所に向かおうとした時だった  
パン——……。

何かの破裂音が聞える。これは爆発？ いや、いつも爆発音は聞いているから分かる。

これは何かが発射した音じゃない。もっと小さくて鋭い——…銃！ しかも音の鳴った方角は、伝説の桜の木の方角！

その瞬間、僕の頭に嫌な予想が過る。もし学園に不審者が侵入していて奈央さんと鉢合わせしていたら——…：

「最悪だ！ 僕のせいだ！」

気がつくくと無我夢中で、僕は走り出していた。脳裏には、血まみれで地面に倒れる奈央さんがちらつき、首を振ってかき消す。

「もっと早く走れ！」

死ぬ気で足を回転させるが、なかなか景色は変わらない。もっと運動をしておけば良かった！

数分後、いやもしかしたら数十分後だったかもしれない。少なくとも僕が予想していたよりも遅く、約束の場所についた。

「はあ、はあ、奈央さん！ 大丈夫！」

一瞬呼吸が止まった。伝説の桜の木の下は予想通り血の海になっていた。ただし、その血は奈央さんの物では無かった。その血は、黒いタイツに身を包んだ数人の男の物だった。そして肝心の奈央さんは、右手に血がべったりついたナイフ、左手には白い煙りが立ち上る拳銃を握っていた。

「こんなものか」

奈央さんは慣れた手つきで振り、ナイフについた血を払い落とす。

僕はあまりの現実離れした現状に腰を抜かす。しかし、驚くべき現実はこれだけでは無

かった。

「おおい大将オ。こっちは終わったぜ」

右方の物陰から聞き覚えのある声がして僕は視線をそちらに向ける。そこには用務員の銀司さんがいた。ただし、その服装はいつもの薄汚れた作業着ではなく、軍服だった。銀司さんは血がべったりとついた刀の峰で肩をトントンと軽く叩きながら奈央さんに親しげに近づいている。

「お嬢様！ こちらも終わりましたわあー！」

すると今度は、左方から人が近づいてくる。その人物はなんと犬山千草先生だった。ただし、その服装はいつもの着物に袴とブーツという服装では無く、太ももと胸元を大胆に開けた、絵巻物に出てくる忍者が着る服装を身に纏っている。ただし、その手には手裏剣ではなく黒い拳銃が握られている。

千草先生は、奈央さんを視認するや否や全速力で奈央さんに近づくとその場に膝まつく。

「ああ、よくやった」

奈央さんはまるで飼い犬を撫でるように、千草先生の頭を撫でる。そして、千草先生は気持ちよさそうに目を細める。

なんだ……これは。僕は異世界にでも迷い込んでしまったのか！ 僕は、徐に頬をつねる。痛い。ということは夢じゃない……じゃあ！ どういうことだ！

あまりにも現実離れた目の前の現状に頭が爆発しそうとなった時だった

「で、お前はいつまでそこにいるんだ？ というか、誰だ？」

奈央さんの鋭い視線が僕を捉える。反射的に僕は体をビクつかせる。

僕をみた銀司さんが声を上げる。

「なあ、大将。こいつ楽ですよ。ほら、昼休みの時に大将にこの場所に夜来て、告白の呼び出しをした」

奈央さんは首を可愛らしく傾ける。

「……ああ、そう言えば、そんなことがあったな。コチラの案件で頭がいっぱいで憶えていなかった」

奈央さんが、銀司さんと話していた時だった。

奈央さんの後ろにユラユラと黒い影が立つ。

偶然にも雲に隠れていた月が顔を覗かせる。影の正体はここら一带に転がる骸と同じ格好をした不審者だった。不審者はその手につけている鋭利な爪がついた武器を勢いよく奈央さんに振り下ろす。

「あ——ッ！」

その瞬間、僕は自分でも驚くほど俊敏に体が動いた。そして銀司さんの持っている刀よりも、千草先生の持っている銃よりも早く動き奈央さんに組み敷く。



「な、何を！」

奈央さんは驚きの声を上げる。

直後、僕の背負っていた風呂敷が破れ発明品が飛散る。恐らく、不審者の持っている武器による物だろう。

僕は奈央さんを地面に押し倒すとすぐに背後を見る。不審者の行動をみるためだ。

しかし、不審者は即座に銀司さんにより首を跳ねられ、千草先生によって体に複数の風穴が空いていた。

その悲惨な景色に僕の身体は膠着する。

「いつまで、押し倒している！」

「うわっ！」

僕は奈央さんに押されて再度、尻餅をつく。

奈央さんは服の汚れを払い落とす。

「あ、あの奈央さん怪我は」

「動くな」

流れる動作で奈央さんは僕に銃口を向けた。

奈央さんの瞳はいつもよりも冷たく、命乞いをしたところで助からないことを雄弁に語る。

僕の絶望的な状況を現わすように先ほどまで明るく僕達を照らしていた月光は再度、雲に隠れる。

僕は恐怖から目を瞑る。そして、来るであろう痛みに耐えるために奥歯を噛みしめた、その時だった

「まあ、待てよ大将。そんな生き急ぐことはねえだろ。コイツ、もしかから使えるかも知れ無いぜ。なあ、坊主。これどうやって使うんだ？」

僕は銀司さんの言葉を聞き目を開く。銀司さんの手には、『ヤミモグラ』が握られている。

「あ、それは地面の振動を感知して足音とかを聞く者です」

「ふうーん。これは？」

そう言い、銀司さんは僕の耳につけている『ヤミウサギ』を指さす。

「あ、それも遠くの音を聞くものです。それ、『ヤミウサギ』って言うんですけ、その『ヤミモグラ』が感知した音を人間の耳でも聞くことができます」

「だってよ大将。こいつの発明品は俺達の任務に役立つと思うぜ？　なあ、千草ちゃん。コイツの成績ってどうなんだ？」

「そうですね、座学は問題ないかと。運動は少々難ありますが……」

「ただ、矯正できねえことはねえんだろう。なあ、大将。ここはコイツを有効活用する方

向で使わないか？ それに、平民とはいえ守るべき学園のそれも、倭国の生徒を殺すのは大將的にも良い気分じゃねーだろ」

奈央さんは一度、目を瞑り考える。

再度、月明かりが奈央さんを照らし出す。数秒後、奈央さんは再度形の整った口を開く。

「藤堂楽。選びなさい。今ここで死ぬか。私の番犬になるか」

奈央さん言葉を全て理解出来なかった。未だ、この状況を飲み込めていない。ただ、自分がやるべきことは何かは理解出来た。

奈央さんの美しい指が拳銃の引き金に当る。それと同時に、僕は運良く手元に落ちていたステッキを手に取り奈央さんに突出そうとする。

その瞬間三方向から突き刺すような殺気がささる。だけど気にしない。気にしてなれない！僕は構わずステッキを奈央さんの眼前に突き出しスイッチを押す。

——パン！

小さな破裂音と火薬の匂いと共に、ステッキの先端から美しい花々が勢いよく飛び出す。

「影狗奈央さん好きです！付き合ってください！そのためなら、番犬にも奴隷にもなります！僕を支配してもらって構いません！」

音が消える。誰も、動かない。ただ、僕以外の全員が目丸くする。

それから一秒、十秒、三十秒、過ぎた辺りで静寂は破られた。

「プツ！プハハハハハハハ！お前、最高だぜ、坊主！」

銀司さんは笑いながら、僕の肩に腕を回す。

「なあ、いいよな大將」

「ええ、構わないわ」

奈央さんは拳銃を収める。

「だよ。良かったな、坊主。じゃ」

直後、僕の腹に鋭い痛みが走り。

「ちと、寝ててくれ」

「えっ、待って、まだ答え……聞いてな……い」

僕の意識は闇に沈んだ。

#### 四話

「答え！」

勢いよく体を起こす。ヒンヤリとした空気が僕を包み混む。辺りを見渡すと四方は煉瓦

の壁に囲まれている。そして扉は鉄で出来た重い扉。寝ていた場所は堅い木で出来た備えつけの長椅子。この場所を一言でいうなら、独房。

あれ？ 僕って、もしかして犯罪者だった？ 今までの全部夢？ そ、そんな

「嘘だー！ー！」

「何叫んでだよ。坊主」

鉄の扉が空き豪華な椅子を持った銀司さんが現われる。後ろに奈央さん、千草先生の順番で入ってくる。

「あれ？ 夢じゃない？」

「……大丈夫か坊主。まあ、座れよ」

銀司さんに促され僕は、先ほど寝ていた長椅子に座る。対面には銀司さんが持っていた豪華な椅子を置く。奈央さんは、さも当然のようにその椅子に座った。

「……」

数秒感、沈黙が流れる。

「いや、しゃべれよ！」

銀司さんに促され、奈央さんは頬杖を口を開く。

「藤堂楽。質問しろ。聞きたいことは全て答えてやる」

奈央さんの言葉を聞き、僕の頭の中に様々な疑問が一気に湧き上がる。僕は、三秒かけて深呼吸をして頭に浮かぶ疑問を整理する。

「じゃあ、あの……答えを聞かせてください！ 俺の答えを！ 僕は、貴方と付き合えますか！」

「あんな凄惨な現場を見て最初に聞くのがそれか」

「僕にとっては何よりも大事なんです！」

そんな僕の真剣な言葉が独房に響く。数秒間、沈黙に包まれる。そして銀司さん、千草先生、そして奈央さんは笑う。

「プツ！ ハハハハ！」

「ククク、クハハハハハ！」

「フフフフツ！」

独房に爆笑が包まれる。

「あの、えっと……これはどういう……」

そんなに僕の言ったことは可笑しいことだっただろうか？ 確かに僕と奈央さんでは色々なところが不釣り合いなのは重々承知している。それでも

「それでも、そんなに笑う必要は無いでしょう！」

「はあー、笑った笑った。藤堂楽。残念ながらお前の好意は受け取れない。なぜなら俺の

本当の名前は影狗真生<sup>えいこくまお</sup>。性別は男<sup>おとこ</sup>だぞ」

「はっ……」

頭が真っ白になった。何も考えられなくなった。口をパクパクと動かし、掠れた声を出す。

「あ、あの！ 嘘……ですよね」

「嘘ついてるようにみえるか？」

「見えないけど嘘であつて欲しいと思つてます」

「はあ、仕方無い」

そう言い奈央さん？ 真生さん？ は徐に服を脱ぐ。

「わーわーわー！ 何やってるんですか！」

僕は咄嗟に目を塞ぐ。シウルシウルと、着崩れの音が鼓膜を震わす。それがより僕の心臓を高鳴らせる。

数秒後、服の着崩れる音が止まる。

「目を開けろ」

「い、嫌です！」

「仕方がない」

コツコツと足音が聞えるや否や、僕は耳元でささやかれる。

「……見て……欲しいな……楽君に」

そして、僕の体に雷に打たれたような衝撃が走った。

さつきまでの男口調でも、今までの高値の花を体現したクールな口調とも違う、恥じらいと好意の籠もった声はいつも簡単に僕の理性という壁を壊す。

僕は、ゆっくりと目を覆っている手を外し目を開ける。生唾を飲み込み、下からゆっくりと顔を上げる。

徐々に奈央さんの体が見える。ブーツに覆われたつま先、足を覆っているスカート、形の整ったおへそ。そして真っ平らな胸……真っ平ら？ 僕は二度、三度と胸元を見る。そこには女性特有の膨らみは無く、男性特有の筋肉質な胸板があるだけだった。

あ……ああ……あああ

「どうした？ 下も見たいのか？」

「うわぁー……ぁーぁーぁーぁー！！……あぁ、あぁ……ぁーぁー」

その場で体を丸めて涙を流す。僕の僕の愛していた奈央さんが、奈央さんが！ 男だったなんてッ！！！！

「そんなのあんまりだァー！！！！」

僕は目の前の机にうなだれる。

「そこまでか……少し引く」

奈央さんはさげすむような瞳を僕に向ける。  
閑話休題。

真央さんは服を着て僕の隣に座る。

「で、他に聞きたいことはないのか？」

奈央さん、改め真央さんは片足を椅子に乗せ頼杖をつきながら言う。その姿に、僕が恋していた可憐さやお淑やかさは微塵もない。

正直、僕自身さつさとベッドで寝たい。けれど、それを許される雰囲気ではないので情性で質問をする。

「それじゃ、あの不審者は何なんですか？」

「あれはロイツに雇われた暗殺者。恐らくイギリスに通う貴族か王族の子息なんかを狙ったのだろう」

奈央さんはさも当たり前といった風に言葉をならべる。

「そんなことありえる訳……」

そこで僕は言葉を切った。なぜなら、可能性として十分ありえるからだ。

この学園は世界の最先端を走る三つの国の王族、貴族の跡継ぎが嚴重な警備の手を離れて通う学校だ。三つの国と敵対関係にある国からすれば格好な餌場ともいえる。

そこで僕は一つ疑問がわく。

「……じゃあどうして今まで事件は起きなかったんだ？」

僕がこの学園に入学する前も、そして後もそんな事件が聞いたことがない。

「それは事件になる前に俺達が片づけていたからだ」

「アナタ達が？」

「そうだ。我が影狗家は先祖代々、裏から国を守る影の一族の一つ。諜報と暗殺を生業とする血に塗れた一族。そして、その跡継ぎである子供は、この学園に入学し、この学園に通う生徒達を守る使命を背負う。勿論、秘密裏にな」

真央さん手を伸ばすと僕の顎に手を置きクイツと顔を向ける。

「そして、お前も今日からその一人だ」

「えっ、僕も！」

奈央さんの突然の言葉に目を見開いて驚く。

「さつきお前は誓っただろう。番犬になると。番犬とは、影狗の人間が己の任務を真つ当するために忠誠を誓わせる人間のことだ。番犬になった者は主には絶対に逆らえない。一生な」

真央さんは身を乗り出し、僕の頬を優しく触る。そして小さな笑みを向ける。男と分か

ついてもその蠱惑的な表情に目を離せないでいた。

直後、奈央さんの顔がイタズラ少年のように変わる。

「因みに、裏切ったらお前に未来はない」

奈央さんは僕の頬に爪を立てると、勢いよく引っ掻く。

「いった！」

右耳から右頬にかけて四本のひっかき傷が出来て血が滲む。

「フフフフその痛みを傷を忘れるな。それはお前の番犬の証だ」

奈央さんはそう言うという僕から離れ席に座り直す。

「他に、聞きたいことはあるか？ 無ければ終わりだ。ゆっくり休むと良い」

椅子から立ち上がった奈央さんは地下の独房か出ていった。その後ろは銀司さんと千草さんもついていく。えっ！ 僕のこのまま！ ええー僕は天井を仰いだ。

## 二章 模擬戦と番犬

### 五話

「おーい起きろ坊主」

「う……まだ眠いです」

「おいおい、甘えるなよお……あ、あそこに大将の胸板が」

「うわあー！ー！！」

僕はその場から飛び降きる。周りを見渡すと、そこには見覚えのある煉瓦造りの独房ってことは昨日のことは夢ではない訳で……うっ、嫌な記憶が呼び起こされる。

「お、起きた起きた。すげーな、大将パワー」

声のする方向を見ると、大きな鞆を背負った銀司さんがニヤニヤとした笑みを向けている。

「あの、今何時ですか？」

「ん？ 今は午前五時だな」

「五時！」

いつもより三時間も早い。どうりで、頭がボーっとするわけだ。自慢じゃないけど、僕は今度遅刻したら、退学と言われるほど朝が弱い。昨日、あんな真実を知らなければ起きることはなかっただろう。

「あのう……それで、何でこんな時間に起こされたんですか？」

「何でって訓練だよ訓練。お前は、はれて大将の番犬になった。といっても、お前の体も技術も、大将が求める番犬の域に達してない。そこで、その足りてない色々を補うのために今から訓練する訳だ。ほら、とりあえずこれに着替えろ」

銀司さんは背負っている鞆に腕を突っ込むと僕の顔に投げる。確認すると、それは武道

をする時に着る道着だった。

「ほら、さっさと着替えろ」

銀司さんにせかされ僕は道着に袖を通す。初めて着る道着は生地が硬く、あまり良い着心地とは言えない。というか多分着られてる。

「着替え終わったな。じゃあ、えっと、ホレ」

銀司さんは、独房の煉瓦の一つに触れる。すると、煉瓦はガコンツと音を立て後ろに下がった。すると、壁に亀裂が入り左右に分割する。そして、薄暗い通路が現われた。

「隠し扉！ 凄い」

僕は発明家としての血が騒ぎ、思わず壁の裏や天井を観察してしまう。

「この学園は、大将達、影狗家や俺達番犬が速やかに問題を解決できるように色々仕掛けが隠されている。これは、その一つだ。ほら行くぞ」

もう少し観察したい気持はあるが、仕方無い。僕は、出来るだけ隠し扉の機工を目に焼き付けると銀司さんの後を追った。

薄暗い通路を抜けると僕と銀司さんは学園の裏に出た。

空は未だ太陽は上がっておらず少し暗い。

「あの……まだですか……」

山に入ること数十分。銀司さんの後をついていきながら、慣れない獣道を登る。

「もう少しだ。ほら、頑張れ頑張れ」

それから更に数十分後歩くとそこには円形に木々が伐採されその縁を木の柵で囲んだ拓けた場所に出る。

「……闘技場」

「おっ、察しが良いじゃんか」

銀司さんは鞆の中をひっくり返す。鞆に出てきたのは様々な武器。そして、見覚えのある機械の山だった。

「これは……俺の発明品」

「ピンポン。つっても、俺はどれがお前の発明か分からないからお前の机とかベッドの近くに置いて会った道具を適当に持ってきたがあつてるか？」

「あ、はい。全部、僕のもんですけど」

「そうか、ならやろうか」

銀司さんは腰に携えている刀を抜くと、その切っ先を僕に向ける。

「あの……やるって……」

「戦闘訓練。とりあえず、まずはお前の今の実力を測った後に色々の特訓の内容を組んでいくからよ」

「い……いやいやいや無理です無理です！ そんな、いきなり言われても」

「問答無用！」

銀司さんは地面に落ちた刀を拾い上げると言葉と共に刀を振り下ろす。刀は僕の右頬ギリギリを通過しハラリと数本髪を散らした。

「ゴチャゴチャ言うな。戦場じゃ無理なんて言ってる間に死んじまうんだぜ」

銀司さんは、刃を反し僕に向って振るう。僕はギリギリ刀を避けると、その場からすぐに離れる。

「おいおい、これで俺から逃げたつもりかよ」

「ッ!？」

僕は目線を下に動かす。すると、そこには姿勢を低くし、鋭く僕を睨む銀司さんがいた。「いつの間にも！」

僕は咄嗟に目の前で腕を交差させ刀を受け止めようとする。しかし、僕の予想はハズレ腹部に鈍い痛みが広がる。口の中に酸っぱい味が広がる。

僕は銀司さんに蹴られ、後方に吹っ飛ばされる。二転、三転地面を転がりようやく止まる。と、同時に口の中に含んでいた吐瀉物を吐き出す。

直後、僕の視界は暗くなる。咄嗟に上をむくと、そこには刀を上段に構えた銀司さんがいた。その姿はまさに鬼神。

死ぬ——そう意識した途端、脳内に走馬灯が溢れかえる。貧しかった幼少時代、死ぬほど勉強して帝都寄宿学校に入学したこと。

初めて人を好きになったこと。

そして——『性別は男だぞ』

昨夜の振られるよりも悲惨な末路。途端、僕の体から力が抜ける。

キーン——

甲高い金属音が当りに木霊する。

「てめえ！ 何で避け無かった！ お前ならギリギリ避けられただろ！ 死にてえのか！」

「死にたい……ですよ」

「ああ？」

「死にたいですよ！ だってもう、僕が生きている意味ないんですからあ！！」

僕はその場で蹲り涙を流す。

「いや、そんなことは無いだろう。ほら、生きてたらきつと良いことあるって、なあ」

「無いですよ！ だいたいいきなり戦闘訓練って！ 出来るわけ無いじゃですか！ 馬鹿ですか！ 馬鹿なんですか！ いや……馬鹿なのは僕だ……奈央さんを男と見分けられなかった僕だ！ うわぁーん！」

「あーもお！ 泣き止めて！ お前の境遇には同情するがよお。ほら、そろそろ山を下りるぞ。じゃねえと、朝飯に遅れるから。な、ほら起きろ」



銀司さんは、僕を無理矢理立たせると軽々と肩に乗せる。そして、散らばった発明品を手早く片付けると凄まじい速さで下山するのだった。

## 六話

「おっはよう！ って暗！ どうしたの？」

「リサ。それが……」

エヴァン先輩達の視線を感じ僕は顔を上げる。

「うわ！ 顔色悪！ どうしたの楽？ もしかして昨日……振られた？」

昨夜のことが僕の脳裏を過り自然と涙が流れる。

「ううううー！！」

僕は机に突っ伏す。

「うわっ！ いきなり泣き出した！」

「オレ達がここに来てからずっとこうだ」

「なるほど……こりゃーそうとうこっぴどく振られたねえ。よし、仕方無い二人ともこっち来て！」

理沙は朝食を全て平らげると、エヴァンとラビを連れて食堂を出て行った。

一人になった途端、頭の中は奈央さんと真生さんに汚染される。

忘れたいはずなのに奈央さんの、あの花のような笑顔が、氷のような凜とした表情が頭から離れない。そして奈央さんのことを思い出すと、より鮮明に真央さんのことが出てくる。

あの傲慢を絵に書いたような笑みが、僕を品定めするような瞳が、そして……陶磁器のように真っ白な、細い、裸が——って！ 僕は何を思い出してるんだ！

僕は勢いよく額を机に打ち付けて、頭に蔓延る邪念を払拭しようとする。けれど……消えない。

「まだ眠いのですか、藤堂楽」

机に突っ伏していると、聞き覚えのある声が聞える。首だけ動かし前を見ると、そこには千草先生が座っていた。

「千草先生……なんのようですか？」

「特に何も。たまたま、アナタの前の席が空いていたので座っただけですよ」

千草先生はそう言うのと丁寧に朝食を取り始める。

絶対嘘だ。何か、企んでるに違い無い。……少しカマをかけて見るか。

「今日は普通なんですな」

「普通とは？ 私はいつも、普通ですよ。至って普通に周りの環境に合った自分を演じているだけです。それよりも、あまり掻きすぎると血がでますよ」

「えっ？」

そこで僕は、自分が無意識に真央さんに付けられた傷を搔いていたことに気付く。

「あの番犬になって、結局僕は何をすれば良いんですか？」

千草先生はキツと視線を鋭くする。ヤバい、振る話題を間違えたみたい。

「ここで、そう言う話題はあまりしないほうがいいですよ」

千草先生は、少しだけ声量を落として助言をする。

「まあ、強いていえば何もしないことですね。アナタは番犬。主人の命令があるまで大人しくしているのが番犬というものです」

……つまり、今まで通り普通にしとけてことか？　なんだよ。朝は番犬になるために訓練しろ、とか言った癖に。

「なんですか？　その目は」

「……別になんでもないですよ」

「そうですか。まあ、早く受入れることですよ。」

そう言い残し、千草先生は席を立つ。

「ああそうそう。早くしないと授業に遅れますよ」

「えっ！」

僕は時計を見る。時計の針は朝食の時間の終わりを指す八時半を刺そうとしていた。

「ヤバっ！」

僕は冷たくなった朝食を全て口に詰め込むと、急いで食堂を出る。

不味い！　このまま授業に遅れたら、この学校を追い出される可能すらある。それは、

不味い！　全速力ダッシュ！

「グエッ！」

突然、襟首を掴まれてしまう。後ろを振り向くと、そこには見覚えのある数人のガラの

悪い生徒達が立っていた。

「お、おはよう、ございます」



「ガハッ！　オエッ」

僕はあつというまに人が減多に出来ない学食に裏に連れてこられた。

背中が壁。僕の周りを紅獅子寮の生徒が取り囲む。

取り囲む生徒達の顔に見覚えがあった。確か昨日、奈央さんに絡んでた不良生徒達……

けどなんか……顔に傷が多い。

あれ？　僕、昨日殴ったけ？　殴られた記憶しか無いんだけど。

「あ、あの何のよう……ですかね……僕、これから授業が」

「はっ、知るかよ」

その言葉と共にノータイムで、正面の不良生徒の拳が顔面に跳んでくる。僕は、咄嗟に膝を曲げる。不良は壁を殴り、痛がる。それにより、不良生徒達の間になんか少しだけ間隔が空く。

今だ！僕は、不良生徒達の間を抜けて逃げる……しかし

「逃がすか！」

「あっ……グエ」

別の不良に足を引っかけられ転ぶ。

直後、背中に鈍い痛みがジワリと体を蝕む。それが二発、五発、十発と断続的に続いていく。

チラリと目線を上げ、不良生徒達を見る。その表情は、昨日までの優越感に浸った表情では無かった。何かから必死に逃げているような、恐怖に支配された顔だった。

痛みを耐えながら僕は彼らがどうして、そんな顔をするのか考える。多分、彼らは誰かに脅かされている。そして、僕を殴って痛めつけるように言われたんだと思う……じゃあ、もし僕が逃げたら彼らはどうなるんだろう？少なくとも、きつと痛い目を見るんだろう。だったら……ここで、僕が殴られたほうが、良いかもしれない。別に、生きてても好きな人に振り向いて貰える可能性なんて……ないのだから……

「やれやれ、やはり貴様を番犬にしたのは間違いだっただけかもしれない」

その声が聞えたと共に、僕に対する暴力が止んだ。

僕は目線を声のする方に向く。そこには、見覚えのある艶やかな黒い長い髪と陶磁器のように白い肌……

「奈央……さん」

「そのこの二流、三流の学生。それぐらいで良いぞ」

「あ？何だ！って、お前は昨日の？」

「聞えなかったか？お前達の出番は終わったんだ」

「……ッ……」

その言葉には実際に重りがあるように、僕を含めたこの場にいる全員動きを止めた。

「そ、その目……あ、あの時の！」

「お、おい！ずらかるぞ！」

その言葉を皮切りに、不良生徒達はその場を去っていく。

奈央さんはゆっくりと、僕の元に近づいて行く。

「あの……ありがとうございます。奈央さん」

「フッ、お前は、自分をそんなボロボロにした奴にも礼を言うんだな」

「自分をもって……もしかして今回のことって奈央さんですか」

「そうだが」

奈央さんは悪びれもせずにサラリとそう言う。その言動の一つ、一つが、僕が恋い焦がれた奈央さんが全て幻なんだといやでも、思い知らされる。

自然と僕は、真生さんに付けられた傷をなぞるように引っ掻く。

「どうして……そんなことを」

「お前のことを知るためだ」

真央さんはまるで、そうするのが正しいと言わんばかりに僕の背中に腰を下ろす。

「お前に対する評価が銀司と千草で大きく異なっていてな。銀司はまだだが、見所があると云ってる。逆に千草からは即刻、追放もしくは殺すべきだと言ってる。だから、試すことにした。アイツらを使って」

やっぱり千草先生が僕の前に現われたのはたまたまじゃ無かった訳か。

「あの、それで結果は？」

「全然ダメだ。正直、俺もお前を番犬にしたのは間違いだったかもと思っている。倒す、とはいかなくとも逃げるぐらいはできると思っていたんだが」

全ての元凶のくせに、好き勝手言いやがって！ ……って言いたいのには、喉の真ん中でつかえてどうしれも声が出せない。

「残念だ」

真生さんは、スカートの中から拳銃を取り出す。そして、流れるような動作でそれを、僕のこめかみに押さえつける。

「さようなら」

真生さんの指が引き金に触れる。

僕は恐怖からグッと目を瞑った瞬間――

カチッ――

あれ？ 引き金を引いただけ？ 僕は徐に目を開ける。

「と、本来ならこのようにお前の脳髓は外に飛び出すのだが、俺は優しいからな。チャンスをやろう」

「チャンス？」

「明日の朝。同じ場所、同じ時間で同じように模擬戦をする。そこで自分の価値を示せ。そうすれば、少なくとも今と同じ生活は出来る」

真央さんは、そう言うのと僕の背中から降りる。そして数歩歩いたところで、思ったたつたように立ち止る。

クルリと可憐に回り、笑顔を向ける。

「期待しているよ。楽君」

その言葉を発する雰囲気は、僕が恋い焦がれた奈央さんのそれだった。分かっている。この行動は僕に発破をかけるとか、僕に単に嫌がらせをするための好意だということは分かっている！

それでも……僕は嬉しさを揺れてしまう——本当に単純な自分が嫌になる。

## 七話

不良にボコられてから数時間後。僕は、体の節々を痛めながらなんとか授業を受けた。まあ、授業に出たからといって授業の内容をキチンと理解できたかといわれればそんなことは無い。その証拠に僕のノートは真っ白だ。……けれど……仕方ないだろう！

明日、何も評価を出せなければ、この学園を追い出される、ていうかこの世から追い出される可能性すらある状況で授業なんて受けられる訳ないだろう！

僕は机に突っ伏し頭を抱える。

「おい！ 楽、授業終わったでしよう！」

顔を上げると、そこには理沙とラビ、エヴァン先輩がいた。

「なーに、いつまで暗い顔してんの。ご飯、食べにいこう」

「ご飯？ 食堂か？」

「違う、違う。今日は、校下街こうかまちで食べよ。奢るから、その二人が」

理沙が軽く後ろの二人を指さす。エヴァン先輩と、ラビは苦笑いを浮べる。

「いや……良いよ。今日は、そんな気分じゃない」

「ハイハイ、そういうの良いから。ホラ行くよ！」

理沙は無理矢理僕を席から立たせると、問答無用で教室を出て行く。振り払おうとするが、思いのほか理沙の力は強く振り払えない。

結果ズルズルと僕は校舎から、馬車に乗り森を抜けた。気がつくくと、校下街に辿りついていてた。

校下街とは、学園を取り囲むように島の最も外側に作られた街のことだ。生徒達は、城下町をもじり校下街と読んでいた。

中央の大きな広場があり、その広場から四方に道が伸びている。

町並みは倭国の都会のように煉瓦造りの建物が並んでいるが、売っている物は倭国、ロージャ王国、イギリス帝国の物が入り乱れている。

僕は理沙に連れられて「太陽亭」という料理屋につれてこられる。中には、多くの学生が食事を楽しんでいた。

僕達は、一番奥の席に座ると適当に飲み者を注文する。校下街らしく「太陽亭」のメニューは全て、倭国、ロージャ王国、イギリス帝国の文字で書かれており料理じたいも三つ

の国の料理が入り乱れていた。

「じゃ！ 楽を慰める会ということだ！ 乾杯！」

飲み者が来ると理沙はグラス高々に掲げ叫んだ。

「乾杯です」

「……乾杯」

「……」

「もお！ 楽！ ノリが悪いよ！」

「……乾杯」

僕は渋々、グラスを掴み乾杯に応じた。

理沙は僕を慰める会と口では言っているが、多分たんに人のお金をご飯を食べたかっただけなのだろう。

その証拠に、配膳されている料理を次から次ぎに食べて僕にまったく声をかけない。そのため自動的にラビとエヴァン先輩が僕を励まそうと声をかける。

「まあ、そう気を落とすな」

「そうです！ 女の子は他にもいっぱいいます！」

「……」

「そ、そうだ！ ワタシがまた占って上げマス！ もしかしたら、まだチャンスがあるかもしれない嘛せん！」

「それは良いな。前の占いもあたったし！」

エヴァン先輩は鞆の中から水晶玉と羅針盤を取り出す。数秒間、エヴァンは羅針盤と水晶玉を凝視する。

「……どうなんだエヴァン先輩」

「オーノー」

エヴァン先輩は神妙な面持ちで僕の方法を見る。

「ラク。これから、言うことはしよせん占いデス。信じる、信じないは君次第デス」

「はあ」

どうやらかなり悪いらしい。

ただ、正直これ以上悪いことにはならないだろう。好きな人は実は男で性格最悪で学校を裏から守る存在で、しかも強制的に仲間にさせられて、明日、自身の価値を示さないと死○退学、以上に悪いことなんて早々起こらないだろう。

「まず、このままだとラクは校則違反を犯し、退学のピンチになりマス」

「え、今！ 明日じゃなくて！」

「明日？ いえ、今日中にピンチにあいマス」

僕は目の前が真っ暗になる感覚に陥り、頭がフラついてくる。

「……まだありますけど、聞きマスカ？」

「……お願いします」

「えっと……もし今日、ピンチを乗り越えてもそれ以降、ラクの学校生活は困難の連続になります」

「「……」」

僕達の中に重たい空気が漂う。

「……まあ、しよせん占いだ。気にするな」

「そ、そうデス！ しよせんは占いデス！ 気にする必要はありません」

「アハハでもお、先輩の占いって結構当るんですよ。実際、楽はボコボコに殴られて奈央さんに告白できたんだし。まあフラれたけど。アハハ」

二人が一生懸命に慰めている間に割って入り理沙が脳天気と言う。

その頬を赤らめアハハハと陽気に笑う。お酒は飲んでないため、恐らくこの店の雰囲気です。酔ったのだろう。

「「……ッ！」」

そして、理沙の言葉で僕達の間にも重たい空気が広がる。

「リサッ！ 今はそういうこと言う場面じゃないだろう」

ラビは理子をたしなめるが、とうの理子は

「アレ？ 私、なんか余計なこと言っちゃった？ アハハ、ゴメン、ゴメン」と、まったく悪びれる様子は無い。

「すみません。もう帰ります」

僕は懐から今、注文した料理の三分の一の料金を机に置くと帰ろうとする。

「あっ！ ちよっ！ ラク！ ごめんなさい。ワタシが変な占いをしなければ……」

エヴァン先輩は僕を呼び止めると、謝罪をする。

「やめてくださいよ、エヴァン先輩。エヴァン先輩のせいじゃないですって。僕、元々少し体調が悪かったんですって。いやー昨日、寮をこっそり抜けだしたせいですかねえ……じゃ、そういうことなんで。本当、気にしないでください！」

「あ、ラク！」

僕はエヴァン先輩の静止を振り切り、店を出て行った。

それから数メートル息が苦しくなるまで走った。

「はあ、はあ、はあ……帰るか」

僕はゆっくりと足を動かす。ただし歩く方向は学校と真反対の方向だった。

「あれ？ 間違えた？ こっちじゃないや。戻らないと」

それから僕は再度学校に向おうとする。しかし足がすくみ、一歩も歩けなくなる……頭の隅で学校に戻ったら退学を言い渡されるかも、と考えてしまう。

そう思った瞬間、目の前がグラつく感覚に襲われる。

気がつくと、無我夢中で校下街を走った。不安とか、不満とか、恐怖とか、ここ最近胸の中で暴れる感情から逃げたくて走り続ける。

「ここって……」

そして、ふと周りを見渡す。周りにある店は、バーや風俗店など、大人なお店がところ狭しと並んでいる。

端原<sup>はしわら</sup>。帝都寄宿学校に通う成人を迎えた大学部の生徒や学園で働く大人達に向けて作られた歓楽街。高等部、中等部の生徒は入るだけで罰が下る禁断の場所だ。

というか、欲求不満すぎだろ僕。いくら学校に戻るのが嫌だからって、ここに辿りつくことある？

僕は周りを見渡す。周りに教師や同じ寮の上級生はいないみたいだ。これなら、誰にも見つけることなく学校に帰れる。

「そこのお兄さん。ちょっと寄っていかないかい？」

「……」

「いや、そのくせっ毛で眼鏡をかけたお兄さんだよ」

「えっ！ 僕」

とっさに僕は、店の前で呼び込みをしている露出度の高いドレスを着た女性に聞き返してしまふ。顔立ちからしてイギリスの人だろう。

女給のお姉さんは、ニンマリと笑みをうかべると僕の腕にその豊満な胸を押しつける。

「他に誰がいるんだい。ちょっと寄っていきなよ。ここに来るってことは、アンタもう酒飲めるんだろう」

「えっ、いや、僕はッ！」

「はいはい、サービスするから入って入って」

僕は強引に店の中に引きずりこまれる。

店の中は、先ほどいた店と違い照明は暗くカウンター席といくつかの丸いテーブルがまばらに置かれている。イギリスにあるパブってところかな？

既に店内には顔を赤らめ陽気に笑う客が数人いた。

「さ、座った座った。ビールで良いかい？ って言ってもビールしか無いけど。やっぱり、倭国の人はニホンシユが良いのかね？」

女給のお姉さんは、僕の答えを聞くことなくトポトポと西洋風の杯に酒をそそぐ。そしてあつという間に僕の目の前に一杯の酒が置かれる。杯の中を覗き込むと白い泡がせわしなく弾けている。

チラリと見ると女給のお姉さんはニコリ威圧する。どうやら、飲まないと帰してくれな



いらしい。

僕は意を決して杯の持ち手を掴んだときだった

「待った」

僕の手に重なるように、白く小さな手が出てくる。

見ると、そこにはフード付きの外套を羽織った人がいた。多分、女子生徒だと思うけど？

もしかしたら、他寮の生徒に拘束違反である飲酒をしようとしたことがバレたかもしれない。焦りから僕の体にジメつとした汗が流れる。

僕の体はますますこの場から逃げようと動く。しかし、僕の手にならっていた手が更に強く握る。

瞳が重なる。少女は無言で「動くな」と僕に命令する。そしてレオン寮の生徒は鈴のような声で女給のお姉さんにハッキリと言葉を述べる。

「ミス・ジニー。また我が学園の生徒を無理矢理、お店に誘いましたね。しかも、未成年と知りながら」

「し、仕方無いだろう！ こっちも経営が大変なんだ！」

「それと、これは関係ありません。経営不信なら経営方法を見直せば良いのでは」

「ッ！ マセタ事言っただけじゃないわよ！ 小娘が！」

女給のお姉さんは、レオン寮の生徒向って僕に出したお酒を投げる。

バシヤ——

「あ……」

気付けば僕はレオン寮に投げつけられていた酒を被っていた。

分かっている。僕自身、何やってるだろうと思ってる。だから、無言で僕を見るのを辞めてほしい。

「あーもうしないから！ ソイツ連れて早く出て行ってくれ」

「そうですね。そうします。ほら、いきますよ」

レオン寮の生徒は僕の腕を引きお店を出た。

腕を引かれて数分後。僕は端原を出た辺りで、掴まれていた腕を解く。

「あの、ここまで良いです。じゃ、じゃあ」

「待ちなさい。そのまま帰るつもりですか？ そんな、お酒の匂いを漂せた状態で」

うっ！ 確かにこの状態で帰れば飲酒したと間違われる可能性大！ いや、まあ飲酒し

ようとはしたから完全に誤解とは言えないんだけど……。

「もし、二度と校則を破らないと約束するなら、誰にも誤解を受けることなく学校に帰す手助けをしますが、どうしますか？」

「……お、お願いします」

外套の少女はコクリと頷くと外套の中からヌツと真つ白な細い腕が出る。その手には、黒い布が握られていた。

僕は布受け取り開くと、それは彼女と同じ外套だった。

「暫く、それを顔が分からないように被っていなさい。他寮の男女がこんな夜に接触していることを他の生徒に見られるのはお互い避けたいでしょう」

確かにこの状況はあらぬ噂が立ちかねない。僕は、少女に言われたように外套を顔から被る。

次ぎ少女は慣れた様子でパンパンと手を叩く。すると目の前に白馬が引く白い馬車が止まる。

御者は手早く馬車から降りると、「扉を開き丁寧に頭を下げる。そして慣れた手つきで、レオン寮の生徒を馬車に乗せる。続いて僕を雑に馬車に乗せた。

「ワタシの寮までお願い。後、このことは内密に」

御者はコクリと頷く。扉を閉める。数秒後、ゆっくりと外の景色が後ろに流れる。

「その反応、馬車は初めて？ やはり、レイブンの生徒はカゴやジンリキシヤのほうがち着くのかしら？」

「え……あ、いやウチの寮でも人力車はともかくかじ駕籠に乗ったことがある生徒は、そういないと思いますよ」

「あら、そうなの。てつきり、まだ乗ってるのかと思ったわ。やはり噂話は当てにならないわね」

「あの、どうして僕を助けたんですか？ ていうか、どうして貴方もあの場所に」

「質問は一つずつにしてくださいませか？」

「え、えつとじゃあ、なんであそこに？」

「それは最近、噂があったのよ。大学生以下の生徒があユニバーシティの歓楽街にいるとね」

「じゃ、じゃあそうして僕を助けたんですか？ たぶん違う寮ですよね」

「はあー。違う寮だから、何ですか？ 違う寮でも、アナタはワタシと同じ学校に通う生徒です。アナタ一人が校則を破ると学校全体の生徒がペナルティーを負う可能性がある。だから助けた。そこまで疑問に感じるんですか？」

そんな会話をしていると馬車は校下街を抜け学園に辿りつく。馬車は校舎の右側を抜ける。そして見えてきたのは煉瓦で建てられ、金で装飾された西洋風の建物が見えてくる。

スカールトレオン  
紅獅子寮の建物だ。

馬車は、建物の裏口前に止まった。御者が扉を開ける。御者は外套の少女を丁寧に馬

車から降ろす。因みに、僕には降りる手助けはしてくれない。

僕が降りると馬車はすぐに闇の中に消えて行った。

「少し待っていて」

外套の少女が扉を開けて建物の中を確認する。

「大丈夫そうね。さ、入って」

外套の少女に導かれ僕は初めてレオン寮の寮内に入る。寮内は白い壁に紅のカーペットが敷かれていた。そして、天井には黄金のシャンデリアが飾られていた。黒鴉寮と違い豪華だった……というか、派手過ぎて目が痛い。

「えっとじゃあ、お邪魔します」

「何をしているの？ 靴は履いたままでいいわよ」

「あっ、すいません」

僕は靴を履き直し、レオン寮の中に入る。暫く、廊下を歩くとレオン寮の生徒とすれ違う。しかし、誰も外套の少女に話かけることはない。どころか、外套の少女を見るなり廊下で話していた生徒はそそくさとその場を立ちさる。

すると見覚えのある生徒達は目につく。着崩した制服に他者を近づけない雰囲気。昨日、今日と、僕をボコボコに殴った不良生徒達だ。彼らは、他の生徒と違い横一列に廊下を歩きゲラゲラと馬鹿でかい声で話す。

しかし、そんな彼らも外套の少女を見るなり顔を引きつけて壁側に避け、借りてきた猫のように大人しくなる。

外套の少女は不良生徒達の横を通りすぎると、突如ピタリと足を止める。

「そのアナタ達。お酒の匂いがしますね」

よく見ると不良生徒達の顔はどことなく赤らんでいる。

「な、なんの事ですか？」

不良生徒の一人が言葉を震わせがらシラを着る。しかし彼女は不良生徒達の声に耳を傾けることなく

「後で罰を与えます」

とだけ言い残す。そして、不良生徒達の顔は真っ青になった。ボコボコにされた僕としては胸がスカツとする出来事だ。ざまーみろ。

というか、薄々分かっていたけどこの人、普通の生徒じゃないよな。さっき罰を与えるっていったから恐らく学年を仕切る学年長とかかな？

そんなことを考えながら階段を登り寮の五階に辿りつく。

「ここよ。さ、入って」

「あ、はい。お邪魔します」

外套の少女に言われ僕は部屋に入る。

部屋からは外套と同じ花のような匂いがフワリと立ちこめる。そして、外套の少女が壁のスイッチを押すと部屋は明るくなった。すると部屋の状態が明らかになった。

部屋は一人部屋であり、僕の部屋よりも三倍の広さがある。天蓋付きの巨大なベッドに派手な装飾が施された机。壁には恐らく高そうな絵が飾られている。

レオン寮の学年長でこれだけ豪華な部屋に住めるなんて羨ましい。これだけ広かったら今以上に発明ができるのに。

「ふう、流石にここまで来れば大丈夫よね」

外套の少女は今まで来ていた外套を脱ぐ。すると、外套の中からは可憐な小さな少女が現われた。金を溶かしたと思うほど美しい髪は長く波打っている。肌は雪のように白く、瞳の色は海のように澄んだ青をしている……っていうかこの子いやこのおかたは！

「レオン寮の寮長シャーロット・トワイライト・フレデリック・アルバート！」

「あらワタシのことを知っていたのね」

知ってるも何もこの学校では知らない人はいない超有名人！レオン寮の学生のトップに位置する寮長にしてイギリス帝国の皇帝ジョーマ五世の一人娘とかいう、大衆小説にも出てこないような設定を盛り込んだような人だ。

ただ、納得もする。確かにこんな文字通りの殿上人が目の前を通れば普通の生徒は萎縮するし、不良生徒もあんなにビクつくよ。っていうか、これ不味くないか？僕みたいな生徒が普通に話して言い存在じゃ無いぞ！

「あ、あのすいません！なんか色々粗相しちゃって……ぼ、僕、まったく貴方、様のこと知らなくて、本当すいません！」

僕は全速力でシャーロット様の横を通り過ぎると、目の前に映る窓を勢いよく開け窓枠に右足を乗せる。

「待ちなさい！ワタシに申し訳ないと思うなら、ここから飛び降りるのを辞めなさい。ここまで誰にもバレずに連れてきたワタシの努力を徒労で終わらせるつもりですか！」

シャーロット様は、僕の体を後ろから掴む。うっ……確かに申し訳ない。

僕は渋々、窓枠から足をどける。

「まったく、アナタはもう少し考えて行動をしなさい。とりあえず、そちらのバスルームで体を洗ってきなさい。着替えはこちらを来なさい」

僕はシャーロット様から袋を手渡される。

バスルームというのか良く分からないが、とりあえず指された部屋に行く。

扉を開けて僕は目を見開いて驚く。

そこには小さなお風呂があった。マジか。スゲーな、黒鴉寮というか、本土でも部屋にお風呂なんて無いよ！えっと、多分この蛇口を捻ると

「うわっ！ 冷た！」

突如、頭から冷や水が流れてくる。見ると、小さな穴がついた筒から冷水が出てくる。僕は急いで蛇口を止める。うう冷たかった。えっと、こっちで冷水だから逆に

「次ぎは熱い」

それから僕は初めて見るレオン寮の風呂に二十分悪戦苦闘した。

「お風呂、ありがとうございます」

「遅かったわね。あら、似合うわね。レオン寮の制服も」

トワイライト様は勉強机に向っていたが、僕がお風呂から上がったことに気付き体をこちらに向ける。

「あ、ありがとうございます。あの、じゃあそろそろ僕はこれで」

「では、そこに座りなさい」

「素晴らしいトワイライト様いつの間に設置されていた椅子を指さす。」

「えっ？」

「何を呆けた顔をしているのですか？ あなたは校則を破ったのですよ。残念ながら他寮なのであなたに罰を与えることはできませんが、この学園を司る一人として話しを聞く権利はあります。だから、座りなさい」

「は、はい」

僕は渋々、椅子に座る。改めて対面して思うが凄い威圧感を感じる。傷がうずく。

「それで、どうしてあなたは歓楽街に？」

「それは……その友達を違うお店に行っていて……けど、ちょっと色々あって、お店を飛び出して、校下街を走っていたらいつの間にか。あそこに」

「なるほど……それで、どうしてご学友とお店に行くことに？」

嫌なことをついてくる。男として話したくはない。けど……僕はチラリとトワイライト様の顔を伺う。その険しい顔は黙ったり、ごまかしたり出来る雰囲気ではない。……仕方ないか。僕は自身の恥ずかしい恋の話をする。

「僕が……その……失恋して落ち込んだからです！」

ああ、言っちゃった。めっちゃ恥ずかしい。情けない。

「な、なるほど。つ、つまりあなたは失恋をしてしまい、ご学友はそんなあなたを気の毒に思い街にでた。しかし、あなたの傷心は癒えず店を飛び出した、と」

言葉にされると尚恥ずかしいな、僕の行動。

「そ、それで、そのあなたが恋をした人は、どんな人なんですか？」

「えっ、それ……いう必要があります？」

「あります！ 今後、あなたのような人が校則違反を犯さないために必要なんです！」

「わ、分かりました。でも、恥ずかしいので名前は伏せますよ」

「構いません」

「えっと」

流石に番犬のこととか言えないよな。となると、出来るだけ当たり障りのない感じで

「髪は長くて、肌は白くて、黒鴉寮では皆が憧れる存在で」

「それでそれで！」

「お淑やかで、凛としていて、まさに立てば芍薬座れば牡丹みたいな人で」

「まさに、高嶺の花と」

そう、まさに高嶺の花のような人物だった……偽りの姿である奈央さんは……。

「でも本性は、とんでも無い嘘つきで、秘密主義で、自分勝手に、本当に有り得ない人だったんですよ！」

今思い返しても最悪な気分になる。告白した瞬間もそうだし、真央さんの真実を知った瞬間も全部。

「あの、フラれたんですよ、アナタが。聞いている感じ、アナタが振ったように聞えるんですけど」

「あっ、いや、フラれた……というかまあそもそも恋愛が成立しなかったというか……」

「恋愛が成立しないとは身分の差のような？」

「まあ、そんな感じですよ」

一番の問題は身分じゃなくて性別なんだけど。

「それで、そのことを認識したら、今まで僕がやってきたこと全部無駄だったんじゃないかって思えてしまって、それで——」

「無駄なんかじゃありませんよ。少なくとも、アナタは他人のことを思うことが出来る、それこそ悩んだ挙げ句に校下街を無我夢中で走ることが出来る人間だと証明することはできます。それって、普通の人は出来ないことです。少なくとも私は見たことはありませんよ」

トワイライト様の言葉は僕の胸につっかえていた何かをストンと落とした。この気持ちは……今まで頑張ってきたことは……全部、無駄じゃなかったのか……。

「あの、それでフラれたということは告白をしたのですよね！　どんな告白をしたんですか！」

ああ、トワイライト様。俺は今、貴女様に滅茶苦茶感謝してるのにその発言で一気に覚めました。お願いだから僕の恥ずかしい記憶に触れないで。

「っていうかトワイライト様、なんか俺の失恋話楽しんでない？」

「ッ！　そ、そんなことありませんよ！　ワタシが、恋愛小説とか恋バナとかを常に飢えてる訳ないじゃないですか！」

説得力ねえ。僕の話聞いてた時、滅茶苦茶目、輝かせたし。もしかして、トワイライ

ト様って結構噂よりも普通の女子なのか？

コンコン――

「ッー！」

「トワイライト様、申し訳ありません。複数の生徒から嘆願書を預かったので確認をしていただきたく」

扉から聞える第三者の言葉に僕と、トワイライト様の体はピタリと止まる。

「……トワイライト様。あの、この状況で他の生徒に見られるのってかなり不味いんじゃない？」

「不味いですね。ワタシはともかく、アナタは退学の可能性があります」

エヴァン先輩の占いの退学の危機って飲酒じゃなくてこのことか！

「ど、どうしましょう！」

「仕方ありません。ここから、飛び降りなさい！」

トワイライト様は、先ほど僕が飛び降りようとした窓を指さす。

「いや、無理ですって。さっきトワイライト様も言ってたじゃないですか！」

「いいえ出来ます！ 確か、倭国の民はニンジュツという魔術が仕えると聞いたことがあります」

「忍者も忍術も大衆文学の話ですよ！」

僕は一樣窓から頭を出して下を見る。うん、無理。さっきは混乱してたからいけると思ってたけど冷静になって見ると普通に死ねる。

「トワイライト様？ もう、お眠りになったのですか？」

不味い！ まったく、解決方法が浮かばない。

「……仕方ありません。ミスタートウドウ。荷物とコレを被ってここに隠れなさい！ それしたら機会を見て脱出させます」

説明をするや否や、トワイライト様は僕を西洋式の押し入れに押し込める。それと、ほぼ同時だった

「無礼を承知で失礼します！」

扉が勢いよく開く。僕は押し入れの隙間から、部屋の様子を覗く。部屋に入ってきた人は、白髪と長身の生徒だった。しかも、顔は滅茶苦茶整っている。

何を話しているんだろう？ 僕は押し入れの扉に耳を当てたときだった少しだけ扉がきしむ音が鳴る。

「何物だ！」

突如、白髪の生徒が勢いよく近づき押し入れに剣を突き刺す……って剣！ 僕はギリギリで顔を右にどかし、向ってくる剣を避ける。

「避けた。ならば！」

そして、勢いよく扉が開かれる。

「えっと……こんにちは」

「誰だ貴様は！ 何故、お嬢様のマントを羽織っている！」

白髪の少年は言葉と共に僕に向って拳を飛ばす。

僕は転がるようにして押入れから出ることで、その拳を避ける。けど……どうする？ どう考えても目の前の人、僕よりも運動できるよな。

「きゃーチャック！ 窓からも人が！」

「何！ 大丈夫ですか！ お嬢様！」

白髪の生徒の目線が窓が向う。そして、一瞬僕はトワイライト様と目があう。トワイライト様は目で僕に語る。「コイツはワタシが引き受けるから行け」と。

他に方法が無いため僕はコクリと頷くと、地面を強く蹴り上げ全速力でトワイライト様の部屋をレオン寮を駆ける。

後ろから

「待て！ 犯罪者！」

と白髪の生徒の怒号の声が聞えたが追ってくる気配はない。恐らく、トワイライト様が上手くやってくれているのだろう。

数分後。僕は、レオン寮から入ってきた裏口から外にでると、黒鴉寮まで走った。周りを確認すると人の気配はない。まあ、当たり前か。消灯時間前とはいえ夜も更けてきている。僕は、黒鴉寮の壁を背中にしてその場に座り込む。

「まったたく。今日は良く走る日だな」

ふと空を見上げると、曇天の夜空が見える。ただ暫く見ていると雲と雲の間の一つだけ星が煌めいていた。

「無駄じゃない……か……」

ふと、僕の頭に真央さんの顔が浮かぶ。ただし、今までのような苛立ちや悶々とした気持ちは浮かばない。その代り、僕の頭に次々と発明のアイテムが浮かんでくる。手を動かしたい、何かを作りたいという衝動が溢れてくる。

「よし！ やってみるか！」

僕は体を動かすともう一度走り出した。

## 八話

「こんな物かな」

僕は額に出来た汗を拭き取る。ずっと、体を曲げて作業をしていたから腰が痛い。僕は腰を反って痛みを取る。すると右側から野太い声が飛んで来る。

「あ！ いやがった！」

視線を声のするほうに向けると霧の中から銀司さんと千草先生、後奈央……いやこの場



言は真央さんか。

「自分からこの訓練場に現われるなんて殊勝な心がけだな。褒めてやろう」

真央さんはニヤリと偉そうな笑みを浮べて皮肉を言う。

「別に、褒められることじゃないですよ」

僕の好きな奈央さんの顔と声で男口調な皮肉を言われるのは未だ受け止められないが、このまま言われっぱなしは癪なので言い返して見る。

すると三人は驚いたような表情を浮べる。いや、そんな驚くようなことじゃないと思うんだけど？

「なんだよ。昨日はピイピイ泣いてたのによお。もう、大将のことは吹っ切れたのか？」

銀司さんは僕の肩に腕を回す。

「いや、まだ吹っ切れた訳じゃないんですけど……ただ、考えかたを変えたといえますか」「考えたかたを変えた？」

「はい……今まで僕は真央さんと奈央さんを同一人物だと思っていたからいけなかったんです。でも、今は違います。真央さんは真央さんであって奈央さんではない、そう思えば心がスゥーと軽くなったんです！」

「……何じゃそりゃ。けど結局、大将は大将だぜ」

「現実ではそうかも知れませんが、僕の頭の中ではたまたま同じ顔と声の別人と認識してるのでまったく問題ありません」

だから僕が奈央さんのために頑張ってきたアレやコレやはまったく無駄じゃない。それ、まだ明確にフラれていないので僕の恋は続いているのだ！

「そ、そうか」

銀司さんは、苦笑いを浮かべながら僕から離れていくと、小走りで真央さんのところに向う。

「おい大将！ アンタのそうで、有望な新人が馬鹿になっちゃったぞ」

「聞えている。まさかこんなことになるとは。僕も予想外だ……まあいい、どうせ使えないと判断すれば処分するだけだ。銀司、手心は加えるな。出来るだけ本気でやれ」

「へいへい」

銀司さんは僕の元に再度戻ってくる。

「ほら坊主、時間もねえ。チャツチャツとやるぞ」

「はい」

僕は準備をすませると、闘技場の真ん中に向う。

「えっと、これって昨日と同じで僕は何を使っても良いんですよね？」

「ああ。銃でも剣でも発明でも何でも使えよ」

そんな会話をしながら僕と銀司さんは互いに向かいあった。闘技場の端で千草先生が声

を張り上げる。

「では、これより白川銀司と藤堂楽の模擬戦を行います。銀司は刀一本。楽は何を使ってもあり。勝敗は死亡、気絶、場外の押し出し、降参を言った時のみ模擬戦は修了します。そして、この模擬戦に藤堂楽が負けた場合」

千草先生は流れる動作で懐から拳銃を取り出すと僕のこめかみに銃口を向ける。

「即座に処分となります」

そしてクルクルと拳銃を回して懐にしまう。

「では、離れて」

僕と銀司さんは、一步、二歩、三歩と離れる。銀司さんは腰に付けていた刀を鞘から抜き構える。

沈黙が僕と銀司さんの間に訪れる。一陣の湿った風が吹く。

「ハジメ！」

「銀司さん。すみません！」

僕は千草先生の言葉とほぼ同時にポケットに手を入れていたスイッチを押す。突如、銀司さんの周りが次々と爆発する。

「畏！ テメエ、俺達よりも早くここに來てたのはこのためか！」

大正解。因みに、地面に埋めている爆弾は目覚まし時計の失敗作だ。

「どうですか、銀司さん？ 降参する気になりました？ まあ、降参しなくても場外に吹っ飛ばしますけどね」

「誰がするかよ！ こんな爆発、戦場じゃ見飽きてるんだよ！」

銀司さんは膝を曲げると大きく跳ぶ。そして、たった一回の跳躍で僕のすぐ側まで辿りつく。

「避けるのもな！」

銀司さんは目にも止まらぬ早業で、僕の首元に刃を当てる。

「降参するか？」

ツゥーと僕の頬に汗が流れる。

「それは無理です！」

僕は足下に設置している爆弾のスイッチを押す。銀司さんは足下の爆発に気付き、いち早くその場から離れる。そして僕はというと

「があ！」

爆発により後ろに吹っ飛ばされ背中を強打。それだけじゃ威力を抑えきれず、三回ほど後ろに転がる。

死ぬかと思った……まあ、威力はかなり押さえてるから死ぬことはないんだけど。それでも滅茶苦茶痛い。って、痛がってる場合じゃない！

僕は素速くその場で立ち上がる。銀司さんは相変わらず無傷のようで、疾風のような速さで僕に近づいてくる。僕は次々と銀司さんの足下を爆発させるが銀司さんは蛇行し全ての爆破を避ける。

けれど、これで時間は稼げた！僕はポケットから一丁のリボルバー銃を取り出すと、狙いを定めて引き金を引く。

破裂音と共に特製のゴム弾が銀司さんを襲う……しかし銀司さんは軽々と避けてみせた。

「お前、銃まで作ったのかよ！」

「安心して下さい。特性のゴム弾なので当たっても死にませんよ。まあ、死ぬほど痛いけど僕は続けざまに二発の弾丸を放つ。しかし、銀司さんはそれらを軽々と避ける。

銀司さんは僕に肉薄すると上段から刀を振り下ろす。僕は、転ぶようにして右に避ける。

だが、僕の頬に一筋を傷が出来るそこから、ゆっくりと血が流れる。

このまま無闇に撃つたって倒すのは無理……だったら！僕は、ポケットの中のスライツチを押し仕掛けていた爆弾を爆破。

「何度やっても無駄だぜ！」

「でも、動きを制限することは出来ます」

「あ？」

僕は銀司さんが立っている所の右側の爆弾を爆破する。銀司さんは、狙いは通り左側に避ける。僕は、すかさず引き金を引く！

——キーン！

爆破が甲高い音が辺りに響く。なんと、銀司さんは刀で弾丸を弾いてみせたのだ。

「嘘でしょ！」

「ハッハハハ！爆破で俺の進行方向を絞っての狙撃。考えは良かった。俺じゃなかったら勝ってたぜッ！」

銀司さんは、刀を斜めに構えると地面を強く踏みしめた時だった。

ズゴッ！

「え？ ああー！」

銀司さんは突如現われた落とし穴に見事にはまる。まあ、とっさに穴の縁を掴んだから落ちてはないんだけど。

「お前、こんな物も作っているのか！」

「はい。昨日の晩に爆弾を仕掛ける時に一緒に」

因みに爆弾の罠によって地面がボコボコになった時に発動するように一工夫が加えられていたりする。

僕は銀司さんに近づくと銃口を向ける。そして、威圧感を出すために出来るだけ悪そうな顔を作る。

「で、どうしますか？ 降参しますか？」

「悪いのがガキ一人に負ける訳にはいかねーんだわッ！」

銀司さんは当然、手に持っていた刀を僕に投げる。ただし、先ほど神速の太刀を受けていた目が慣れていたので、避けるのは簡単だった。

「さて、それじゃ決断を……っていいい！」

僕は再度目線を落とし穴に向けるがそこには先ほどいたはずの銀司さんがいなかった。

「ここだよ」

背後から銀司さんの声が聞える。振り返ろうとしたがもう遅い。銀司さんは僕の左腕をガツチリ掴んでいた。

僕はすぐに振りほどこうとするがビクともしない。銀司さんは流れる動作で両腕を掴み僕を背負い投げた。

「——ッ！」

僕は背中を強く強打したため、息が出来なくなる。

銀司さんは、地面でのたうち回る僕に覆い被さるようにして動きを止める。そして、袖の中からナイフを取り出し首元に当てた。

「さあ、どうする坊主？ 降参するか？」

「い、嫌です！」

「そうか」

銀司さんはナイフを大きく振りかぶった時だった

「そこまでだ！」

ナイフが僕の眼前でピタリと止まる。僕と銀司さんの視線が同時に声のするほうに向く。目線の先には、真央さんがいた。

「この勝負はついた。銀司の勝ちだ」

その言葉を聞き銀司さんは、ナイフを収めると僕から離れる。

真央さんは僕に近づくと見下ろす。そして、手のひらを僕に差し出した。

「まだ体が痛むだろう。手を貸してやる」

何かの罫か？ 僕はオズオズとその手をとった。その瞬間、僕の体は引っぱられ立たせられる。

「そしておめでとう。お前は、晴れてから俺の番犬だ」

「えっ？」

真央さんの突然の言葉に頭が真っ白になる。

「何を鳩が豆鉄砲を喰らったような顔をしている。この俺が認めたんだ。もっと喜べ」

「いきなりすぎて喜べませんよ。それに僕、負けたんですよ。だったら殺されるんじゃない。僕の言葉に真央さんは心底馬鹿にしたように言葉を並べる。」

「たしかにルールのにはそうだな。この模擬戦はお前が俺の番犬にする価値があるかを再度見極めるための物だ。ちゃんと説明しただろ」

「そういえば、そんな事も言ってたような。模擬戦って言葉に引っぱられててつきり勝たないと思っただけだ。」

「そうそう、コレをお前にやろう」

真央さんは僕に光る小さな何かを投げる。僕はとっさにそれを掴んだ。見ると犬？の絵が書かれたバッチだった。

「それは貴様が俺の番犬になったという証だ。常に持ち歩いておくように。因みに通信機の役割もしているから、俺が呼んだらすぐこいよ。番犬」

「言っておきますけど僕はアナタの番犬にはなりませんよ」

「はっ」

当然の僕の言葉に真央さんや銀司さんの顔が固まる。

「番犬になれない……それは、今ここで死ぬということか？」

「違います！ 僕が番犬として仕えるのはアナタではなく、奈央さんです！ なので以降！ 僕に命令する時は奈央さんとして命令するように！」

僕の突然の発言を上手く処理出来ていないのか真央さん達は未だそこに固まっている。しかし、気にせず僕は闘技場を後にした。

幕間

楽が銀司との模擬戦により、楽の処分が決まった日の夜。真央は自室にて溜まっていた書類に目を通す。

真央、正確には奈央は黒鴉寮の高校二年生を纏める学年長のため彼の自室はひとり部屋なのだ。

すると、扉を叩く音が部屋に響く。

「どうぞ」

真央の短い返事に呼応して扉が開く。

そこには黒の番犬の一人にして、帝都寄宿学校の教師、そして真央専属の侍女という二足の草鞋わらじどころか、三足の草鞋わらじを履く女性、犬山千草が現われた。

「真央さま、夜食をご用意しました」

彼女は周りに人がいないときは、真央様と呼ぶ。

手にはお盆が握られていた。お盆の上には二つのおむすびと緑茶が入った湯飲みが置い

であった。

「そこに置いてくれ。後で食べる」

「承知しました」

千草はそう言うど机の端に置く。

「進捗のほうは？」

「後、少しで終わる……何か言いたそうな感じだな」

「いえ、何も」

「隠すな。お前が俺に仕事の進捗を聞くときは何か聞きたいことがあるときだ」

「流石ですね。真央様」

「何年一緒にいると思ってる。で、聞きたいのは藤堂楽のことか？」

「はい……そうです。あんな……あんな、あんな、あんな！ 無礼で馬鹿で真央様の事を何も分かっていない人をどうしてッ！ 私には理解できないのです！ 確かに学生の中では彼の発明品は頭一つ抜けています。しかし、それでも黒狗家が正式に使う装備とは比べるまでもありません！ そんな馬鹿で、単細胞なガキをどうして！」

千草はいつもの冷静な教師の態度とは打ってかわり、感情を露わにさせて自分の考えを述べる。

「お前の言いたいことは分かる」

「だったら！」

「千草。お前、アイツが俺に告白したのは憶えているか？」

「ええ、憶えていますよ。真央様の命を奪おうとしたあの暗殺者共！ 今思い出しても

はらわた  
腸が煮えくり返りそうです！」

「そう、その事件だ。あの時、アイツは誰よりも早く暗殺者の残党を見つけ、誰よりも早く俺を助けた」

「真央様を助けるなんて当然のことです！」

「当然か？ 今まで普通に生活をして来た学生が突然、血と硝煙に塗れた戦場にほっぽり出されて、あそこまで俊敏に動けると思うか？」

「そう……言われると」

千草は楽の視点に立ち、楽が告白した時のことを思い出す。

あの時は珍しく複数人の暗殺者を撃退する任務だった。そのため、周りには複数の骸になった敵国の暗殺者。見知った人間は皆、手に血がべったりとついた刀や、未だ硝煙が立ち上る拳銃を握っている。たしかに普通の生徒達が見たら、腰を抜かしてその場にへたり込むだろう。もしくは慌てて逃げ出す、どちらかだ。

しかし楽は違う。最初こそ腰を抜かして驚いていたが、危機が訪れるや否や、すぐに

順応しその危機を退けた。それも、幾度となく鉄火場を乗り越えた銀司や千草以上

しかも訪れた危機が自分に対してではなく、一方的に片思いをしている相手で、危機の逃げ方も自分の身を犠牲にするという極めて危険な方法。はっきり言って異常だ。

「つまり、真央様が彼を番犬にした理由は、その異常性をもってということですか？」

「そういうことだ。アイツの目的に対する執念は異常だが、使いようによれば俺達にとって武器になる。それに、俺に惚れているなら肉の壁役としても使えらと思った……んだがなあ」

真央は苦い顔をする。

思い出すは、模擬戦が終わり正式に楽を番犬として迎えた時。まさか自分の命令は聞かず奈央の命令のみ聞くといい斜め上の発言。あれでは、肉の壁役どころか真央の命令を聞くかすら怪しい。

「やはり今からでも処分するべきでは？」

「やめる。今さら処分しようとすれば必ず反撃に合う。最悪、俺達のことを学園にバラすぐらい恐らく藤堂楽はやってのける。それに……従順な犬だけを飼っていてもつまらないしな」

真央はニヒルな笑みを浮べた。その時だった

ジリジリジリジリー

突然、机の隅に置かれている電話がベルを鳴らす。

真央と千草の間に緊張が走る。何故ならこの電話が鳴る時はこの学園になんらかの危機が訪れる時だからである。

真央は受話器にとると耳に当てる。そして、電話ごしに二言、三言、言葉を交わし受話器を置いた。

「真央様？」

「任務だ。明日の昼、アイツらを集めるろ」

「承知いたしました」

真央は椅子に深く腰掛けると新たな任務について、頭を悩ませるのだった。

### 第三章 新たな任務と番犬

#### 九話

「では、授業を終わります。あ、そうそう藤堂楽。貴方には個人的に話があるので、私と一緒に来るように」

午前中最後の授業が終わると、僕にそう声をかける。

「なんだ？ また、何かやらかしたのか？」

「楽は、変わり者だからなあ。また、作っている発明品が失敗して教室でも爆発させてお

「説教だろう」

「違うよ。だいたい僕、最近は発明してないしい」

「藤堂楽。早く来なさい」

「あ、分かりました。じゃあ、またね」

僕は手早く荷物を纏めると学友達と別れると千草先生の後をついていく。

恐らく僕が読み出したのは番犬についてだろう。本当、お説教だったらどんなに良いか……はあー。

「で、今回はどうして呼ばれたんですか？ まさか、模擬戦をやれとか言わないですよね」  
「藤堂楽。前も言いましたが、ここでは番犬に関する話は話さないように。どこに他人に目があるか分からないので……こっちですよ」

千草先生は、廊下の突き当たりを右に曲がる。目の前には行き止りの壁が立ち塞がる。千草先生は、壁を人差し指でなぞる。すると壁の右側が後ろに左側が前になる。千草先生は、壁と壁の間にできた隙間の中に入る。僕も、同じように入る。すると、壁は自動で元の状態に戻る。

「あのいったい、いくつこの学校に隠し通路ってあるんですか？」

「いまのところ発見されている数は全部で百二十です」

「いまのところって、引っかかる言い方ですね」

「アナタはめざといですね。実を言うと、この学園にある隠し通路やその他の仕掛けの全てを私達は把握できてないのです。理由は歴代の影狗家の人間が個人で秘密理に作った物や、古すぎて資料が無いなど理由は様々ですが。まあ、全て知っていたとしても貴方に教えるのはまだ先になると思いますが」

「何ですか？ 僕もう番犬ですよ？ それぐらい教えてくたって良いじゃ無いですか？  
まあなりたくてなった訳じゃないんだけど。」

「貴方、隠し通路やその他の仕掛けのこと知ったらどういう仕組みなのか知りたくて調べたんですよ。最悪、分解するでしょう」

「……な、何のことですか？ そんなこと……しませんよ？」

「どうして最後が疑問形なんですか。そこは嘘でも、ハッキリしないと聞きなさい」

そのまま暫く薄暗い隠し通路を歩く。無言というのもそれはそれで緊張するので、適当に話を振ってみる。

「あの千草先生ってなんで教師しながら番犬にやってるんですか？ やっぱり、僕みたいにああいう現場を見ちゃって……とか？」

「なんですか？ 藪から棒に」

「いや薄暗い通路に先生と二人っきりきりで歩いていると気まずくて」

「……順序が逆です？」



「順序？」

「教師だったから番犬になった訳ではありません。番犬だったから教師になったのです」「つまり先生は元々教師じゃなかったってことですか？」

「ええ。私は元々、違う仕事をしていました。そして、その仕事をしていた時にお嬢様にあったのです。そこからは番犬としてお嬢様に仕え、お嬢様がこの学園を守る任務に就いた時に、お嬢様の力になれるよう私はこの教師になったのです」

「違う仕事か……何だろう？ この学園で教鞭を執れるぐらいだし学者とかかな？ まあ、どっちにしろ、真央さんの為にそこまで出来る先生の気持ちは分からないなあ。あんな傲慢な奴のどこが良いんだろう？」

「私ここまで身を尽くすのが分からない、といった顔ですね」  
げっバレてる。

「貴方、お嬢様のことが好きいう割にはまだまだお嬢様の理解度が浅いようですね」

「僕が好きなのは真央さんじゃなくて奈央さんなので。あんな傲慢で自分勝手な奴、理解しようなんて思えませんよ」

「……大人として一つ貴方に助言をしましょう。好きな人がいるなら、その人の全てを愛せるように努力しなさい。そしたら相手も少なからず貴方を理解しようとしますから」

千草先生は足を止める。どうやら目的地についたらしい。千草先生は重そうな金属の扉をゆっくりと開ける。

「お嬢様、藤堂楽を連れてきました」

部屋に入るとそこには地下とは思えない明るい部屋があった。地面には豪華そうな絨毯。部屋には奥からこれまた高そうな棚。次に西洋式の長椅子であるソファ。長机、ソファと置かれている。そして部屋の上座には高価そうな執務机が置かれている。

「ご苦労」

執務机には偉そうに真央さんが、奥のファー右側に銀司さんが座っていた。

「お、やっと来たか。千草に坊主。まあ、座れよお。何か飲むか？」

銀司さんの手には酒のビンが握られている。心なしか顔も赤い。どうやら既に飲んでいたらしい。

「銀司、貴方っていう人は！ これから、大事な話があるのですよ！」

千草先生が額に青筋を立てる。

「良いじゃねえかよお。折角良い酒があるんだ。それにこれぐらいの酔いならちゃんと話に参加出来る」

「千草それぐらいで良い。どうせコイツは何を言っても飲むんだ。注意するだけ無駄だ」

「……分かりました」

千草さんは渋々といった感じで口を閉じる。そして手前のソファの真央さんに最も近

い所に座った。

「お前も座れ、藤堂楽」

「……」

「ずっと立っていると大変だから座って欲しいわ。楽さん」

僕は執務機のほうを見る。そこには傲慢な雰囲気纏った真央さんはおらず、僕が恋い焦がれて止まない奈央さんがいた。

奈央さんは僕に小さく微笑み着席を促す。

「了解です！」

僕は自分の体にあふれ出る情動を少しでも発散するために、勢いよく奥のソファで最も奈央さんの近い席に座る。

僕を呆れた目で見るような視線を感じるが気のせいだろう。

「んん！ では、全員集まったので今回の任務について話す」

ああ奈央さんじゃなく真央さんに戻った……ずっと、あのままで良いのに。

「昨夜、ロージア帝国に侵入している影狗家の者から情報が入った。どうやら、ロージア帝国はこの学園に暗殺者を送りこんだらしい。数は三人」

ロージア帝国って……北の巨大な大陸を領土に持つ国だよな。確か、色んなところに戦争ふっかけて倭国とも仲が悪かったような。

「ロージアねえ。で、大将。目的は？」

「目的はレオン寮寮長にして、イギリス帝国、皇帝の一人娘シャーロット・トワイライト・フレデリック・アルバートの暗殺だ」

ん？ シャーロット？ 聞き間違いか？ いや、聞き間違いであってくれ。僕はトワイライト様のおかげで立ち直れたんだ。そんな恩人が暗殺されるとか絶対やだ！

「これが資料だ」

真央さんは事務機の引き出しから数枚の資料を取り出すと、ソファの間の机に乱雑に置く。そして、その資料にはバッチリトワイライト様の写真が貼ってあった。

僕の中に怒りはフツフツと湧き上がる。

「今回、送り混まれた暗殺者はシシャー。狙撃と格闘、変装が得意な暗殺者だ。恐らく先日戦った暗殺者とは比べものにならないほど厄介な相手だろう。そして既にこの学園に侵入されていると考えて良い」

「けどよ大将。レオン寮の嬢ちゃんなら大丈夫じゃねえか？ 確か凄腕の執事兼護衛役がいつもびったりついてるだろう。」

凄腕の護衛役……銀司さんがそういうならきつとかなり強いんだろうなあ。まあトワイライト様の身分を考えれば当り前か。

「確かにトワイライトを真っ正面から暗殺することは難しいだろう。この日を除いてな。」

資料の三ページを見て見ろ」

「これは……」

「卵探し大会！」

卵探し大会とは帝都寄宿学園でこの時期に行われる寮対抗の行事だ。内容は名前の通り、学園の中に隠された装飾された卵を見つけるといふもの。卵にはそれぞれ点数が決められていて制限時間内でより多くの点数を採った寮が優勝する。夜はこの島全土を巻き込んだお祭りも行われる。

確か元々はレオン寮の生徒が本国のイギリス帝国で行われるイースターっていう神様の復活を祝うお祭りらしい。

因みに、寮対抗といっても海外の行事が起源のせいでレオン寮の以外の生徒はこの行事にあまり乗り気ではない。

その証拠に毎年、黒鴉寮の生徒でこの行事に参加するのは中等部の生徒が殆どだったりする。そのため毎年、優勝するのは全学年が参加するレオン寮だ。

「そうだ。そして、この大会で優勝した寮の寮長は中庭の中央で表彰される。千草、この学園の地図を広げてくれ」

千草先生は奈央さんに言われ地図を机いっぱいにくる。

「その地図の丸がついているところが表彰される場所だ。そして、間が悪いことに近くには時計台がある」

「ああ、なるほど」

「これは……最悪ですね」

「あ、あの？ 出来れば説明して欲しいんですけど……」

僕の言葉に千草先生と真央さんはやれやれといった顔をする。

「ああすまんすまん坊主。流石にまだ分れねえよな。つまりだ、この時計台から表彰されるところまで綺麗に弾道が引けるんだよ。つまり、絶好の狙撃ポイントってことだ」

銀司さんは地図に線を引きながら分かりやすく説明してくれる。なるほどなあ……待てよ、表彰されるってことは勿論一人だよな——……

「けっこう不味いじゃないですか！ それって」

「ああ、かなり不味い。しかも暗殺が可能な瞬間はまだある。それは、パーティーだ。パーティーでは多くの生徒がターゲットと触れあうだろう。なら生徒の一人に変装してブスリ、なんてこともあり得る。護衛がいるとはいえ一人で、ターゲットに集まるであろう大量の生徒に全員に気を配るのは不可能に近い」

本当に間の悪いタイミングで行われるな卵探し大会……あれ、待てよ？

「あの質問なんですけど、卵探し大会を中止すれば良いんじゃないですか？」

「無理だな。この催しの主催はレオン寮だ。他寮の生徒が声を上げたことで結構されるだ

ろう。それに、そもそもなんて説明するんだ。トワイライトが暗殺されるから今年のイースターは中止とでも言うのか。それこそ影狗家、引いては倭国の信用は墮ちてロージアの思う壺だ」

まさに八方塞がり……

「じゃあ、どうすれば……」

僕の言葉に真央さんはニヤリと傲岸不遜な笑みを作る。

「何を悩む必要がある？ 既に暗殺者の行動はある程度絞れているんだ。ならば、その行動を潰す作戦を実行すれば良い。安心しろ、既に作戦は考えてある。まず一つ目の表彰件だが、まあこれは俺達、黒鴉寮が優勝すれば良い。ということで千草、当日、卵を隠す場所を調べてくれ」

「招致しました」

千草先生は席を立つと深々と頭を提げる。

「銀司。お前は、いつも通り学園外から来るものに対して目を光らせる。あと、戦闘になったらすぐに呼ぶから準備をしておけ」

「りょーかい。大将ー」

銀司さんは二ヘラと笑いながら締まらない敬礼をする。

「んん！　そして楽さん。貴方には、後夜祭でターゲットの側にいて護衛が出来るほど、残りの日数で親交を深めて下さい。期待していますよ」

期待していますよ期待していますよ期待していますよ……好きな人にそんなこと言われたらッ！

「任せて下さい！」

張り切らない訳にはいかないじゃないか！　僕はその場で生きよ立つと勢いよく敬礼をした。

十話

イ　奈央さん達との話し合いが終わった僕は千草先生によつて教室に戻される。そこでタ

ミング良く授業のチャイムが鳴り五限目の授業が始まる。

授業の科目は、外来語だ。本来は必死に授業を受けるべきんだけど今は任務のほうが大

事だ。　　ということで先生の説明を聞き流しながら奈央さんに与えられた任務について考える……でもよくよく考えてみればこの任務って既に達成されてるんじゃないか？　あの夜以降トワイライト様には会ってはいないけど普通にお祭り回れるぐらいの親密度はあるような気がする。

後は、きつかけさえあれば……あっ！ 一つあるじゃん！

授業終了を告げるチャイムが鳴ると僕は急いで教室を出る。そして寮の自室に戻る。幸いなことに部屋には誰もいない。

僕は押入れの中に収納している布団を全て取り出し、押入れの中に隠していた紙袋を取り出す。中を確認すると、キッチンとあの夜トワイライト様が貸してくれたレオン寮の制服が収められている。

僕がコレを持つていることがバレたら一樹達に見られたら何て言うか……僕は手早く布団を片付けると寮を出る。

そういえばトワイライト様ってどこにいるんだろう？ そもそも他寮の生徒とは関わらないからなあ。困った。……仕方無い。一度、レオン寮に行ってみるか。確かこっちだったよな。

◇◇◇

「ダメだ！ ダメだ！ 紹介状も成しに他寮の生徒がこの格式高い紅獅子寮に入れるわけないだろ！」

「そんなあ、そこをなんとかありませんか？」

「ダメだ。ほら、帰えった帰えった」

僕はレオン寮の前に立つ門番を睨みつける。前来たときは夜でしかも裏口から入ったから気付かなかったけどレオン寮には門番がいたらしい。しかもレオン寮の生徒からの紹介状が無いと他寮の生徒は入れないって、そんなのあんまりだろう。

どうしようかなあ。卯探し大会までそこまで時間は無いし。

「あれ？ ラク！」

「あ、エヴァン先ぼツ！」

僕は突然後ろからエヴァン先輩に抱きつかれる。しかも、何故かエヴァン先輩は泣いていた。

「心配したんデスヨ！ あのご飯の後、出ていった後全然会わなくて！ しかもアンナ占いも出たし！ ワタシ！ ワタシは！」

占い？ そういうのもあったな。模擬戦の準備とかですっかり忘れてた。

たしかに全然エヴァン先輩とかに会ってなかったなしあんな感じで出たら心配するか。「すいません。ちよつとあの後、色々あって」

「占いの件とか大丈夫でしたか？」

「ええ……まあ。アハハハハ」

危うく、追い込まれて飲酒するところでした……とは言えない。というか、それに関して

は全面的に僕の意思の弱さが原因だし。

「あの、それよりお金とか大丈夫でしたか？」

「おう……まあ、ダイジョウブデシタヨ」

エヴァン先輩は目をそらしながら言う。

あ、これは大丈夫じゃないな。おおかた理沙が二人前ぐらい食べたのだろう。本当に申し訳ない。

「あの今、お金払いますよ」

「それはダメデス！ あれは、ラクの為のパーティー！ それなのにラクがお金を払ったら可笑しくなりマス」

エヴァン先輩はキツパリと断る。その意思は堅そうだったので僕は甘えることにした。

「おう、それでラク。どうして我がレオン寮に？」

「いや、それが……その」

まあ、任務のことさえ話さなければ良いか。僕は、エヴァン先輩に耳打ちする。

「実は、トワイライト様に会いたくてここに来たんです」

「What- ラク！ 本気で言ってるんデスカ！ あの冷徹寮長に会うだなんて！ 悪い事は言いません！ 辞めた方が良いデス！ 命がいくらあっても足りませんヨ！」

エヴァン先輩は僕の肩を掴むと鬼気迫る表情で僕に説得する。いやいや、冷徹寮長って……確かに違反者には厳しい感じだったけど、そこまで恐れる感じかなあ？

「はっ！ もしやラク！ ミス・ナオに思いが届かなかったら次は寮長にッ！」

「いやいやいや違いますって！ 僕、そこまで節操なしじゃないです！ それに、僕の恋はまだ終わってないですから。ただ、そのちよつと返したい物があるだけで」

「なる……ほど……分かりました。では、ワタシが寮長のところに案内しまショウ」

「えっ、場所分かるんですか？」

「はい。ただし、確実に話せるとは限りませんよ」

エヴァン先輩に連れられ僕は部活棟の校舎に向かう。部活棟はいつも授業を受ける本校舎とレオン寮の隣に存在する四階建ての建物だ。学園に存在する数多の部活動の部室はこの建物に集約されている。

部活棟の中は活気に満ちており、少し呆気にとられた。

「部活棟に入るのは初めてデスカ？」

「あ、ハイ。僕、部活入ってないので。ていうか、先輩こそ大丈夫なんですか？ その部活は？」

エヴァン先輩は魔術部という古今東西あらゆる魔術や占いを研究する部活に所属している。しかも、エヴァン先輩の占いは良く当ると評判なので、部活の時間は悩みを盛った生徒が部室に来て忙しいって前に言っていたような？

「……今日は用事があったので部活は休むことにしたのデス」

用事……か。実は彼女と会ってたりして……先輩、決行モテそうだな。

「なんですか？ そのニヤけ顔は？」

「な、何でもありませんよ。それより、まだかかるとは？ 決行登ったような？」

「後、もう少しデスヨ。この部活棟の最上階が寮長や学生長が使う部屋が集まっているマス。この時間なら恐らく会議をしているはずデス」

「デメエ！ いい加減にしろよ！」

「だから！ 何度も言っているだろう！」

僕が三階の階段を登り切った所で怒号が聞える。僕とエヴァン先輩は顔を見合わず。

「言ってみますか？」

「まあ一応、行ってみましょう」

だいたい予想はつくけど。僕とエヴァン先輩は半分呆れ、半分野次馬根性で怒号が聞えた方向に向かう。

怒号が聞えたところには既に生徒達の壁が作られていた。そして生徒達の中心には、数十人の男子生徒達がにらみ合っていた。服装からしてレイブン寮の野球部とレオン寮のクリケットチームが争っているみたいだ。

他寮同士で争うのはいつものことなので別段珍しくは無いが、双方とも運動部なだけに体が多きく迫力が凄い。巻き込まれたひとたまりもない。ここは速めに退散するべきだな。

「先輩行きましょう。巻き込まれて怪我でもしたら損です」

「そうデスネ」

僕とエヴァン先輩はその場から離れようとした時だった

「ええい！ 貴様ら道を空ける！ 何があった！」

突如、僕の背後から聞き覚えのある声が聞える。おずおずと振り返る。

そこには白髪の髪と堅物そうな鋭い瞳を持った生徒が立っていた。紅と黒を基調とした制服を着ている。レオン寮の生徒か。しかも胸にはレオン寮の学年長だということを示す赤い薔薇が刺されている。この騒ぎを聞きつけてきたのかな？ そして腰にはサーベル……って、何でサーベル！ いやこのサーベルはまさか！

僕の頭にトワイライト様の部屋に入った記憶が呼び起こす。あの時は必死に逃げてたから顔は良く見てなかったけど間違い無い。この人、いきなり俺に斬りかかった人だ！ 待てよ……もしかしてこの人が銀司さんが言っていた凄腕の護衛か……ヤバい急に心配になってきた。

白髪の生徒の言葉を聞き生徒達は二つに分かれ道が出来る。その道を堂々と白髪の生徒は通る。

この学園で自分よりも地位の高い生徒の登場に野球部とクリケットチームの生徒はお互

い掴んでいた手を離し、言い争いをしていた口を閉じる。

「お前からこの二つのチームのキャプテンは誰だ？」

白髪の生徒の言葉にオズオズと二人の学生が手を上げる。野球部の主将は一回り体が大きく坊主の生徒。クリケットチームの主将は背が高い長髪の生徒だった。

「そうか」

白髪の生徒は手を上げた二人に近づく。そして――

「フン！」

坊主の生徒の頭を殴り、長髪の生徒の腹に拳を入れる。当然の攻撃に二人の生徒はその場に蹲る。

白髪の生徒は腰に対等していたサーベルを抜き切っ先を二人に向ける。

「貴様ら！ ここは喧嘩をする場では無く健全な精神と肉体を育てる部活棟だ！ にも関わらず我欲に溺れ拳を振るうというなら、この俺が今ここで叩っ切る！」

白髪の生徒の気迫に押され、二人の生徒の顔は青くなる。そして、周りの生徒達の空気も凍り付く。

「何をやっているの！ チャック！」

「お、お嬢様！」

チャックと言われた白髪の生徒はすぐに振り返りその場に片膝をつきひざまずく。チャックさんが膝まずいたのはレオン寮の寮長トワイライト様だった。

トワイライト様は鋭い目つきで目の前の惨状を確認すると重々しく口を開く。

「チャック、これはどういうこと？ 貴方、喧嘩を止めると言って部屋を出たわよね？なのに、なんでワタシの目の前で生徒二人が地面に倒れている訳」

「はっ！ 喧嘩を止めるためにベースボールチームとクリケットチームの双方キャプテンに同じだけの罰を与えました」

チャックと言われた生徒は自分の手柄を説明するかのよう誇らしげに放つ。

「チャック。貴方、後で反省文ね」

「ッ！ し、承知しました」

あ、チャックさん多分脳筋だな。

トワイライト様はその場に膝をつくと地面に倒れる二人に手を差し出す。

「ワタシの部下が申し訳ないことをしました。さ、この手をとって」

「あ、いや……喧嘩してた俺達が悪いし」

「寮長プリンスが謝ることではありません」

「そう言ってくれると嬉しいわ。それで、どうして喧嘩をしいたの？」

「それはクリケットの奴らが急にグラウンドを使うって言い出して。今日は俺達を使う予



定だったのに」

「だから説明したじゃないか！ 近々大会があるから今週はグラウンドを使うと！ 許可書もとつてある！」

クリケットチームの主将が出した許可書をトワイライト様は確認する。

「確かに本物の許可書ね。ベースボールのキャプテンさん、ここは引いてくれませんか？ その代り、クリケットチームは大会が終わった次の週はグラウンドの練習は使わないこと、ということでしょうか？」

「まあ、それなら」

「分かりました」

どうやら話は纏まったようで、二人のチームはゾロゾロと去って行った。チャックさんが来たときはどうなるかと思っただが、即材に二つの集団を纏める手腕は流石トワイライト様だ。

と、丁度いいや。

「トワイライト様！ お久しぶり」

「誰だ貴様！」

突如、僕の目の前にサーベルの切っ先が向けられる。あ、危ねー！ 銀司さんと模擬戦してなかったら確実に刺さってた。

見ると、片ひざをついた状態で抜刀したらしい。

「あ、あの。ぼ、僕の名前は藤堂楽。高等部二年、黒鴉寮所属です」

「レイブンだと。何故、レイブンの生徒がお嬢様に話をする必要がある？」

「いや、その……」

僕はこの状況を収集するために目でトワイライト様を見る……あれ？ 全然、目を合せてくれないんだけど？ ちょっと！

「答えられないという事は何かやましい思いがあっってお嬢様に近づこうとしているということだな……よく見れば貴様、どこかで会わなかったか？」

「ッ！ な、なんのことでしょー」

ヤバイ。完全に怪しまれている。そりゃそうだ。普通の他寮の生徒が他寮の寮長と接触することなんて無いんだから。

ただ雰囲気は最悪だ。周りのレオン寮の生徒達も俺を警戒し睨んでいる。下手に答えれば首が跳びかねない！ ど、どうすれば……

突然、僕は襟首を捕まれ後ろに引っぱられる。

「おおー！ ここにいましたかラクウ！ さ、魔術部の部室はここですよ！」

後ろを見ると冷や汗を掻きながらぎこちない笑みを浮べたエヴァン先輩は僕の襟首を掴んでいた。

そのまま、僕はエヴァン先輩により部室棟を連れ出される。部室棟の敷地を出たところでエヴァン先輩は襟首から手を離す。

「ラク！ 何を考えているんですか！ いきなり、あんな暴拳に出るなんて！ 着られてもしかたありませんよ！」

「す、すいません。まさか、あんなことになるなんて思わなくて……あの、白髪の……チャックさん？ って何物なんですか？」

「チャックさん？ ああ、チャック・チャールズのことデスカ。彼は、我が寮の高等部二年の学年長デス。そして同時に寮長のボディガードデス。ですからいつも寮長にピツタリとくっついて怪しい生徒や危険な生徒には容赦なく暴力を振るいマス！ 噂では、裏で何人もの生徒を粛正してるとか……ついたあだ名は串刺し執事！」

つまり、トワイライト様とパーティーを回るためにはチャックさんが最難関の壁という訳か……いや、あの強さなら大丈夫な気もするけど。でも奈央さんとえられた任務。槍宇遂げたい気持もある。

さて、どうしよう……あっ！ そうだ！

「ありがとうございます。エヴァン先輩！」

「あっ！ ちょっと！ ラク！」

僕はエヴァン先輩に例を言うとう自分の自室に戻るのだった。

## 十一話

『なるほど、串刺し執事、チャック・チャールズ……か。まさか最強の味方がこの場合は、最悪な敵になるとはなあ……』

「そうなんです。まさか、あそこまで強烈な人だとは思わなくて。結局、まだ一回もトワイライト様とは話せていません」

僕は布団を頭の上から被りながら、真央さんに貰った番犬の証であるバッチに話かける。エヴァン先輩と別れた日の夜。就寝時間になった瞬間、バッチから今回の収穫を報告しろ、と真央さんから通信が入ったのだ。こっちから話すつもりだったので丁度良い。

それにしても、こんなに小さいのに綺麗に声が聞こえるなんてどういう仕組みなんだろう？ 分解して調べたい。……少しぐらい、良く無いか？

『そのバッチを分解して中の構造を調べたりしたらお前を処分する』

うっ！ バレる。

「な、なんのことでしょ？」

『言っておくがそのバッチは影狗家お抱えの技術者が幾百年の研鑽の末に確立した物だ。壊したり、解体したりして情報を抜き取るようなことをすればお前は影狗家を敵に回すこ

とになる。覚悟はあるか？」

「……絶対に壊しません」

危なく人生終了することだった。

「あのそれで一つ、お願いがあるんです」

『お願い？』

「そのトワイライト様と二人つきりになる状況って作れませんか？」

『なるほど……いいだろう。少し力を貸してやる。明日の放課後、本校舎の最上階に來い』

そこで通信が切れる……よし！ これで明日は奈央さんと話せる！ 僕は高鳴る鼓動を押さえながら眠りについた。



次の日。約束通り校舎の最上階に辿りつく。そこには、窓際の壁に背付けて奈央さんがいた。そのたたずむ姿は、まるで絵画のように美しい。

「お待たせしましたッ！ 奈央さん！」

「いいえ、私も今来たところです楽さん……藤堂楽。お前、自分が黒狗奈央と会いたいか、そういう私情で俺を巻きこんだ訳じゃないよな」

「まっさかあ……さ、それより行きましよう奈央さん。遅刻をしては黒鴉寮学年長の肩書きに傷がつかますよ」

「……そうですね、楽さん」

奈央さんは僕に笑みを向ける。言わずもがな僕は胸の鼓動が高鳴る……作戦成功。

僕と奈央さんは最上階の真ん中の部屋の扉を開ける。部屋の広さは四畳ほど。シンプル。丸い机と椅子が二つしかない。ここは、談話室。機密性が高く誰にも聞かれたくない話をする部屋である。

部屋内には既にトワイライト様とチャックさんがいた。トワイライト様は椅子に座り優雅に紅茶を飲んでいる。その後ろではチャックさんが毅然とした姿で佇んでいる。美形二人が並ぶと絵になるなあ、と見とれていると

「遅いぞ貴様ら！ お嬢様を待たせるとは何ごとだ！」

まあチャックさんの怒号でその気持は霧散するんだけど。

「チャック」

カチツとティーカップの音を立ててチャックさんの行動を諫める。

「申し訳ありません。少々遅れました」

奈央さんはサラリとチャックさんの怒号を交わす。

「あら？ ミス・エイコク。アナタ一人で来ると聞いていたけど？」

「そちらもかねがね申し訳ありません。少々事情が変わりまして。こちら学友の藤堂楽さんです」

僕は、なんとなく雰囲気で頭を下げる。

「貴様、あの時の……」

チャックさんが僕に殺気にも似た気迫を飛ばす。やべー完全に不審者扱いされてるう。気まぎらう。

ただしトワイライト様も奈央さんもそんな僕を無視。奈央さんは席に座る。

「それで話というのは？」

トワイライト様が早速、今回の話し合いについて始める。そういえば何の話合いなんだろう？ 僕も聞いてないや。まあ、学年長と寮長の話し合いだし多分学園のことだろうけど……。

「今年の復活祭イースターについてです」

「復活祭に？ 珍しいですね。黒鴉寮が復活祭に関わるなんて。いつも我々、紅獅子寮に任せているのに。何か、狙いがあるんですか？」

「今年から黒鴉寮も他国の文化をより知っていきこうという方針になっただけです」

「なるほど素晴らしい考えだと思います」

「ありがとうございます。なので今年から、高等部も復活祭に参加するのですが……つきましては一つ問題がございました」

「……中庭の収容人数ですね」

「流石レオン寮の寮長。話がはやいですね。ですから一つ新たな場所をご提案したく」

中庭の主要人数……あ、そうか！ いつもは殆どレオン寮の生徒だけだから中庭で開会式とか成績発表とか出来るけど今回は黒鴉寮の生徒も全員参加するってなったら中庭には入りきれない。だから新たな場所を提案する。これはそのための会議……というのは表の話。

奈央さんの本当の狙いは暗殺者から狙撃ポイントを奪うこと。勿論、黒鴉寮が勝てば良いだけなんだけど……まあ念には念を入れてということなのだろう。

「どこですか？」

「校下街の中央広場はどうでしょう？ 我々、黒鴉寮が話をつければ貸し切ることも可能です」

「なるほど……正確な資料はありますか？」

「こちらに」

奈央さんは持っていた資料を机に出す。トワイライト様はその資料を細かく見る。

「……なるほど……広さは問題ありませんね……設営の資料などはありますか？」

「それは……あら？ 楽さん資料は持っていますか？」  
「えっ？」

聞いてないぞ僕は。

奈央さんの顔を見る。奈央さんの視線は「合せろ」と僕に語る。なるほど。僕の要望を叶えられるって訳ね。演技には自身無いんだけど……

「す、すいません。持ってきてないです……」

「はあ……分かりました。取ってきます」

演技だと分かっているも奈央さんに落胆されるのは胸が痛い。

「一人じゃ大変でしょう。チャック。アナタも付き合いなさい。ついでにダージリンにあなたも菓子もお願いします」

「し、承知しました。こっちだ、行くぞ」

チャックさんは苦虫を噛みつぶすような表情で出ていく。

「三十分は時間を稼いでやる。その間にケリをつける」

真央さんは耳元でささやくと部屋を出て行く。

二人は出ていったことを確認したトワイライト様は一口、紅茶をすすする。

さて、こっからどう話を振るか……トワイライト様、どうも僕から距離を取りたそうだしなあ……普通に話を振って良いものか……

「それで……あの後……からどうなの？」

「えっ？」

「何よ、その顔は？」

「いや……話かけてくれるとは思わなくて。トワイライト様、僕から距離を取りたがっていると思ってたので」

「距離を取ろうなんて思っていないわよ」

「でも、昨日とかチャックさんに剣を向けられた時とか何も言ってくれなかったじゃないですか」

「それは……ワタシにも色々立場があるのよ。そんなことより！ 例の件はどうなったの！」

トワイライト様は机を強く叩き身を乗り出す。

「僕の恋愛のことですか？」

「そうそれ！ 何か、進展はあったの？」

相変わらずこの手の話題には食いつきがいいなあ……進展か……

「まあ、あの夜よりは進展しましたよ。とりあえず普通に話せるぐらいには」

「そう、それは良かったわ」

トワイライト様は小さく微笑むと椅子に座り直す。そして紅茶を飲む。

「あ、そうだ！ これ前、貸してくれた奴」

僕はレオン寮の制服が入った紙袋を渡す。

「あら別に処分してくれて良かったのに」

「そういうわけには行かないですよ。トワイライト様に貰った物を勝手に捨てるなんて」

「……そう、ですか」

あれ？ なんか僕不味いこと言ったか？ 明らかにテンションが下がったような……。

「ねえ、アナタは普段どんな生活をしているの？」

「え？ 普段って？ 黒鴉寮の生活ですか？」

「そう、少し教えて貰えない？ ワタシも奈央さんの話を聞いて他寮のことを知りたくなつたのよ」

「良いですよ。って言ってもそこまで面白いことはないですけど。いつも通り寮から起きて学食でいつものを黒の壺定食を食べて」

「クロノイチテイシヨクって？」

「あ、一番安い定食ですよ。ご飯と味噌汁と鮭の塩焼きのえつと……イギリス式に行ったらセットですね」

「なるほどセットね」

「はい。それで、それを買って友達のエヴァン先輩とラビと理沙と一緒に食べるんです」

「エヴァンとは星占いのエヴァン？」

「そうです。後、ラビはカスタ寮で理沙が俺と同じ黒鴉寮です」

「アナタ全部の寮の生徒と仲良いなんて……なにげに凄いわね」

「よく変わり物って言われます」

「……アナタが羨ましいわ」

「羨ましいですか？」

最近、けっこう不運な目に遭っているような。不良生徒にボコボコにされたりとか、好きな人が男だったりとか、退学の危機になったりとか。

「羨ましいわよ。ワタシは友達と朝食を食べることも、他寮の生徒と仲良くお喋りしたこともないわ。六年間もこの学校にいるのにな」

トワイライト様はニコリと小さく笑う。ただしその笑みはどことなく寂しそうで――

「あの、だったら僕と普通の学生しませんか！」

「えっ？」

あっ……何言ってるんだ……僕。

「普通の学生って？ 何するの？」

「え、えつと……普通の学生のデ、デートとか」

トワイライト様の顔が固まる。

あ、ヤバい選択しを間違えた。そりゃそうだよな！ 良く知らない生徒からいきなりデートに誘われたらそんな顔になるよな！

しかし、暫く無言の後

「プッ！ アハハハハハハ！」

「え？」

トワイライト様は笑い出した。

「アハハハ、お腹痛い。はあはあ、アナタが初めてよトウドウラク。ワタシをデートに誘ったのは」

「すみません！ いきなりこんなこと言って……不敬でした」

「そうね不敬ね。このことが寮の人や、それこそチャックに知られたら、アナタ、サーベルで串刺しよ」

それはイメージ出来る。

「だから、黙ってて上げる。その変わりエスコートをしてくれる？ 大衆小説にでてくるような、素敵なデートを」

「お嬢様！」

突然、勢い良く扉が開き、両手に大量の荷物を持ち険しい顔をしたチャックさんが現われる。その後ろには奈央さんもいる。

チャックさんは荷物を地面に置くや否や、すぐにトワイライト様にかけてやる。

「大丈夫ですか！ この男に何か不埒なことをされませんでしたか？」

「されてないわよ。それより、キチンと仕事は果たしたの？ 頼んだ物は持ってきた？」

「はい、コチラに」

チャックさんは、資料をトワイライト様に渡す。次に手際よくティーセットの準備をする。

「チャック。後、ティーセットを一つ用意して。ミス・ナオ。これからの話はお茶を飲みながらでも」

「ええ、ではいただきますよう」

奈央さんは席に座る。

それから二人はお茶やお菓子を楽しみつつ、イースターについて話会った。話合いの結果、イースターの開会式や閉会式の場所は奈央さんの予定通り、校下街の中央広場に決まった。

「では、後日。下見を兼ねて行くというのはどうですか？」

「招致しました。では、追って下見の日時を連絡します」

トワイライト様は、席を立ち上がり部屋を出ようとした時だった。

「あっ」

「危ない！」

トワイライト様は僕の目の前でつんのめる。僕は咄嗟にトワイライト様を支える。

「お嬢様。大丈夫ですか？」

「ええ。トウドウラク。アナタもありがとう」

「いえ、怪我が無くて良かったです」

トワイライト様はお礼を言うのと部屋を出て行った。

足音が完全に消えたのを確認したところで、奈央さんは口を開く。

「で、上手くいったのか？」

「真央さんに話すことはありません」

トワイライト様は守りたいけど真央さんの命令には聞きたくない。

「楽さん。それで、トワイライト様と後夜祭を回る約束は出来ましたか？」

「えっと、トワイライト様をデートに誘うことができました」

気がつけば、僕は側頭部を蹴られ地面に倒れていた。

「誰が、デートに誘えと言った！ 俺は、後夜祭に誘えと言ったんだ！」

真央さんは憤怒の形相で倒れた僕を踏んづける。

「そ、そんなこと言っちゃって、同じ寮でも無い寮長をいきなりパーティーに誘えませんか！ それよりかは、もう少し親密度を上げて誘ったほうが良いと思って！」

「馬鹿か貴様は！ 既に暗殺者はこの島にいるかも知れ無いですぞ！ そんな状況で学園の中ならまだしも、校下街をデートだと！ 任務を失敗させるつもりか！ もう、貴様には頼まん。デートの件だけ断っておけ」

そういうと真央さんは部屋を出て行った。

「痛ててて」

僕は痛む体を起こす。

たしかに真央さんの言うことは分かる。だけど……あんな顔を見せられたら……。

「あれ？ なんだこれ？」

ポケットから落ちた物を拾う。紙には「来週の週末。会場の下見を兼ねていきませんか？」と書かれている。

これ……だいたいぶ楽しみにしてるよなあ。据え膳食わぬは男の恥！ ここまでされて引ける訳がない！

僕は痛む体を引きずってある場所に向う。



「という事で頼む！ トワイライト様とデートすることになったからデートプランを一



緒に考えてくれ！」

奈央さんとの話合いが終了した後、僕が向かったのは食堂だった。そして、そこには、予想通りいつもの席にエヴァン先輩、ラビ、理沙が夕食を食べていた。

そして僕は三人を見つめるや否や頭を下げた。

僕の突然の言葉に理沙は目をパチクリとしばたせ、ラビは特に驚くそぶりも無く夕食のカレーを口に運ぶ。そしてエヴァン先輩は顔を青くさせワナワナと震えている。

「ラ、ラ、ラ、ララララクーラー！！ 何を考えているんデスカ！ あれほど言ったじやないデスカ！ 辞めとけと！ 命がいくらあっても足りない！」

エヴァン先輩は僕の肩を掴むと勢いよく戦後に揺らす。目が、目が回るう！

「エヴァン先輩！ 辞めて！ ストップ！ ストップ！」

「ああすいません。つい興奮してしまいマシタ」

エヴァン先輩は肩から手を離す。僕は地面に両手をつく。うう、気持ち悪い。

「えーっと。いきなりで良く分からないんだけど。とりあえず、何か頼みにいったら楽？ 食堂で何も頼まず他寮の上級生に折檻されている状況は……視線が、さ」

言われてみると確かに滅茶苦茶視線を感じる。なんならウチの寮の先輩とか、俺が他寮の人にイジメられると思ってる今にも襲いかかりそうだし。

「そうだな。先輩のマッサージのおかげで肩も軽くなったし」

苦し紛れの言い訳を言いつつ僕は手早く日替わり定食を買う。因みに、内容は肉ジャガだ。

再度、席につくとエヴァン先輩が僕に話しを聞く。

「それでは説明して下サイ。どうしてラクが寮長とデートをすることになったのかを！」

エヴァン先輩はグイッと顔を近づけて睨みながら僕に話す。こんな険しいエヴァン先輩見たことない。というかやけにエヴァン先輩、僕とトワイライト様の関係を気にするなあ。

理沙が横から割って入る。

「かくにーん。ねえ、楽。トワイライト様ってレオンの寮長のトワイライト様のこと？」

「そうだよ」

「てことは楽は、もう奈央さんのことはもう諦めた訳？」

「いや、そうじゃなくて今日、トワイライト様とたまたま話す機会があったんだよ。それで、ちょっと色々あって……」

「それで他寮の寮長にして一国をお姫様をデートに誘えるって……。その豪胆さがあれば、奈央さんの時もっと色々簡単にできたような」

「無理無理！ 奈央さんを前にしちゃうと緊張しちゃうから！」

「楽の判断基準よく分からないわぁ」

理沙が天井を仰ぐと今度はエヴァン先輩が割って入る。

「そんなことより！ どうして楽は寮長をデートに誘ったんデスカ！」

「いや、会話の中で普通の学生みたいな生活をしてみたいって言って、その表情が……凄く寂しそうだったから」

「つい言ってしまった、と。相変わらず人を助けることに関しては考え無しだよね」

「ま、そのお人好しにオレ達も救われるたんだがな。エヴァン先輩、コイツがまた失恋して落ち込むことを心配しているかも知れ無いけど今回は人助けだし、その心配は無いと思うぞ。それに……また落ち込んだらオレ達が慰めれば良い」

ラビが助け船をだす。その言葉に理沙も乗った。

「そうそうまた、美味しい物を食べれば良いんだよ！」

「リサはただ食べたいだけでしょ……まあ、そうですね。何を言ってもラクはやるでしようし。良いですよ。手伝ってあげマス！」

最終的にエヴァン先輩も乗ってくれた。本当に僕にはもつたいない人達ばかりだ。

「ありがとうございます！」

僕は再度頭を下げる。

「しかし、実際どうしましょうか？ 普通のデートと言ってもフンワリしすぎてマス！」

確かになあ。ていうか僕もデートしたことないし。

「うーん。やっぱり定番は校下街をブラリと巡ることかなあ。美味しい物を食べたりとか」

「だがただ回るのも芸が無い気がする」

「そういえば恋愛小説みたいなデートを期待しているとも言ってたような気がする」

「恋愛小説みたいな……か……」

僕は、頭を悩ませる。なぜなら僕は全員大衆小説読というか本を読まない。

僕は時間があれば新たな発明品を作りたいし。理沙は基本的に薬学の本ばかり読んでる。ラビも本を読むような感じじゃない。エヴァン先輩も同じだろう。

あれ？ もしかしてこのメンバーで人の恋愛をどうのこうのって無理だったんじゃない？

そう思うと僕の告白が失敗したのも必然のような気がしてきた……。大丈夫かな。今回のデート。

暫く僕は頭を捻った結果、一番最初に音を上げたのは理沙だった。

「ああ！ 無理分らない！ だいたい私、他寮の寮長のことなんて知らないし！」

それを言ってしまったらおしまいだ。

「エヴァン先輩。もうここはいつも通り占いで何か案をだすのはどうだろう？」

「ラビの案にさんせいー」

「……分かりました」

エヴァン先輩はいつも通り懐から水晶を取り出すと手をかざす。そして数秒間、水晶をジッと見つめる。

「……水が、見えマス」

「水？」

僕は頭を捻る。確かにここは回りを海に囲まれているけど……海水浴にはまだ早いしなあ。

「湖のことじゃないか？」

ラビがポツリと言葉を零す。

「湖？」

「そうだ。たしかこの島には大きな湖があると聞いたことがある。なんでも、その湖が綺麗で王族ライゼツヤの生徒はこっそり寮を抜け出してはそこで遊んでいると聞いたことがある」

「それいいじゃん！ 湖で男女が愛の告白をするなんて素敵！」

綺麗な湖かあ。今度、奈央さんを誘ってみるのもいいかもな。

「良いかもな。ありがとうエヴァン先輩！」

「え……ええ、良かったです」

「じゃ、最後は湖に行くってことで計画を立てよう！」

僕達は就寝時間いっぱいまでデートの計画を立てた。

## 十二話

いまだ太陽が空に顔を出さない早朝。例の山の中にある闘技場に破裂音が響く。

「うーん。もう少し肩の力を抜いた方がいいな」

理由は、僕は訓練として銀司さんに番犬としての特訓を受けているからだ。因みに正式に番犬となった日から訓練はずっと見え貫っている。

今日は射撃の訓練。持っている銃は、僕が自作したゴム弾を発射させる銃だ。

「肩の力を……ですか？」

「そう。銃に必要なのは、姿勢と脱力。それさえ出来れば」

銀司さんは素速く懐からリボルバー銃を抜くと、連続で三回引き金を引く。そして弾丸は数十メートル離れた的の中央を全て打ち抜く。

因みに僕が撃った弾丸は的の隅をかすれば良いほうだ。

「と、こんなもんよ」

「おお。銀司さんって刀以外も扱えるんですね」

「ま、戦場じゃ刀以外も使えないと生き残れなかったからな」

そう語る銀司さんの表情はどこか寂しそうだった。どうやら、あまり踏み込まないほうが良いらしい。

「まあ、お前は銃や刀より発明品で戦ったほうが良いかも知れ無いかな？ なんかまた作

ってねーのかよ」

「作ってますよ。銀司さんの模擬戦の後から」

銀司さんと模擬戦をして分かったが今の僕の発明品では命がいくつあっても足りないことを痛感した。

そこで僕は今までの発明品で得た技術を全て詰め込んだ新たな発明品を作っている……のだが

「まあ正直。難航はしてますけど」

「良かったら俺がアドバイスしてやろうか？ 軍にいた時兵器の学んだからな。いまで世に出ていない実験途中の秘密兵器とか色々知ってるぜ」

「それは魅力的ですけど辞めておきます。やっぱり、発明家は自分の手で新たな物を作りたい。それが発明家の誇りなので」

僕の答えを聞き銀司さんは僕の頭に手を置きクシャクシャにする。

「そうか。じゃ、頑張れよ」

っと、そろそろ時間か。

「すみません。今日はこれから用事があるので今日はこのぐらいで」

「ん、用事って例の番犬の任務関係か？」

「まあ、そんな感じですよ。そういえば銀司さんのほうはどうなんですか？ 怪しい人とか見つかりました？」

「いや全然だ。色々調べてはいるがよカスタ寮宛ての荷物が多いとかその制度だ。千草のも探してるみたいだが……奴さん全然、尻尾を出さないらしい。まあ、相手も一流の暗殺者ってことだな。そんなことより、時間ねえんだろ？」

「あ、そうでした。じゃあ、僕はこれで！」

暗殺者はまだ見つかってないか……今日はデートだっていうのに真央さんの言葉がチラつく。いやいや、まあデートのことを知ってるのは真央さんとトワイライト様。あと理沙達だけだし、大丈夫！

今は暗殺よりもデートを成功させる方が大事だ！

僕は緊張から来る動機を深呼吸をすることで収めながら学校に戻った。



お昼前。約束通り校下街の中央広場に辿りつく。けど……トワイライト様が見当たらない。

約束を間違えた？ いや……そんなわけないしな。ん？ なんかレオン寮の生徒が一人、人手を振ってる？ あ、こっち来た。

「こちらです。トウドウラク」

「うわっ！ トワイライト様！」

僕に近づいてきたのはトワイライト様だった。ただしその顔は金を溶かしたような美しい金髪ではなく赤に近い茶髪だった。

「シー。ここでその名前を出さないで下さい。ワタシ……ここには誰にも言わずに来てるんですから」

「つまり、この髪は変装……と」

「はい。唯一の幼なじみに貸してもらいました。似合わないですけど」

トワイライト様はカツラをイジリながら照れたように笑う。

「いやそんな！ 凄く似合ってます」

「ッ！ ふふ、ありがとうございます。それにしても……ここが中央広場ですか。思っていたよりも広いですね。これなら十分に皆を集めることができる。流石、奈央さんね。目の付け所が違うわ。それに……校下街も活気があって素晴らしい」

もしかしてトワイライト様って校下街に来たことないのか？ まあ、立場を考えれば当たり前か。

「じゃあ、早速行きましょう！ トワイライト様」

僕は早速、予め考えていたデートプランにそって案内しようとした時だった

「ストーツプ！ トウドウラク。先ほども言いましたがワタシは今回、お忍びで来てるんですよ。トワイライト様ではなく、シャーロットと呼んでください！」

トワイライト様の突然の提案に面を食らう。が、たしかにデートで名字呼びは可笑しいか。

「じゃあ僕のことでも楽って下の名前で呼んでください」

「ええ分かったわ。ラク」

トワイライト、じゃなくてシャーロットが僕の名前を呼ぶ。女子に下の名前を呼ばれるのは少しくすぐったいな。

「じゃなくて、えっと……シャーロット。一緒に回ってくれますか？」

僕はそっと手を向け再度、シャーロットをデートに誘う。

「ええ、勿論」

シャーロットの微笑みながら手を握ってくれた。

ヤバイ。緊張で喉が渴いてきた。

「じゃあ、じゃあまずはこちらです」

僕はシャーロットの腕を引き予め決めていた店に行く。

まあ店と言っても屋台の出店だけだ。ただ、出店と言っても侮ることなかれ。校下街に出されているお店は、様々な人種階級の生徒が食べるため、ある一定の基準を超えた物

のみ販売出来る。そのため出店一つをとっても味が保証されている……らしい。まあ、事に貪欲な理沙が教えてくれたことだから間違いないはず。

「これは？ チキン？」

「はい。倭国の庶民料理。焼き鳥です。どうぞ」

「ヤキトリ……」

「あ、すいません。もしかして鶏、苦手ですか？」

「あ、いえ。そうじゃなくて食べかたが分からず。ナイフもフォークもないので」

「あ、えっと見せて下さい」

僕は目の前のヤキトリをかぶりつく。塩のしょっぱさと鶏肉の甘みが絶妙！ 僕の食べ方を見てシャーロットは少し恥ずかしそうに口を広げて目の前の焼き鳥を食べる。

「ん！ 美味しい！ ソルトが絶妙ですね。それに暖かい」

それから理沙が選ぶ出店を回ったり、ラビが教えてくれたオシャレな雑貨やなどを巡る。ソのどれもがシャーロットは楽しいのか終始笑ってくれた。

どうやら僕達が知恵を振り絞り考えたデートプランは正解だったらしい。

当たり前だが僕達を付ける怪しい人物もいない。やっぱり真央さんが少し敏感なだけだった。

後は、とっておきの例の場所に行けばデートは終わり。最後に後夜祭を一緒に回る約束もすれば完璧だ。

「シャーロット。少し行きたい場所があるんだけど？」

「良いですよ。どこですか？」

僕とシャーロットは校下街を離れ森の中に入る。ラビがくれた湖の地図を頼りに歩くこと数十分。僕達はなんとか湖に辿りついた。

「わあ……綺麗ですね。でもこんな場所、聞いたことないのですが？ 良く見つけましたね？」

「友達に教えて貰いました。なんでも、カスタの王族とか貴族の生徒達の秘密の場所らしいです」

「そう……まあ、もう私達も知ってしまったからあまり、秘密といった感じはありませんね」

「ハハハ確かに。あ、船」

岸にはポツンと小舟が置かれていた。カスタの人達が置いていったのか？

「せっかくなので乗りませんか？」

「良いですね」

僕は岸に置いて会ったボート先に乗ると船体を確認する。パツと見、故障している感じはない。これならシャーロットを乗せても大丈夫そうだ。

「どうぞ。シャーロット」

僕はシャーロットに手を差し出す。シャーロットは僕の手を握りボートに乗る。

「焦げますの？」

「昔、船漕ぎの仕事を少ししてたので」

僕は昔の記憶を頼りに両手で櫂を前後に漕ぐ。すると、船は湖の水面を切り裂き前に進む。

船が湖の中央まで来た時だったふと視線を横にずらす。そこには、地平線に沈む夕焼けがくつきりと見える。その光は水面に反射し湖を朱色に染める。

「素晴らしい景色ね。アナタとデートが出来て良かったわ。ありがとう」

「よ、良かったあ」

シャーロットの言葉を聞き僕は肩の力が抜ける。

「初めてのデートだったから緊張しましたあ」

「あら？ そうだったの？ それにしては随分手慣れていたかたてつきりこの学園に来る前に素敵なフィアンセでもいたのかと思ったわ」

「恋人なんていませんよ。そんな暇無いぐらい貧乏でしたから」

「そうなの……それはごめんなさい」

「ヤバイ。気を使わせちゃった！」

「そんな！ 謝らないで下さいよ。別に哀れんで欲しくて話したわけじゃないので。それにここで学んだ知識を使って将来は一流の発明家になって大金持ちになる予定なんで！」

「そう……素敵な夢ね。なら、もしアナタが一流の発明家になったら正式に何か依頼をだそうかしら」

「本当ですか！」

もしそうになったらどれほどの金額になるか……グフフフ夢が広がる。

「じゃあ約束しましょう！」

僕はシャーロットの小指を自分の小指に結ぶ。

「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ます。指切った」

「これは？」

シャーロットは自分の小指を見て首をかしげる。

「えっと……倭国の約束の仕方です。もしかして何かまずかったですかね？」

「いいえ。ただ嬉しかっただけ。気軽に約束をしてくれることが。ワタシと約束をする時はいつも陰しように、もう後が無いって表情で約束を交わすから。本当にアナタというと非日常が味わえて楽しい」

「ああ——まただ——……」

シャーロットは微笑む。しかし、その表情は切なそうで悲しそうで……僕の大好き

な表情だった。

そんな表情をされたら——僕は気がつけば両手で包み混むようにシャーロットの手を握っていた。

「非日常なんかじゃない！　こんなこと普通なんですよ！　友達と話すことも！　校下街で遊ぶことも！　全部普通にことです！」

「でも……ワタシにはその普通が」

「できますよ！　僕が、シャーロットが非日常だと思っていること全部やって！　何回もやって！　日常にする！　だから……そんな悲しそうな顔しないでくださいよ」

「……フフフ……本当にアナタはワタシ色々な初めてを奪っていくわね……じゃあ、今度のパーティーも一緒に回ってくれる？」

「当然です！　ていうか、こっちから誘うつもりでした」

「そう……気が合うわね。ワタシ達」

パン——……

それは突然だった。突然、破裂音が森に響き鳥たちが一斉に羽ばたく。そして目の前でシャーロットが倒れる。

「シャーロット！」

僕はシャーロットに近づき体を揺らす。出血は見られない。まだ、撃たれてないのか？

「大丈夫よ。少し、音でビックリしただけ」

シャーロットは体を起こそうとした時だった僕は刃で体を突き刺される感覚に襲われる。そして直感的にシャーロットに覆い被さる。

「伏せて」

直後、断続的破裂音が響く。発射された弾丸の一発は僕の腕をかすめる。血が飛び跳ね、鋭い痛みが湧き上がる。そしてもう一発の弾丸は船に穴を開ける。船に水が入ってくる。

この船をじゃ岸につくまでに沈没する。いや、その前に狙撃される……だったら！

「息を大きく吸って！」

シャーロットを抱えて僕は湖に勢いよく入水した。

入水するまでにチラッと見た。岸までの距離は凡そ三十メートル。息継ぎで顔を出したら、その時点で撃たれる可能性もある！

間に合え僕！

僕は撃たれていない腕で、水をかき分けがむしゃらに泳ぐ。けど、腕を怪我した状態で人を一人抱えながら泳ぐのは……当たり前だけど……進まない、息が。僕の体の力が抜きかけた時だった。僕は腕を掴まれる。そして、グングンと体が前に進むのを感じる。

目を開けると、僕の腕を引いてシャーロットが泳いでくれた。数十秒後。僕とシャーロットはなんとか反対の岸に辿りつく。



「ゴホッ！ オホッ！ すいません。助かりました」

「気にしないで……それよりアナタはここから離れなさい。ワタシはアナタと逆方向に逃げるわ」

「なッ！ 何言ってるんですか！」

「恐らくこの狙撃はワタシを狙っての物。ならばワタシがアナタから離れば、アナタの命は助かるわ」

「ダメですよ！ そんな……そんなこと！」

「じゃあ、他にどうするんですか！ ここにいれば二人とも死んでしまいます！ なら、片方でも生きるほうが絶対に良い！」

「ふざけるな！ そんな馬鹿みたいなことさせない！ させてたまるか！」

「そうだな。本当にふざけるな、だ」

「だ、誰！」

僕とシャーロットは声のししたほうが向く。僕は、シャーロットを守るために前に出る。道草が揺れ森の中から人影が生れる。

僕はゴクリと生唾を飲む。道ばたの石を手のひらに収める。姿が現われた瞬間、石を投げるイメージを頭にする。しかし、それよりも先に一筋の光が僕達のほうに飛んでくる。それは小さな針があった。その針はシャーロットの首に刺さり地面に倒れた。

「シャーロット！」

僕はすぐにシャーロットに駆け寄る。息は……してる。ていうか……寝てる？

「騒ぐな！」

「ま、真央……さん」

そう森の中から現われ、針を飛ばしシャーロットを眠らせたのは真央さんだった。その後ろには銀司さんもいた。

「な、なんで二人がここに」

いや、聞く必要はないか。多分、銀司さんが僕の今日の予定を話したのだろう。それを聞いた真央さんは察した訳だ。僕がシャーロットとデートをしていることを。

真央さんの表情は能面のように無表情。ただし、纏う剣呑な雰囲気から怒っていることは分かる。

「あ、あの真央さん。す、すいません」

「銀司、コイツの介抱を頼む。アイツは俺が殺る。」

真央さんは僕を見ることなく千草先生に指示を飛ばす。

「大将がするのか？ なんなら、俺が」

「流れ弾が飛んでくる場合がある。そんな戦場でターゲットを守るのはお前だけだ」

直後一発の弾丸がシャーロットに向って飛んでくる。し銀司さんは神速の抜刀で弾丸を

切りさいた。

「なるほど、こういうことね。了解」

真央さんが腕を振るうと袖から拳銃が現われる。真央さんは流れる動作で弾丸が飛んできた方向に照準を合わせ引き金を引く。

「グッ！」

木の中からうめき声が聞え直後地面に落ちる。

「やっと会えたな暗殺者シシャー」

木の上から落ちたのは顔に機械的なゴーグルをつけ体にピタリくっついたつなぎを着た白髪の男だった。腰には革のベルトと付けておりそこに幾つものナイフを収めている。

真央さんはシシャーの足下に落ちていているライフル銃を撃ち抜き手の届かない場所においやる。

そして、シシャーの顔面に銃口を向ける。シシャーは口から針を飛ばす。真央さんは顔をずらし針を避ける。瞬間、シンシヤーは自分に向けられている拳銃を蹴り飛ばす。そして、真央さんから距離を取る。

シンシヤーは腰のベルトから二刀のナイフを取り出と、右手のナイフを投げ真央さんの持っている銃を弾く。そして一直線に真央さんに向う。

真央さんは腰に付けている小太刀を抜き応戦する。シンシヤーの刃と真央さんの刃が幾度となくぶつかり小さな火花を散らす。

しかし体格の差から段々と、真央さんは後方に飛ばされる。このままでは、真央さんが殺されてしまうのは火を見るより明らか。

僕は真央さんの一助になればと思ひ、先ほど拾っていた石を投げようとする。

「おっと、それは悪手だぜ。楽」

投げる直前、僕の腕を銀司さんが掴み静止させる。

「でも、このままじゃあ！」

「まあ、落ち着けよ」

銀司さんは僕の腕を下ろすと頭に手を置く。

「お前の気持ちは分かる。焦ってるし、申し訳ないとも思うし、挽回しないと思ってってるんだろう。でも、それを取り返すのは今じゃねえ。今、お前がするべきことは見ることだ。今後のために観察することだ。そんで信じてることだ。大将が殺るって言うてるんだからよ」

「……分かります……ました」

シシャーは隙を見て三本目のナイフを取り出す。それによりシシャーの攻撃は更に苛烈さを増す。

「あっ！」

僕は思わず声を上げてしまった。なぜなら真央さんの持っていた小太刀が手元を離れ、宙を舞い、後方の地面に突き刺さったからだ。

シンシャーはトドメとばかりにナイフを大きく振り下ろす。突然、真央さんは足下にあった小石を蹴り上げた。

シンシャーは直前で振り下ろしていたナイフをクロスさせ向かってくる小石を弾く。次の瞬間、真央さんの姿が――

「……消えた」

あの一瞬でどうやって？ 僕は、シンシャーの周りを探す。しかし、周りを見渡しても見つけることが出来ない。

「いったい……どこに？」

「周りをもっと見ろ」

「イテッ！」

僕は銀司さんに頭を叩かれる。すると、まるで霧が晴れたかのように目の前に真央さんの姿が現われる。

僕は何度か目をこする。幻……じゃないかな？ そんな僕を見て銀司さんは、ニヤリと笑みを浮かべながら説明する。

「見とけよ。アレが、俺らの大将の影狗家の家系能力だ」かけいのうりよく

「家系能力？」

聞き覚えのない言葉に僕は繰り返す。すると銀司さんが家系能力について教えてくれた。「その家に代々受け継がれる技術や体質のことだ。まあ忍術みたいな物だな。大将の場合は、自分の存在感を自由に操れる。今みたいに自分の存在感をほぼ零にして相手に視認しにくくしたりな」

「なるほど。けど、自分の存在感を操る……って、地味じゃないですか？」

「まあ地味だな。けど強力だぜ。一流の暗殺者であるシンシャーは大将を捉えられてないだろ。実際、お前も見えなかっただろう」

まあたしかに、よくよく考えてみれば自分の存在感を好きに操れるってことは、誰にも気づかれず行動出来るってことだし。もし、そんな人物がいれば暗殺も諜報もやりたい放題だ。なんとたって認識できないんだから対策のしようがない。

「因みにお前が一時的に大将のことしか考えられなくなったのもこの家系体質の応用だぞ」

「えっ、そうなんですか！」

どおりでフラれた直後はことあるごとに真央さんの顔がチラついておかしいとは思っていたけど。

「ああ。相手に自分の存在感を強く認識させて相手の思考を思い通り操る技術だ。まあ、お前の場合は自力で突破してみたのだがな」

人が失恋で傷心してる時になってことをッ！ どうせ僕が番犬のことを話さないようにさせたんだろうけどムカつく……って言える立場じゃないか、今は。

ムカつくけれど真央さんの判断は全て正しかった。シャーロット……いやトワイライト様を学園の外に出すべきじゃなかったし。実際、番犬のことを知った時にその処置をされなければきつと僕は何かの拍子にポロツと話していたと思う。

冷静になればなるほど自分が情けなくて……消えてなくなりたい。

「おオオ！」

野太い音が聞こえ僕は、ふと顔を上げる。見るとシンシャアの背後から抱きつくように真央さんが身体を合せている。そして、真央さんの腕はまるで蛇のようにシンシャアの首に巻き付いていた。

シンシャアは真央さんの腕を掴み外そうとしたり、身体を大きく動かし振りほどこうとしたりするが上手くいかず、ボキツという音を最後にシンシャアは糸が切れた人形のようにその場に崩れ落ちる。

「銀司コレの処理を頼む」

真央さんはシンシャアから離れるとコチラに近づいてくる。

「あいよ大将」

銀司さんはシンシャアの死体に駆け寄った。

「あ、あの真央さん。すいまつ」

突如、僕は側頭部に激痛が走る。そして同時に、視界が横になる。蹴られた——僕の人生これで……終わり。

目線を上げると、ゴミを見るような目で真央さんがコチラを見ている。そして、ゆっくりと足を上げ僕の腹を思いつきり踏む。

「ぐうッ！」

僕の視界は徐々に真っ暗になっていた。

## 十二話

「うう……ここは……はは、懐かしい」

僕は、周りの景色を見て思わず乾いた笑みを零してしまう。なぜなら、ここは初めて僕がこの学園の裏の顔を知った場所。地下の独房だったからだ。今回は木でできた長椅子ではなく鉄で出来た椅子に身体を拘束されている所だ。

「目が覚めたか。藤堂楽」

目の前の鉄の扉がゆっくりと開き部屋に真央さんが入ってくる。

「……真央さん。今回は、本当に申し訳ありませんでした！」

身体は拘束されているため頭を下げることが出来なけど、出来るだけ誠意が伝わるように前に傾ける。

「別に謝る必要はない。この世界で、謝罪は何の意味もなさない。失敗それはイコール死だ」

真央さんは懐から銃を取り出し眉間に押し当てる。

分かっていた。守るべき対象であるトワイライト様を危険にさせたんだ。目を覚まして、この場所で体を拘束されている現状を知った時点で、この結末になることは予想は出来ていた。覚悟もしていた。……それでも……怖い。

真央さんの指が引き金に触れる。僕は怖くて思わず目を瞑る。ああ……もつと発明………したかったな………

「ちよつと待った！ 大将！」

突如、地下室の扉が勢いよく開く。

「なんだ銀司」

「いやあレオン寮の寮長ちゃんが目を覚ましたんでその報告を。それと、まだソイツを処分するのは早いんじゃないかという異議申し立てをしにな」

「異議だと？」

「そ。レオン寮の寮長ちゃんが言ったんだ。後夜祭を一緒に回ろうって、よ」

「あんな目にあって良く言えるな」

「どうやら坊主とデートをしたのは憶えてはいるが、襲われたことはよく覚えてないらしい。多分、あまりの恐怖に脳がシャットアウトしたんだろうな」

あんなに気丈に振る舞っていてもやっぱり怖かったのか……いや、当たり前か。いくらレオン寮の寮長でも、イギリス帝国の皇帝の娘でも、トワイライト様は女子なんだ。怖いに決まってる……それなのに……僕は………

「それで、だ。大将、確かにコイツのやったことは悪手だったかもしれないねえ。それでも、無駄じゃなかった。げんに、大将の与えた任務はクリアしてる訳だし。ここはもう一度、挽回の機会を与えてみるってのも良いんじゃないかねえか」

「チツ」

真央さんは拳銃を懐に収める。

「藤堂楽」

「は、ハイ！」

「復活祭で我が黒鴉寮を一位にしろ。それが出来なければ貴様を殺す」

吐き捨てるようにそう言うのと地下の独房から出ていく。

「あの……ありがとうございます。銀司さん」

「まったく感謝しろよ。俺が朝練の時にお前の隠し事を気づいてなかったら死んでたぜ、坊主」

やっぱりか。本当に僕は嘘をつくのが苦手だな。

「あの一つ聞いていいですか？」

「何だよ？」

銀司さんは僕の拘束を解きながら返事をする。

「どうして僕をここまで助けてくれるんですか？　僕が真央さん達の正体を知った時も、今も。どうして僕を？」

「人の好意を邪推んじゃねえよ」

銀司さんはそう言い僕の頭を軽く叩く。うっ、たしかに助けてくれた人に対して失礼か。「すみません」

「まあ、俺にも利益があつてやつてるんだけどな」

「結局あるんですか」

「俺も大人だからな。お前みたいに利益勘定無しに動けねえよ」

銀司さんは寂しそうに笑う。本当に最近出会う人は皆、寂しそうに笑う人ばかりだ。そういう人を見ると……どうしようもなく、どうにかしたくなっちゃうじゃないか。

「聞かせて下さい。その銀司さんの利益ってなんですか？」

「別にただの自己満だけ。一つはただだんにガキが死ぬのは見たくねえってだけだ。そういうのはもう……こりごりなんだ。ま、あともう一つはお前なら大将を救えると思ったからだ」

「真央さんを……救う、ですか？」

「何、言ってるか分からねって顔だな」

「まあ……はい。だって、真央さん強いじゃないですか」

僕から見れば真央さんは傲慢で、すぐ僕を殺そうとする嫌な奴だけど、もの凄く強い。大抵の問題は自分で解決出来るぐらい強い。真央さんならきっと自分で自分を救ってしまおうと思う。

「強い、か。たしかに大将は強い。でも一人だ。主従関係を結んだり、他人を利用する関係を作ったりするのは上手いが、対等の関係を作るのは下手だ。そういうふうには教育をされてるし。そういう関係しか作れないようなエゲツナイ経験もしてきてる。ただ、一人の奴つてのは大抵どこかで限界が来ちまう。そうなるお前には大将の横に立って欲しいのさ」

「横に……ですか。その前に拳銃で殺されそうですけどね」

「ハハハ、ことあるごとにお前を拳銃で殺そうとするのはお前との距離感が分からねえからやっつてんだよ。ようは照れ隠しだな。げんに拳銃を向けられたぶんだけ挽回の機会は与

えられてるだろう」

たしかに銀司さんがいつも僕を庇ってくれてるからと言っても真央さんがそれを全部鵜呑みにする必要はない。

だって銀司さんは番犬で、真央さんはその主人だ。銀司さんがいくら僕を庇おうと、真央さんは何の危険も犯さずに僕を殺すことが出来る。それなのに僕はまだ生きてる……なんていうか……

「真央さんって、もしかして不器用ですか」

「今さら気付いたのかよ。そうだよ、人間関係においてわな。だからよお。お前が隣にたつて、その不器用な部分を支えてやってくれ」

支える……か。だったら今のままじゃ駄目だな。

「分かりました。やってみます。ただ、今のままじゃ無理です。なので、力を貸してください」

「具体的にどうするんだ？」

「僕の今作っている発明を手伝ってください。その軍の秘密兵器の知識を教えてください」

「おいおい良いのか？ 今朝は誇りがどうのって言ってたじゃねえか」

「誇りを持っていても真央さんの隣に立てないし、それにトワイライト様は守れないので銀司さんは数秒間、考えたのち

「分かったよ」

と答えてくれた。と、それはそうと

「それで銀司さん。まだ、拘束解けないんですか？」

さつきから良い風な話をしてるけどガチャガチャ音が鳴ってて感動が半減なんだけど。

「スマン。けっこうぎっちり結んでな。素手じゃ無理だわ。坊主、刀で切られるのと銃で撃たれるのどっちが良い？」

「えっ！ もしかしてこの鎖をそのどっちかの選択しで壊すつもりじゃないですよね！ 辞めて下さいよ！ ミスったら真央さんの隣に立つ以前にお陀仏ですよ！ 幽霊になって立てって言うんですか！」

「ガタガタ言うな！ 男だろ！」

「嫌だ！」

独房に鎖が千切れる音と、僕の絶叫が響く。

僕……真央さんの隣に立つ前に……生きてるかな？

#### 四章 復活祭と番犬

##### 十三話

トワイライト様とのデートからあつという間に三日が過ぎた。そして、今日は待ちに

待った復活祭の日なのだが……キツイ!

周りを見れば、人、人、人。けれどソレも仕方無い。なぜなら本来な黒鴉寮とレオン寮のみ全員参加。カスタは例年通り数人が参加の予定だった。なのに、急にカスタ寮の寮長も全員参加を言い出した。

結果、校下街の中央広場はギチギチになってしまった。

『ではこれで、開会の言葉を終わらせていただきます』

ほぼ全生徒が並ぶ前に舞台を作り、その上で黒鴉寮の寮長、徳永玄徳とくながげんとくさんが行った。

『では、続いてルール説明を、紅獅子寮三年学年長、イビル・レク・ルクシオンさん。お願いします』

司会進行は奈央さん、と。念には念を入れて徹底的にトワイライト様を前に出さないようにしている。

奈央さんの言葉により舞台の上に一人の生徒が昇る。金髪を短く切り揃えグラスンをかけ制服は着崩している……チャライ。こんな人が学年長やってトワイライト様怒らないのかな?

『Yo! Yo! ジャア! 初めての奴もいるからルールを説明するぜ! つつてもちよー簡単! 場所は学園の敷地内。そこに昨夜、復活祭の実行委員が隠した卵がある。オマエラは、その卵を見つけ、今いるここに設置された寮の色に染められたそカゴの中に入れるだけ! 卵にはそれぞれ数字が書かれてあってその数字が寮のポイントになるう! 因みに落として割るとゼロだ。ただし! カゴの中に入ってる卵を割るのはNGだぜ! そんな奴は即刻デッド! 制限時間は日没まで。因みに一位を取った寮の生徒には学園から賞金が出る! ヒュー! 学園長太っ腹! と、ルールはこんな感じだ! 質問はねえな?』

イビルさんは舞台から降りていく。

『イビルさん。ありがとうございます。では、これより復活祭、スタートですッ!』

奈央さんはスタートピストルを鳴らす。それとほぼ同時だった。学園の生徒は一斉に学園に向って走る。

分かつてはいたけど、この学園の生徒は他寮の勝負ごとになると勝手に国の威信を背負うため本気で挑む。そのため多くの生徒の表情がお祭りとはかけ離れた鬼気迫る表情だった。

まあ、僕もこれでヘマをこいて黒鴉寮が一位になれなかったら真央さんに殺されるので同じ表情なんだけど!

数分後、なんとか森を抜けて学園に辿りつく。

学園にはすでに多くの生徒が卵を探していた。



モタモタしていると一個も卵を見つけれず終りそうだ。流石にそれはまずい。えーっと、まずは中庭に行ってみよう。

中庭にも既に生徒が数人いた……が、まだ誰も卵を見つけてはいないらしい。僕はなんとなく中庭の噴水を覗き込む。

「あったあった」

予想通り噴水の中に一つ、桃色に塗られた卵が隠されていた。僕はそれを拾い上げる。点数は三十点かぁ。僕は、卵を予め用意していた袋に入れる。

後は……多分、木の上とかかな。

僕は近くの木を見る。予想通り、木の上の幹に緑色に塗られた卵が置かれていた。僕は懐から銃口に金属のついたフックのついたワイヤーガン『ヤミタカ』を取り出す。

『ヤミタカ』を木に向けて射出する。すると銃口からフックが飛びし太い枝に巻き付く。僕は引き金を二回連続で引くとワイヤーがゆっくり巻き取られ僕の体が持ち上がる。前までは一定の早さでしかワイヤーを巻き取ることができなかったが、改良することによって引き金を引いた回数でワイヤーが巻き取る速さを調整することに成功した。

さて、えーっと卵の点数は……おっ五十点。

僕はさっと袋に入れて、下に降りる。

「ノー、先に取られてしまいました」

「あ、エヴァン先輩。もしかして狙ってました？」

「はい。しかし、仕方ありませんね。それにしてもラクは捜し物が上手デスネ。この短時間ですでに二つも見つけるなんて」

「まあ、昔から色々な物を探していたので」

あまり良い記憶じゃないけど。

「隠した人の心理を考えながら探すを見つけやすいですよ」

「おおなるほど。それが探しものをするコツですか。ありがとうございます。私もやってみマス！」

そう言い残すとエヴァン先輩は僕の元を去っていった。

さて、後はやっぱり校舎の中かな。



僕の予想は当っており校舎の中は多くの卵が隠されていた。ただし量は多い分、点数は少ない。どうやら卵を隠した人達はけっこうゲームバランスを考えているらしい。

多分、隠した卵が少ない場所は点数が高く、多く隠している場所には点数の低い卵を隠している。

そう考えると一番探すべき場所はソコソコ広い場所か……となると食堂とかかな。

僕は早速食堂に向う。普段なら食堂には僕達のために料理を作るおばちゃん達がいるが今はいない。恐らく、夜のパーティーのために違うところで作業をしているのだろう。そして他に生徒もいない。つまり、今ここは探し放題だ。

といっても無闇やたらに探しても意味がない。

考えろく僕。倭国には木を隠すなら森の中という言葉がある。その言葉を頼るなら。

僕は食堂の裏手に回る。食堂の裏には食材を保管する食料保管庫があるからだ。木を隠すなら森の中。なら卵を隠すなら卵の中だ。

食料庫は薄暗くなかには野菜や小麦粉、米など様々な食材がところ狭しと置いてある。そして、数ある食材の中には予想通り卵を入れた木箱も存在していた。

僕は木箱の蓋を開けると中には真っ白な卵がギッシリと入っている。この中から点数の書かれた卵を見つけるのは骨が折れそうだ。

「いや、弱音を吐くべきじゃない。なんたつて僕の命がかかっているからな。えつと……」

僕は一つ一つ卵を掴み確認していく。

数十分後

「ダメだ！ 見つからない！」

僕はその場にへたり混む。宛てが外れたかな。

他を当たった方が……いや、でもここまで来て諦めるのもなあ。

「チュ」

何だろう。手に何か当たっているような？ 僕は右手に視線を移す。そこには普通よりも一

回りほど大きな鼠がいた！

「うわっ！」

僕は思わず右手を引っ込める。その拍子に右手が卵の入っている木箱に当たり傾く。僕ははとっさに木箱を掴み元に戻す。

しかし、その反動で木箱から数個の卵が出ていく。卵は僕の頭上を越えて放物線を描く。僕は自然と卵を目で追い、気づく。卵に何か書かれていることに。

その瞬間、僕は体を地面と平行にしながら低く跳ぶ。そして目一杯手を伸ばす。

「とどおけ！」

僕の願いは天に通じたのか卵は奇跡的に僕の手の中にすっぽりと収まった。僕は、小さく安堵から小さく息を吐く。

僕は卵をクルリと回転して点数を確認する。卵には、なんと百の数字が書かれていた。

僕は小さくガッツポーズをする。

これでまだ僕はまだこの世にいられそうだ。

僕はたいして警戒することなく食料庫を出る。その結果

「ト、ウ、ド、ウ、ラクーラー!!」

食料庫を出た瞬間、怒号の声と共に凄まじい殺気を纏った人物がコチラに近づいてきた。僕は自然とその場から一步離れる。それと、ほぼ同時だった。僕の目の前で銀色の光が横一文字に流れる。

「いきなりなにするんですか！ チャックさん！」

そう斬りかかってきたのは、トワイライト様の執事チャック・チャールズだった。

チャックさんはサーベルを構えたまま鋭く僕を見る。

「その卵をよこせ。もしくは割れ。それは、俺が隠し、俺が見つかるはずだった卵だ」

「俺が隠して、隠したのは実行委員のはずですよ？」

「馬鹿か貴様は！ 俺は学年長だ！ 卵の一つや二つ自分で探すのは簡単なんだよ！」

チャックさんは対して悪びれる様子もなくそう叫ぶ。そして僕に向って切りかかる。僕はチャックさんの猛攻を紙一重で交わす。

「なんで！ そこまで！」

「決まっている！ 全てはお嬢様のため！ この祭りは元々紅獅子寮のもの。つまり寮長であるお嬢様のもの！ それなのに、一位では無いなんてあってたまるか！」

チャックさんは右斜めから振り上げながら僕を切る。僕はギリギリで転がるようにして左に避ける。

僕は手早く卵を袋に入れる。続けざまにチャックさんはサーベルを上段から振り下ろす。今度は逃げ切れないと思った僕はポケットから『ヤミタカ』を取り出すとフックの部分でサーベルを受け止めた。

金属がぶつかる甲高い音と衝撃による痺れが僕を襲う。

「後！ 最近、なぜかお嬢様が気にしているオマエへの八つ当たりもあるッ！」

「九割九分それが本音でしょう！」

「馬鹿をいえ！ 七割だ！」

「訂正しても私怨のほうが勝ってるじゃないですか！」

僕はチャックさんの脇腹めがけて蹴りを放つ。しかし、僕の遅い蹴りなんて簡単に看破され避けられる。

しかし避けくれたおかげで隙間ができた。僕はすかさず『ヤミタカ』のフックを食料庫の屋根に引っかける。そしてすぐに引き金を引く。すると、僕の体は勢いよく引っばられ食料庫の屋根に辿りつく。

「貴様！ 卑怯な！ 降りてこい！」

そんなチャックさんの声を聞き流す。そして僕は昇ってきた方向と反対側の方向に下りる。

危なかったあ……って言ってられないよな。すぐ移動しないと今度こそ卵を奪われる、  
とうか切られる。どうしよう……えっと、木を隠すなら森の中。なら人を隠すのは……  
人混みの中ッ！

僕は学食から急いで離れ本校舎に向った。といってもまだ安心は出来ない。ただの予感  
だけど、チャックさんすぐ僕の居場所……突き止めそうなんだよなあ。そうだッ！

僕は自分の教室がある三階の突き当たりを右に曲がる。

えっと……確か……ここら辺に……。

僕は壁を触る。ここは前、千草先生が地下の会議室に連れていくときに使った隠し扉が  
ある場所だ。

僕の作戦はこうだ。まず、この隠し扉から隠し通路に入る。そしてそのまま通路を使  
い、いつも朝練に使う扉からでる。後は、森を抜けて校下街に到着。

まあ……いつも朝練に使う扉までの道、どこにあるのか分からないんだけど。そこは、  
まあ探せば見つかる……はず。

それより今はこの壁に隠されている隠し扉を起動させる方法を見つけるのが先だ。千草  
先生は……もつと上のほうを押していたっけ？ ん？ なんか、右手に柔らかいものが……

……もしかしてこれがッ！

「……おい」

触り方が違うのかな？

「おい」

もつと強く押せば！

「おい、いつまで触ってる！」

「えっ？」

声につられて顔を上げる。そこには陶磁器のような白い肌と見知った整った顔立ち、奈  
央さんがいた。

「えっ？」

僕は目線を下にする。僕の右手は奈央さんの胸を鷲づかみしている。

「え、え、え、ええー！！！！」

瞬間、僕の体が、血液が、沸騰したように熱くなる。

「すみません！ 奈央さん！ そんなつもりじゃなくて！」

「別に構わん。この胸もただの飾りだしな」

奈央さんはすぐに真央さんに変わる。まあ、はい……ですよね。分かっています。

僕の体にあつた熱は急速に冷めていく。僕は奈央さんの胸から手を離す。

「それで、どうしてお前がここにいる？」

「いやあ……そのお……隠し扉と隠し通路を使いたくてえ……」

その瞬間、僕は真央さんの蹴りを顔面に食らう。やっばこうなるよね！

「お前は本当に馬鹿なようだな！ 学園には大量の生徒がいるというのに！ そんな状況で隠し扉を使うとは何を考えているんだ！ 何を！」

真央さんはそう言いゲシゲシと僕を踏んづける。

「マジですいません。でも、これには訳がッ！」

「やっと思つたぞ！」

来たあ！ しかも最悪な状況で！

「コソコソと逃げよって！ 貴様に騎士道精神……は、あ、あ、あな、な、なな何をして  
いるんだ！」

チャックさんは地面に倒れて蹴られる僕と、僕を虐げる奈央さん見て顔を赤くさせる。  
しかも明らかに動揺している。これは絶対に勘違いしてるな。

「き、ききき貴様らのような不埒な輩は！ お嬢様の害になる！ そっこく……斬る！」  
チャックさんは勢いよく地面を蹴り上げると弾丸のように真っ直ぐ僕達に近づいてくる。  
そして僕達の眼前に來ると、サーベルを上段から勢いよく振り下ろす。

真央さんは振り下ろされるサーベルを両手で挟むように受け止める。俗に言う真剣白  
刃取りだ。

真央さんは掴んだサーベルを下にずらす。そして、がら空ぎになったチャックさんの顔  
面上段蹴りを喰らわす。チャックさんは白目になり後ろに倒れその場に蹲る。

「直情的ですね。少しは頭を冷やしたらどうですか？ それと、私と楽さんはそういう関  
係ではないので、勘違いしないで下さいね？」

奈央さんは底冷えするような笑みを浮べる。途端にチャックさんの顔は青くなる。まあ  
妥当だろうな。遠くから見る僕も少しサバイボがたった。

真央さんは僕の腕を引きその場を後にする。

#### 十四話

僕と真央さんは一階にある物置に身を隠す。

「で、どうしてお前はあの暴走執事に追いかけてたんだ？」

真央さんは物置に収められている机の上に腰を下ろし、地べたに正座をしている僕を見  
下ろす。

「えっと、実は……これを見つけて」

僕は袋に書かれた百の数字が書かれた卵を見つける。

「これは！ なるほど、これを見つけた場面をチャックに見られたのか」

「まあ……そんなところです」

「それで一度は逃げられたがすぐに追いつかれると思ひ、隠し通路を使おうとした訳だな」

「はい、そうです」

「はぁ。お前はつくづく運が無いな」

真央さんは呆れたように再度、大きな溜息をつく。たしかにここ最近、本当に運が無いと思う。一回お祓いでもしてもらおうかな。

「まあいいだろうっついてこい」

真央さんはピヨンと机を下り扉に向う。

「ついてこいって、何処に行くんですか？」

「校下街に繋がる隠し通路だ」

「えっ！ 使わせてくれるんですか！」

「百点を失うは惜しいからな。それに今から使う通路なら誰の目にもつかないだろう。ほら、早く行くぞ！」

真央さんは扉を開けようとした時だった

カチツ——…

空耳とも思えるほど小さな音が聞えた。

僕の発明家としての勘が叫ぶ。「何か良く無いものが起動した」と。そして、その勘は的中してしまった。

バタン！

「えっ？」

次ぎの瞬間、真央さんの立っていた地面が無くなる。それにより真央さんの体は重力に従い下に落ちていく。

「危ない！」

僕は全速力で真央さんに向って走っていた。そして真央さんが落ちた穴に躊躇無く落ちる。

「真央さん！」

真央さんはその一言で僕の真意を理解し足首を掴む。僕はポケットから『ヤミタカ』を取り出し引き金を引く。『ヤミタカ』のフックが勢いよく射出され教室の床に引っかかる。これで落下は止まった、と思うのも束の間。二人の体重を支えきれず『ヤミタカ』のフックは外れ僕と真央さんは再度落下する。

数秒後、僕と真央さんは地面に体を打ち付ける。そこで、僕の意識は闇に沈んだ。



「起きろ、起きろ、起きろ！」

「うわ！」

突然、耳元で叫ばれ目を覚ます。

「やっと起きた用だな」

「うわッ！ ビックリした。下から光当てないでくださいよ。怖いですから」

真央さんが自分の顔の下から光を当ててビックリさせたので、僕は苦言を呈す。

「起きないお前が悪い」

「そうですか。」

「あの、怪我は？」

「無い。お前が一度、落下を止めてくれたおかげでな」

「そうですか。それ、光るんですね」

僕は真央さんが持っている影狗家の番犬のバッチを指さす。

「ああ影狗家の装備はあらゆる状況を考えて設計されているからな。お前のも光るぞ。上と下のバッチを回しみる」

真央さんの言われた通りにバッチを回してみる。するとバッチは光だした。

「すげえ」

「感動するのは後にしろ。今は、周りの確認だ。もしかしたら脱出の糸口があるかもしれない」

「分かりました」

真央さんに言われ四方を照らして見る。壁と壁の間は三メートル。両手両足で壁を押しながら登るのは不可能……。おまけに壁は煉瓦なため普通に昇るのも難しい。

「これは万事急須」

「諦めるな。というか、お前の発明品でなら上に昇れるんじゃないのか？」

「無理ですよ。『ヤミタカ』は上にフックに引つかかる場所が無いと上に上がらないので。今の状況じゃ無理です。それよりこのバッチで銀司さん達に呼びかけたほうが？」

「既にやった。だが、地下のせいかどうかどうも電波が悪くてな。アイツらに届いてるかすら怪しい」

「やっぱり万事急須」

「言うな」

「ていうか、なんで落とし穴なんて学校にあるんですか？」

「どっかの時代の影狗家の人間が作ったんだろう。もしくは、最初からあったが今のいままで誰も起動しなかったか……。どっちにしても迷惑だがな」

「そういえば千草先生も言ってたな。この学校にはまだ誰も知らない仕掛けや隠し扉があるって。」

真央さんは自分の足元にバッチを置くとその場に腰を下ろした。僕もその隣に座る。

「[.....]」

……気まずい。

そもそも良く考えて見れば、例の件以降話はしてないし……でも……銀司さんと約束したしなあ。隣に立つって……。よし！ 何か話そう！

僕はゆつくりと隣に座る真央さんを見る。真央さん体育座りをして顔を腕の中に埋めている。そしてその腕は――

「震えてる」

「ッ！ 馬鹿なことを言うな！」

僕の言葉を聞き真央さんは顔を赤らめて言葉を荒げる。その表情は今まで見たことがないような年相応の……というか実際の年齢よりも幼い表情だった。

「いや震えてるじゃないですか！」

「まだ言うか」

真央さんは怒りから立ち上がった時だった運悪く真央さんのバッチの明かりが消える。

「うわぁー！！！」

突如、真央さんは絶叫を上げて僕に抱きつく。ああ、これが奈央さんだったら良いのに……じゃなくて！

「真央さん！ 首！ 首が絞まってる！」

僕は背中を優しく撫でる。すると、徐々に真央さんは腕を外す。ただし、僕の膝からは下りない。そして恥ずかしいのかそっぽを向き口元を尖らせる。

「その……すまん」

可愛いっていかん！ 今、目の前にいるのは奈央さんじゃなくて真央さんだ！

「いや、全然良いですよ」

「……笑わないのか？ 俺が暗闇が嫌いなことを。子供っぽいとか」

「いや笑わないですよ。というか、ビックリして笑う気が失せたというか……意外ですね。真央さん暗闇が苦手だなんて」

真央さんはしばらく考える素振りをみせるとポツリポツリと自分の身の上を語り出した。「……昔。影狗家に恨みを持つ奴らに誘拐されてな。そして暫く地下室に監禁された。そこでまあ……色々あったんだよ」

過去を話す真央さんの瞳に光は無く。否応なく嫌な想像をさせる。銀司さんが言ったエゲツナイ目にあったことがあるって……多分このことか。

「もしかして、真央さんが女装をしている本当に理由って」

「……ああ、そのことが原因だ。俺を攫った奴らはかなりの手練れでな。今もどこかで生きてる。そして多分、今も俺を狙ってる」

真央さんは自分で自分の体に腕を回す。

だから普段は女装をしているのか。昔、真央さんを攫った人物を欺くために。



気がつくとも真央さんに付けられた顔の傷を引っ掻いていた。

「まあ、助けられた後に色々訓練を受けて月明かりほどの明るさや、アイツらがいれば多少は平気になったんだがな」

「そのことは銀司さんや千草先生には？」

「言えるわけないだろう！ そんな……暗闇が怖いなんて幼稚なこと。アイツらは、俺を慕っている。影狗家のために命を張っている。そんなアイツらを……裏切りたくない」

「そんなこと思わないと思いますよ。お二人とも真央さんのこと凄く好きで、凄く慕ってますから」

「そんなことは分かっている。ただこれは……俺の誇りの問題だ。だから！ お前もバラすなよ！ バラしたらどうなるか分かっているな」

「バラしませんよ。僕、そこまで性格悪くないですよ」

それから数秒後、また僕達の間には話が無かった。

僕は明かりをとせなくなった真央さんのバッチをいじくる。暗いから良く見えないが多分、単に中の配線が経年劣化で切れたといった感じだろうか。

「おい」

突然、僕の膝に乗っている真央さんが話かける。たぶん少しでも周りに人がいることを感じたほうが落ち着くのだろう。

「何ですか？」

「何か話せ」

「いきなりですね」

「お前は俺の知られたくない過去を知ったんだ。俺にもお前の話を聞く権利がある。そうだな昔の恥ずかしい思い出を俺は所望する」

ああ、さっきまで可愛かったのに。もういつもの傲慢な真央さんに戻っている。残念。いや、いつもの調子に戻ったっていう喜ぶべきか？

「おいッ！」

「痛っ！ 頭突きしないで下さいよ！」

「良いから話せ。主人の命令だ」

「そうですね……」

暫く考えた後、僕は自分の幼少の頃の話をすることにした。

「僕の家、貧乏なんです。親父は俺が小さい時に家を出て行って、お袋は奉公人として大きな屋敷で働いてるんですけど……金無くて。いつもお袋はゴメンって謝ってました。僕……その顔が嫌いで、少しでもお袋の役に立ちたくてゴミ捨て場をあさっては使えるものを修理して売ったりしてました。ただ、それでもたいして売れなくて。それじゃ母さんを楽に出来ないと思ったんで……まっ、あんまり褒められた方法じゃないこととして本買って、

必死に勉強してこの学校の高等部に入ったんです。ここならある一定の成績を取ればお金払わずご飯も出る。どころかお金すらでますからね」

「……もう良い。せめても少し明るい話題はなかったか？」

「話せて言ったの真央さんじゃないですか」

本当に身勝手だな。この人。

「はぁ。こっちから話題を振る」

「まだ、話させるつもりですか」

「良いだろ。暇なんだ。そうだな……お前、どうして僕を好きになったんだ？」

その瞬間、僕は真央さんの額に向けて頭突きを喰らわす。

「痛っ！ 何をするんだ！」

「真央さん。勘違いしないで下さい。僕が好きになったのは真央さんじゃなくて奈央さんです！ その重要！」

「そうかよ。じゃあ、なんで奈央に惚れたんだ？」

「それは……えーと……うー……」

僕は顎に手を置いて考える。体を傾けて考える。

「……まさか、特に何も無いとは言わないよな？」

「あるに決まってるじゃないですか！ 少し待って下さい！ 記憶を掘り起こすので！」

思い出せ！ 頭をフル回転させろ！ 一ヶ月前、二ヶ月前、半年前……もっと……もっと

と前！ たしか……

「……僕が初めてこの学園に校門をくぐった時です。今まで過ごしていた世界と何もかもが違って。どうしようもなく不安で……その時、初めて声をかけてくれたのが奈央さんだったんです。僕、あんな綺麗な同い年の女子に会ったこと無くて……こう……胸のところが痛くなったんですよ」

「……そんなこと、あったか？」

「僕の綺麗な思い出ぶち壊さないで下さいよ！ 僕はその日にあった奈央さんに少しでも釣り合う人間になるために努力してきたんですから！ まあ結果は……あんな感じでしたけど……」

「……なんか、そう言われると……すまなかったな。結果的とはいえお前の気持ちを踏みにじることになってしまった」

「良いですよ、もう。そのことは……僕の中で折り合いはついているので。それに……僕も、色々やっちゃったわけですし……だから……ずうずうしいかもしれないですけど……お互い受入れませんか？ 受入れて、もう一度やり直しませんか？」

「どうやってやり直すんだ？」

真央さんはニヒルな笑みを浮べる。

「……僕は藤堂楽。影狗奈央さんのことが好きです」

僕の言葉を聞き真央さんは僕の意図をくむ。

「俺の名前は影狗真央。この学園での姿は、影狗奈央。お前の好意には答えられないが、お前の主人にはなれる」

真央さんは、あの夜に付けた僕の顔の傷を優しく触れる。

これはあの時のやり直しだ。

「どうする？ お前は俺の命令が聞けるか？」

「御意。僕は……影狗真央さんの番犬になります」

「おーい！ 大将！ ここにいるか！」

突如、天井から銀司さんの声が聞える。

「あ、銀司さん！ ここです」

「馬鹿！ この状況で！」

真央さんは僕の口を塞ぐ。その瞬間、僕と真央さん頭上に切込みが入り地面に落ちた。

銀司さんはひよっこり顔を出す。そして僕達を見て意地悪な笑みを浮べる。

「ははーんなるほど。もしかしてお邪魔だったか？」

「断じて違う！ それよりも早く上げろ」

「へいへい」

銀司さんは縄をたらず。訓練のおかげで割と簡単に昇ることができた。

「それにしても良くここが分かったな。銀司」

「いやぁ大変でしたよ。大将の通信ガビガビで落ちたことは分かったけど、どこの教室で落ちたか分からなくて虱潰しでしたよ。それよりも良いんですか？ 日没までもう時間無いですけど」

「復活祭！」

僕達は急いで教室を出る。

「近道ってどこですか？ 真央さん？」

「突き当たりの壁だ！」

真央さんは手早く壁の一部を押す。すると壁が回転し、隙間が出来る。僕と真央さんは急いでその隙間の入り薄暗い通路を走る。

数分後。なんとか僕達は森にできた穴を通り校下街の中央広場に辿りつく。

「すいません！ はあはあ……卵！」

僕は近くにいた実行委員に僕と真央さんの分の卵を渡す。因みに真央さんは司会進行があるため抜け道を通ったところで既に分れている。

「遅かったなラク」

「あ、ラビ。少し、色々あってな。そういうえば、他の皆は？」

「リサなら見たぞ。卵を沢山持っていた。エヴァン先輩は……そういうえば見ていないな」  
その時、広場に放送が流れる。

『この時間を持ちまして卵の集計を終わります。皆さん寮ごとに並んで下さい』

「じゃあ、また後でな」

「あまたな」

放送に従い僕は黒鴉寮のところに並ぶ。ほどなくして閉会式が始まる。

『これより閉会式を始めます。まず、成績発表。黄象寮二百十点。紅獅子寮二百五十点。  
そして黒鴉寮三百点です』

奈央さんの成績発表を聞いた瞬間、黒鴉寮の生徒達は歓声を上げる。と、同時に僕はホッと安堵の息を零す。

良かった。これで、僕は命を墮とさずにすむし、トワイライト様が殺されることは無い。まあ、暗殺者シンシャーは既に撃退しているし。

狙撃にそなえて場所も変えたからトワイライト様が殺されることなんて……ない……はず。

理由は分からない。だけど……僕の視線の端に映る生徒が妙に気になった。僕の体は気付けばその生徒の後はつけていた。

僕が後ろをついている生徒は一瞬見ただけでは、黒鴉寮の生徒だと思うだろう。名瀬なら、黒鴉寮の生徒が着る、外套と帽子を被っていたるが明らかに黒鴉寮の生徒のものだからだ。

しかし良く見ると黒鴉寮の生徒にしてガタイが良い。いや、良すぎる。第一、成績発表を聴いて他の生徒と同じく喜ばず、ただ一直線にどこかに向っている時点で不審者確定だ。

僕は目の前にいる怪しい生徒に手を伸ばし外套を掴む。

「あの。黒鴉寮はあっちですよ？」

その瞬間、怪しい生徒は外套と帽子を投げつけて走り去る。この行動、明らかに黒！僕はバッチで奈央さんに話かける。

「暗殺者と思われる人を発見しました。捕まえるので他の生徒達の気を引いて下さい」  
返事は無い。でも、奈央さんならやってくれる。

直後、舞台から破裂音が響く。それを聴いて、生徒達は騒然となる。

『申し訳ありません！ 持っていたスタートピストルを鳴らしてしまいました。怪我を人はいませんか？』

真央さんのおかげで多くの生徒の動きが止まり、暗殺者を見つけやすくなった。僕は首を激しく動かし暗殺者を探す。

すると、一人だけ音に驚かず平然と紅獅子寮に向う生徒がいた。間違いない。背格好も同じ！

僕は暗殺者に向って走り出す。そして、渾身の体当たりをお見舞いする。

「逃がさないぞ！ 暗殺者！」

それにより、暗殺者と僕は生徒達の人混みを出る。僕は暗殺者を上から押さえつけようとした時だった

「ラク」

聞き覚えのある声を聞き一瞬、体が止まってしまふ。そして、その隙を突かれ首に蹴りを入れられる。

呼吸と止まり、視界が一瞬、真っ白になる。

暗殺者は校下街のほうに走っていった。

『暗殺者……校下街……逃げました……』

僕は暫く地面に倒れ痛みが引くのを待ってから改めて生徒達の元帰っていった。

## 第五章 襲撃と番犬

### 十五話

閉会式の後、後夜祭前の少しの時間。僕と真央さん。そして銀司さん千草先生は最初に暗殺者について話し会った例の地下室集まる。

理由は勿論、僕が取り逃がした暗殺者シンシャーについてだ。

「すいません。僕が取り押さえることを失敗しなければ……」

僕は真央さん達に向って頭を下げる。

「まあ、気にするなよ坊主。お前がああ状況で良くやった。にしても……まさか暗殺者シンシャーが二人いたとわな。それとも違う国の暗殺者か？」

銀司さんの予想を真央さんは否定する。

「いや、それはないだろう。それなら影狗家の本部から情報が入るはず。普通にシンシャーは複数人の暗殺者と考えるべきだろう」

「けど、そんな情報なかったんだろう大将」

「外部に複数人の暗殺者だと情報を流さない。それだけ一流ということだろう。影狗家の目を欺くほどに」

真央さんは机に肘をつき両手の指を合せる。そして熟考する。

数秒後、真央さんは重々しく口を開く。

「楽。お前、トワイライトとデートをした時、デートプランは一人で考えたのか？」

「いや、違いますよ。エヴァン先輩とラビと理沙と一緒に考えました……けど。もしかして！ エヴァン先輩達を疑っているんですか！」

僕は怒りから席を立ち上がる。確かにデートプランを知っていれば予め先回りすることは出来る！ 出来るけど！

「落ち着け。まだ可能性の話をしただけだ。お前の友達がシンシャアの可能性。シンシャアに脅されている可能性。シンシャアに成り代わっている可能性のな」

「成り……代わっている」

「ああ。お前にも話しただろう。シンシャアの特徴を？」

シンシャアの特徴……は、ロージア帝国一の暗殺者で。狙撃と格闘と……後

「変装……でも、誰が！」

「それは分らん。だが、可能性が高いのはお前の友達だ。そして、この中でその三人を良く知っているのはお前だ。答えろ。直感で良い。誰が怪しいと感じた？」

真央さんの視線が、銀司さんの視線が、千草先生の視線が僕に集まる。

三人の中で……不信な人物。誰だ！ ここで外したらトワイライト様だけじゃなくてエヴァン先輩達も危険な目に遭うかも知れ無いんだぞ！ 答えを出せ藤堂楽！

（水が見えマス）

（エヴァン先輩か。見なかったな）

「……エヴァン先輩だと、思います」

「理由は？」

「……最初にシンシャアが襲ってきた湖。それを話題に出したのはエヴァン先輩なんです。占いで……水が見えるって言って。それに友達と閉会式の前に話したとき聞いたんです。エヴァン先輩、復活祭の閉会式にいなかったらしくて……それも、怪しい……と思って。それに、僕が取り逃がした暗殺者の声のエヴァン先輩の物でした」

気づけば僕は怒りのあまり拳を握っていた。

「たしかに……辻褄は合うな。デートプランの件は占いと良い暗殺のしやすい場所にお前を誘導させた。そして復活祭の閉会式に見なかったのは暗殺の準備をするため」

再度、真央さんは机に肘をつき両手の指を合せて熟考する。

「作戦を伝える。当初の計画通り楽はトワイライトと共に後夜祭を回れ。千草と銀司は、それぞれ理沙とラビを念のため監視しろ。俺はエヴァンにつく。今日で暗殺者シンシャアを止めるぞ！」

「〔御意〕」

絶対に捕まえる。

僕達は地下室を後にした。

十六

地下室をでると、学校中が綺麗にランプの光で照らされていた。僕は、すぐに中庭に

赴く。理由はここがトワイライト様との待ち合わせだからだ。

中庭には沢山の机が置かれそこには沢山の料理が置かれている。そして、生徒達は皆一様にドレスやタキシードで着飾っている。制服しか持っていない僕には肩身が狭い。

そんなことより今はトワイライト様を守ることにだけ集中しないと！

「何を怖い顔をしているのですか？」

「うわっ！」

ビックリした。いきなりトワイライト様の顔が目の前とか心臓が悪い。

「どうですか？」

トワイライト様は黄色の豪華なドレスの裾をつまみ僕にドレス姿を見せる。

「凄く綺麗です。トワイライト様。」

「ラク。この時は、トワイライトではなくシャーロットと読んで下さい」

「分かりました。シャーロット！」

僕は突然眼前に迫る刃をギリギリで交わす。この太刀筋は

「チャック！ いきなり何をするんですか！」

「お嬢さま！ 離れてください！ この不埒な輩はオレが斬る！」

案の定、僕に斬りかかってきたのはシャーロットの執事チャックさんだった。タキシードを着たチャックさんはサーベルを構え今にも僕に斬りかかろうとする。

この人に着られるのは今日で何回目だよ！

「待ちなさい！ ラクは私の大切な友人です！ ラクを害するということは、ワタシを害することだと思いなさい！」

シャーロットは、僕とチャックさんの間に割って入ると大きく腕を広げ一喝する。結果チャックさんはシャーロットの威勢に気圧されサーベルをしまう。

「招致しました。ただし！ このパーティーはオレも一緒に周ります！ それだけ譲れません。お嬢様の身の回りの生活と安全がオレの使命なので！」

「……分かりました。それには何も言いません」

シャーロットは渋々了承する。まあ、僕としては暗殺者が紛れているかもしれないパーティーにはチャックさんみたいな強い人がいてくれた方が良くから助かるんだけど。

「そういえばラク。貴方、パーティーは制服で回りますの」

「そのつもりです……タキシード、をかうお金ないので」

「そう……タキシードを買いにいきましょう。約束ですよ」

シャーロットはそう言うのと僕の小指に自分の小指を絡ませる。今日のシャーロットは積極的でなんだか少しドキドキする。

そして同時に、そんな僕を睨むチャックさんの視線が痛い。

「さ、では。後夜祭を回りましょう。前は、倭国の庶民料理を紹介していただいたの、今

回は私がイギリスの料理を紹介しますわ」

トワイライト様は僕の手を引き中庭に連れていった。

トワイライト様が紹介するイギリス帝国の料理はどれも普段、僕が食べる料理とはかけ離れており全体的に不思議な味がした。

「お口に合いませんでしたか？」

そんな僕の反応を見てシャーロットが心配そうにこちらを見る。

「えっ！ そんなことは……ただ食べ慣れてないせいか……味が良く分からないというか……」

「ふん。貴様のような、貧乏人にはイギリスの料理の味は分らんさ。さ、お嬢様。コチラは大丈夫です」

チャックさんはミートパイ？ を一口食べるとシャーロットに渡す。シャーロットはそれを平然と受け取る。

恐らく毒味をしたのだろう。強くて忠義に熱い執事……これで気性が荒くなれば最高の執事なのに。

「なんだ、その目は？」

「あ、いやあ、特に何も」

チャックさんは僕を睨みながらポケットから懐中時計を取り出し時間を確認するとシャーロットに耳打ちする。

「お嬢様。そろそろ移動をした方が宜しいかと」

「そう……もう、そんな時間なのね。ラク、少し席を外していいかしら？ 寮長としていくつか挨拶しなくてはいけなくて」

「あの！ それ僕もついて行って良いですか？」

暗殺者シンシャーがまだエヴァン先輩だと確定した訳じゃない。シャーロットが挨拶をする人の中に暗殺者シンシャーが紛れている可能性もあるのだ。

「貴様！ そんなことが許されるわけないだろ！」

「チャック！ 良いですか？ かなり退屈ですよ」

「構いません！ 少しでもシャーロットの近くにいたいんです！」

暗殺者から守るために！

僕の言葉にシャーロットは少し顔を赤くする。

「ッ！ し、しかたありませんわね！ 確かに、将来世界を飛び回るカラクリ技師になるならコネクションを作るには良いかもしれませんね！ そうと決まればいきましよう！」

シャーロットは早口でそう言うのと、僕達を置いてそそくさと中庭を出ていく。チャックさんの僕を見る視線がされに鋭くなった。



挨拶として向ったのは、体育館だった。ただし、内装は僕の知る体育館とは一変していた。天井には豪華なシャンデリアが飾られ、設置された机には綺麗に真っ白なシートが被されている。そして、その上には豪華な料理がところ狭しと並んでいる。そして体育館の中央では洋風の音楽に合わせて主にレオン寮の生徒達が華麗に社交ダンスを踊っている。

「す、すげー」

あまりの別世界に僕は入口から動けないでいると、後ろからポンと背中を叩かれる。隣とみるとシャーロットが優しく声をかける。

「あまり気負わなくていいですわ。皆、同じ学園に通う生徒なのですから」

シャーロットは自然と体育館の中に入っていく。僕は一度大きく深呼吸をするとシャーロットの後をついた。

シャーロットが体育館に入った瞬間、空気が変わる。今まで体育館の隅で談笑をしていた生徒達は談笑を止め、踊っていた生徒達は踊るのを辞める。そして、徐々にシャーロットに近づいてきた。

その中には普段、高等部と接触しない大学部の生徒達もいる。そして、僕はそんな人混みに揉まれ、その輪から追い出される。

分かつてはいたけど、シャーロットの人气って凄い。とてもじゃないけどこの人混みの中には入れないな。いや、けどシャーロットの隣にはチャックさんがいるし。ここは、外側から怪しい人がいないか確認したほうが良いのか？

「あれ？ おーい！ 楽！」

この声は……。僕は首を振り声の主を探す。すると、数メートル先に青いドレスに來た理沙が大量の料理を乗せた皿を持ちながら僕に手を振っている。後ろにはタキシードを着たラビもいた。

「やっほお楽。奇遇だねえ。」

「理沙。なんでここにいるんだ？ こっつて基本的に貴族出身の生徒しかいないはずじゃ」「ふふん！ エヴァン先輩につれてきて貰ったんだ！ 因みに、このドレスもエヴァン先輩は貸してくれたあ。可愛いでしょ」

理沙は料理の皿をもったままその場で回転する。どうやらドレスを着れたことが余程嬉しいらしい。

「ラビのその服装もか？」

「そうだ。復活祭が終わった後、後夜祭と一緒に回らないかと言われて。了承したら貸してくれた」

「そう……か。で、そのエヴァン先輩は？」

「家の繋がりで、あっちで話してる」

ラビは自分の右後ろ指さす。そこにはどこかの貴族の女性と話しているエヴァン先輩がいた。

「貴族って大変だよねえ」

理沙は皿に盛っている料理を食べながらそう言う。

わざわざこの二人を連れてくるエヴァン先輩の行動は怪しい。もしかしてエヴァン先輩が暗殺者と思っていたけど、本当は三人とも暗殺者シンシャーの偽物。ここに来たのはシンシャーロットを殺すため……とか。

駄目だ。嫌な想像ばかり湧いていく。

「なーに怖い顔してるの？ もしかして自分だけ制服姿で悔しいとか？」

「……いや、そういう訳じゃないけど……」

「てか、楽はどうやってここ入ったの？ そんな格好で」

「そんな格好は余計……そのシンシャーロットに連れられて」

「シンシャーロット……って！ レオン寮の寮長！ 何、下の名前で呼ぶようになった訳！」

しまった！ 墓穴ほった。

「リサ。ここではあまり大きな声を出すべきではありませんヨ。って、ラク！ ラクも来てたんですか！」

すると理沙の背後からエヴァン先輩が窺める。

「あ、はい。シャ……トワイライト様に連れてきて貰って」

「あれくさつきみたいにシンシャーロットの呼ばないの？」

「ラク！ もしかして、もうそんな関係に！」

「だから違いますって。僕はただ」

パリン……パリンパリンパリンパリン！

その時だった突然、ガラスが割れるような音が次々と聞こえ同時に視界が真っ暗になる。説明されなくても分かる。暗殺者シンシャーが動き出した！

『ラク！ シンシャーが動き出した可能性が高い！ 身を挺しても守れ！』

バッチから真央さんの声が聞える。僕はすぐにバッチの下パーツを回し明かりを付ける。すると偶然、ライトの端を通り過ぎる影が映る。しかも影が行く先にはシンシャーロットがいる場所！

僕は地面を蹴り上げて走る。

キーン！

直後、金属同士がぶつかり合う音が聞える。

僕は音のなったほうに光を当てる。そこにはシンシャーロットに振り下ろされたナイフをサーベルで受け止めるチャックさんがいた。僕はナイフを持っている人物に光を当てる。

その人物は――

「エヴァン……先輩」

「ラ……ク」

僕と目があつたエヴァン先輩は驚き目を丸くした後、今にも泣き出しそうに口元をキュッと結ぶ。

その表情を見た瞬間、僕は全てを察してしまった。目の前のエヴァン先輩は多分、本物で。明確な殺意を持ちシャーロットにナイフを振下ろしたことを。

分っていた。覚悟もしていた。それでも僕、自身目の前の現実を受入れるのに数秒の間を有した。

その間にエヴァン先輩はナイフを投げ捨てるとすぐにその場から逃走する。

「待て！」

チャックさんがエヴァン先輩を追おうとする。やばい！ このままチャックさんを行かせたらエヴァン先輩を切り捨てかねない！

「チャックさんはそのままシャーロットを守って！ 僕が追います！」

僕はそう言いチャックさんを静止させる。

エヴァン先輩を追いかけながら番犬のバッチに言葉をぶつける。

「楽です！ やっぱりエヴァン先輩が暗殺者シンシャーでした！ これから追います！」

バッチからは真央さんが何か言っている気はするが気にしない。それよりも今はエヴァン先輩の確保だ！

「クッソ！」

僕は胸から溢れ出す様々な感情を吐き出し体育館の出口に向った。

体育館を出ると先ほどランプの明かりで照らされていた学校は今、暗闇に包まれていた。これも、暗殺者シンシャーの仕業なのか？ いや、そんなことよりも今はエヴァン先輩

を！

「おい！」

「うわ！」

突如、僕は背中を蹴られ倒れる。後ろを振り返るとそこには左手で懐中電灯を持った真央さんが僕を見下ろしている。因みに着ている服は黒と赤を基調にしたドレスだ。ただし、動きやすくするためにスカートの部分は無残に破かれ形の良い太ももが露わになっている。この位置だと色々見えそうでドキドキする。

「どこを見ている！ どこを！」

真央さんはゲシゲシと僕を何度も踏んづける。

ひとしきり僕を踏んづけた真央さんは敵かに僕に命令する。

「楽、お前は戻れ。エヴァンはオレが捕まえる。お前の任務は、トワイライトを守ること

だ」

「いやです」

「お前は俺の番犬だろう」

真央さんが少し苛立ちを見せる。それでも、僕の子の気持ちだけは譲れない。

「はい。でも、エヴァン先輩は友達です。だから、自分の手で止めたいんです。苦しんでるなら助けたいんです。だからお願いします！」

僕は真央さんに頭を下げる。

「はあ……ついてこい」

「良いんですか？」

まさかの真央さんの発言に僕は思わず聞き返してしまう。

「お前のことだ。何を行ってもついてくるつもりだろう。だったら勝手な事をされるより俺の目の届くところに置いたほうが良い」

信用ないなあ。しょうが無いけど。

「何をボサツとしているこっちだ」

「エヴァン先輩の場所分かるんですか？ 僕達が話している最中にエヴァン先輩、見失っちゃいましたけど」

「俺がそんなヘマをすると思うか？ これを見ろ」

真央さんは足元を指さす。そこに目線を移すとそこには緑色に光る点が見えた。よく見ると規則性を持ってポツリポツリとその点は塗られている。

「これは……」

「夜光塗料だ。恐らく暗闇でもすぐに逃げられるようにあらかじめ逃走経路に塗っていたのだろう……つまり、これを追っていけば居場所が分かる。行くぞ」

僕と真央さんは蛍光塗料を頼りにエヴァン先輩を追いかける。

## 十七話

僕と真央さんが訪れたのは部室棟の三階の一室だった。扉には「魔術部」と書かれた札が付けられている。ここはエヴァン先輩が所属している「魔術部」の部屋だ。

僕と真央さんは、壁に背中をつけて左右で扉を挟む。真央さんが右手を振る。すると、右の袖から拳銃が飛び出す。僕も懐からゴム弾を取り出す。

「良いか。合図を出したら部屋に入る。遅れるなよ」

「は、はい」

僕は緊張からくる喉の渴きを唾液を飲みこむことで押さえる。

「三、二、一！」

真央さんは勢いよく扉を開け部屋に入る。すかさず僕も部屋に入った。

真央さんは銃口をエヴァン先輩に向けると同時に言葉をぶつける。

「動くな！ ゆっくりと手を上げろ」

エヴァン先輩は真央さんの言葉に従いゆっくりと手を上げる。

「は、話が違う。わ、ワタシは言われた通りやったじゃ無いデスカ！」

エヴァン先輩は今にも泣き出しそうな震える声を発する。

何を言ってるんだ？

突然のエヴァン先輩の発言に困惑し、僕と真央さんはお互い顔を見渡す。

「こ、こうなったら、せめて！」

エヴァン先輩は勢いよく振り返ると近くにいた真央さんに襲いかかる。しかし丸腰で人と戦うなんて素人なエヴァン先輩が拳銃をもった真央さんに勝てる訳がない。

真央さんは冷静にエヴァン先輩の右肩を撃ちぬく。

「があうう！」

エヴァン先輩は悲鳴と共に地面に倒れた。そして撃たれた右肩を押さえながら地面に蹲る。真央さんは倒れたエヴァン先輩に片足を乗せ銃口を向ける。

「急所は外した。今度、不審な動きをすれば次は足を撃つ。答えろ。なぜ、トワイライトを襲った？ お前は……本当にエヴァン・マーサーか？」

エヴァン先輩は痛みに耐えながら、撃たれていない左腕を動かし、一点を指さす。その先は大きなクローゼットの一番下の段だった。

「と……も……達を……助ける、ため」

「楽。開ける」

「はい」

真央さんの言葉に従い僕はエヴァン先輩が指さしたクローゼットの下を段を開ける。

開けた瞬間、僕は絶句した。

「楽どうした？ 何がはいつている？」

「……ラビが……入ってます」

クローゼットの中には手足を縛られ、口元に猿ぐつわされたラビがいた。眠らされているのか意識は無い……どうということ……なんだ？

「おい、どういことか話せ！」

真央さんは再度エヴァン先輩に問いかけるが、エヴァン先輩はただ痛みに蹲るだけだった。

「チッ！ 楽、その外套を貸せ！」

「あ、はい」

僕は制服の外套を渡す。真央さんはナイフを取り出すと外套を切り刻む。そして包帯のように傷口に巻く。そして、太もものに巻いているベルトから注射針を抜くと首元に突き

刺す。

「鎮痛剤も撃った。これで、少しはしゃべれるだろう。ほら、さっさと話せ」

真央さんの折檻にエヴァン先輩はポツリポツリと言葉を話す。

「一週間……前……。突然、ラビが何物かに、拉致されている写真を……送られて……それで……逆らえず……他の魔術部の生徒も……どうように……大事な人を……人質に取られて」

いきなり学園の明かりが消えるなんて大規模な仕掛けは魔術部の生徒達がいたからか。……待てよ。ラビがここにいるってことは……

僕の体温が急激に下がる。

「ま、真央さん！」

僕は真央さんのほうを向く。しかし、そこには真央さんの姿はなかった。

「エヴァン先輩、ラビ、待っていて下さい。絶対、助けますから！」

僕はエヴァン先輩に声をかけると部屋を出ていった。

廊下に出ると数メートル先を真央さんが走っていた。僕は真央さんの後を追う。すると番犬のバッチ銀司さん声と微かな戦闘音が聞える。

『大将！ それと坊主！ 聞えるか！ 暗殺者シンシャーの手下が体育館で暴れ出しやがった！ 俺と千草はそっちの対処に追われてレオン寮の嬢ちゃんを守れねえ！ 悪いが護衛は頼む！』

脅されていた魔術部の人達が暴れ出したのか？ シャーロットは大丈夫なのか？ それにその他の生徒は……そう言えば、理沙はラビの近くにいた。もしかしたら……あーもうッ！ もっと良く考えれば良かった！

よくよく考えてみればシャーロットのデートの時の占いもエヴァン先輩は水としか言っただけだった。そこから湖って言ったのラビだったじゃないか！

クソ！ もっと僕が考えて発言をすれば！ いや、そもそも僕が無理を言ってエヴァン先輩を追いかけなければもっとなら！

後悔が、焦りが湯水の如く僕の頭に溢れ出す。それに伴い真央さんがつけた引っ掻き傷がうずく。

「もし今、後悔しているなら。次の行動で取り返せ」

僕の前を歩く真央さんが振り返らずに発する。

「忘れるな。貴様は俺の番犬だ。焦りも後悔も押し殺し、僕の命令に従いこの学園を守る義務がある」

「……はい」

そうだ。今は後悔したり焦ったりしている場合じゃない。今はただシャーロットをこの学園の皆を救うことを考えないと！

「こっちだ！」

真央さんは部活棟の壁を触る。すると隠し通路が姿が現われる。僕はその通路の入り。しかし、真央さんは通路に入らない。

「真央さん？」

「ここからは別行動だ。貴様には任務を与える」

僕は真央さんから新たな任務を与えられた。

幕間

「きゃー」

「まだ、電気はつかないのか！」

「ねえ、さっきから聞えるこの音、何？」

体育館は未だ闇に包まれていた。体育館の中にいた生徒達は皆、一様にその場に留まり電気の復旧を待っている。

生徒達が未だ、誰もパニックにならず冷静に電気の復旧を待っているのはレオン寮の寮長であるトワイライトがすぐに指示を出したからである。

トワイライトの護衛兼執事であるチャックが耳打ちする。

「お嬢様。このまま電気が復旧するのを待つよりも避難したほうがよろしいかと」

チャック自身、現在体育館でトワイライトの命を複数の生徒が狙っておりそれを、番犬である銀司と千草がそれを阻止しているという現状を正確に認識していない。

ただ、先ほどから微かに聞える刃物がぶつかる音と人を殴る音。そしてエヴァンという生徒が明確に殺意を持ってトワイライトを狙ったという事実を考慮した結果、このままこの場においてはトワイライトが危ないと判断したのだ。

そして、それを説明しなくとも長年の経験からトワイライトはチャックの真意を読み取ることが出来る。故にトワイライトは素直にチャックの意見に従う。

「そうね……この場合だと中庭が良いかしら」

その時だった。突然、体育館の扉が開く。そして、一筋の光が体育館の中にあるトワイライトとチャックに当てられる。

「この光はライト？ 誰かが、体育館と対角線上の建物から光を送っているの？」

すると今度はトワイライトとチャックに当たっている光がパチパチと規則性を持って点滅する。

二人はそれがすぐにこれがモールス信号だと理解する。そして、すぐに内容を解読する。学園内、全て停電。中庭危険。校下街に逃げろ。

「お嬢様、どういたしますか？」

「……この光に従いましょう。もし、学園内に全てが停電なら。中庭に避難しても意味が

ありません」

「分かりました。ここにいる物よ！ よく聞け！ これより我々は校下街に避難する！  
慌てず！ 粛々と避難せよ！」

チャックが全校生徒に指示を出す。

そして、トワイライトを筆頭に生徒達は体育館の出口に向いあるく。トワイライトが今いる場所から出口までの導線はモールス信号を出したライトが明るく照らす。

トワイライトが体育館を出ると出口の近くには幾つものランプや懐中電灯が置かれていた。

光が点滅する。使え、と指示を出す。

トワイライトもチャックも勿論、この状況に怪しさを覚えるが今は他の生徒達の安全が最優先だと考え目の前の照明器具を使う。そして、トワイライトを筆頭に生徒達は校下街に向った。



トワイライトがその場を去り数秒後。体育館の物陰に隠れていた真央は中に入る。そして懐中電灯で中を照らす。

体育館には銀司と千草。そして、二人により倒された魔術部の生徒達が地面に倒れていた。

しかし、真央はそれらに目を向けず虚空に言葉を発する。

「いるんだろう。シンシャー」

真央の言葉が体育館内に響く。そして

「いやあ、凄い凄い。ワタシが隠れていると」

地面に倒れている生徒の一人がむくりと起き上がる。その顔は、先ほどクローゼットに押し込まれていたラビと同じ顔をしていた。暗殺者シンシャーは邪悪な作り物めいた笑みを作る。

「別に褒められることじゃない。お前らのような作戦が失敗した暗殺者の行動は手にとるように分るだけだ」

真央は拳銃の引き金を引く。しかし完全に弾道を読まれ暗殺者シンシャーには完全に読まれ避けられてしまう。

「銀司！ 千草！ お前らは、トワイライトの方にいけ。まだ何人か命を狙っている奴が紛れ込んでいる可能性がある」

「あいよ」

「招致いたしました」

銀司と千草の二人は体育館の出る。



「随分、簡単に行かせるんだな」

「あの二人がいたら人数的に分が悪いので」

「まるで数的有利が無くなれば勝てる口ぶりだな」

「フフフフ。そう言っているのですよ！」

暗殺者シンシヤーはタキシードの懐から金槌と拳銃を取り出す。そして一直線に僕に真央に近づく。

真央はシンシヤーに向かって弾丸を放つ。しかし、シンシヤーは金槌を器用に使い弾丸を弾く。

真央が驚くのも束の間、目の前に迫ったシンシヤーは金槌を振下ろす。真央はそれを紙一重で交わす。

真央はすかさず持っていた拳銃を投げる。

「それはさせませんよ！」

シンシヤーは金槌で向ってくる拳銃を弾く。そして、すかさず自分の拳銃の引き金を引く。真央はギリギリで右に転ぶように避ける。

「影狗家の人間は、自分の存在感を自由に操れるそうですね。そして今のはその応用。近くにある物体に注意を引かせ、周りあるあらゆる物体よりも存在感を消す一種のステルス能力」

「良く知ってるな」

「見ていたので。恐ろしい技術ですが一度、種が割れば造作もない！」

シンシヤーはすかさず引き金を引き弾丸を喰らわす。

真央は俊敏な動きで弾丸を避け続ける。

「ほらほら、どうしました！ 片手が封じられて反撃できませんか？」

真央は近くの柱に身を隠す。

「それで隠れたつもりですか？ バレバレなんですよ。そのライトのせいだ！」

暗殺者シンシヤーは弾丸を補充すると柱に隠れている真央に照準を合わせる。その時だった真央は持っていた懐中電灯をシンシヤーの顔に当てる。

突然の強い光に暗殺者シンシヤーは目がくらみ隙が生れる。その隙を真央は見逃さない。シンシヤーに全速力で肉薄する。

目が慣れたシンシヤーは拳銃を構える。真央は即座に持っている懐中電灯を投げ、拳銃を弾き飛ばす。そして、流れるような動作で金槌を持って蹴り上げる。シンシヤーは金槌までも落としてしまう。そして真央の体当たりを正面から受けてしまう。

シンシヤーは地面に倒れ、その上に真央が乗る。真央は腕を振り袖からナイフを取り出すと両手でナイフを振下ろす。

しかしナイフの切っ先が首元に当るすれすれの所でシンシヤーに腕を掴まれ阻まれて

しまう。

「おや、どうしました？ 手が震えていますよ？ もしや……暗闇が怖いのですか？ よければ先ほど投げたライトを拾いにいってもいいのですよ？」

「安心しろ。貴様を殺した後にゆっくり拾うさ」

二人の筋力はほぼ同じ。ここから長く、地味な攻防が始まろうとした矢先ガチャリ

不気味な機械音が体育館に静かに響く。

真央はすぐにシンシャーの上からどく。それとほぼ同時だった。鼓膜を破るほどの轟音と数多の弾丸が真央に向かって一直線に向って跳んでくる。

真央はギリギリでそれを交わすと再度、柱の後ろに隠れる。

「いやあ、危ないところでした。間に合って本当に良かった」

暗殺者シンシャーの言葉と共に車輪の不気味な音が真央に近づいてくる。

真央は、柱から慎重に顔を出す。暗殺者シンシャーの隣には前、楽とトワイライトを狙撃した暗殺者と同じ服装をきた細長男がいた。そして、その男の前にはいくつもの銃口が円形に纏まった車輪のついた銃火器、ガトリングだった。

あれがひとたび火を噴けば確実に自分は死ぬ。そう確信した真央は少しでも生きながらえようとシンシャーに話かける。

「貴様らは二人組の暗殺者ではなかったのか？」

真央の言葉にシンシャーは小馬鹿にしたように答える。

「おやおや。どうやら影狗家の次期党首はロシア語が得意ではないようだ。良いでしょう。冥土の土産に教えて上げます。我々の名の意味は三角形<sup>シンシャー</sup>。我々は常に三人でどんな可能な任務も達成してきたのです」

だろうな。と真央は心の中でつぶやく。

真央自身、まだ伏兵がいたことは予想はしていた。なぜなら、停電まえラビは拳銃を抜いていないのにシャンデリアは割れたからだ。つまりシンシャーが立てた作戦はもう一人いないと実行できない作戦。

ついでに、これ以上暗殺者シンシャーはいないことも知れて少しだけ安堵する。

真央は一度深く深呼吸をすると自分が予め考えていた作戦を成功させるために頭を回転させる。

そして、とった行動は挑発だった。

「なるほど。つまりお前達一人一人の実力は三分の一ということか。どうりで弱いはずだ」  
真央の言葉にラビに変装したシンシャーは青筋を立てる。しかし、更に真央は挑発する。  
「だってそうだろう。最初に仕掛けてきた奴は俺に倒され、お前も仲間がいなければ死ん

でいた。違うか？」

「黙れ黙れ黙れ！ 私達の作戦を一度も事前に防げなかった未熟な餓鬼が！ 偉そうなことを言うんじゃない！ 照準用意！」

ガトリングの銃口が真央の隠れている柱に向けられる。

未熟。確かに、その言葉は真央を現わすには的確な表現だろう。敵の実力を見誤り、敵の作戦を見誤り、敵の正体を見誤った。誤り続けて、その誤りを隠すために傲慢に振る舞う。

楽はこの現状は自身が招いた物だと思っているが、実際は真央の判断ミスにより起きたことの方が多い。だから、このまま死ぬのも自業自得だと思っている。

しかし、そんな真央の甘さを影狗家の使命が、それを許さない。

真央のバッチから電子音と共に声が聞える。

それを聞いた真央はニヤリと笑みを作り指示を出す。

「飛び降りろ」

「撃てえ！！」

シンシャアの指示によりガトリングが回る。

ドォーoooooooooooo！！

それとほぼ同時だった。体育館の天井が爆発する。天井から瓦礫と月光と人の形をした何かガトリングと真央の隠れる柱とガトリングの間に割って入る。

ガトリングの銃口が放たれる無数の弾丸は、人の形をした何かと瓦礫により阻まれる。弾丸により砕かれた瓦礫が粉塵となって周りに立ちこめる。

「……」

数秒かけてゆっくりと粉塵が晴れる。そして、月光がガトリングを撃ち抜いた場所をゆっくりと照らす。

「なんだ……それは！」

シンシャアが目にしたのは赤い巨軀の化け物。

真央からみたソレは赤い機械の鎧。この現状を打開する救世主に見えた。

## 十七話

僕は周りを見渡す。目の前にはラビの姿を暗殺者シンシャアと、ガトリング！ えっ、どういう状況？ 僕、ちゃんと間に合った……んだよね。

「おい。遅いぞ。藤堂楽」

僕は身体を声のする方向に向く。すると背後にある柱の陰かた真央さんが現われる。真央さんの姿をみて僕はホット息を吐く。

「いやいや、遅いって……校舎かからここまで普通に走ってくるよりかは早かったと思

ますよ。あ、それとコレ持ってきましたよ」

僕は真央さんが持っていたのと同じ懐中電灯を渡す。

暗殺者シンシャーの真実を知った後、真央さんの命令で僕は影狗家が秘密理に作った倉庫に訪れた。そこで夜の船の航海で使われるような巨大なライトを入手。慣れない、モース信号で体育館に未だ留まり続けているシャーロット達を逃がす。

その後、戦闘になると考え秘密理に作っていたこの僕の最新の発明品、『鬼兜』を装着。校舎の屋上を移動しここまで来たのだ。

「で、暗殺者シンシャーってこの二人だけですか？」

「ああ、先ほど自分達でベラベラ話してくれた」

「真央さんの予想通りでしたね。それで、僕はどっちを相手すれば良いんですか？」

「見れば分かるだろう。お前は——」

その時、再度無数の弾丸が僕達を襲う。僕は再度、足元に落ちている瓦礫を盾にする。

「あのガトリングのほうだ！」

真央さんが声を張り上げて指示を出す。

「了解！」

数秒後、ガトリングの銃声音が鳴り止む。たぶん、弾の補充をしている。つまり今が好奇！

僕は即座の右腰のボタンを押す。すると、腰に装着されている二股の刃が勢いよく射出される。その刃は瓦礫の盾間を抜け、シンシャー達の足元に突き刺さる。

『鬼兜』の腰に装着されている機工の名前は『ヤミタカ改』。

原理は『ヤミタカ』と同じ。もう一度、ボタンを押せば刃の後ろに付けられているワイヤーが巻き取られ、僕の身体は前に進む。と言っても『鬼兜』を装着している僕の体重は軽く百キロは超えるのでそこまでの速さではない。

だから僕はもう一つの機工を発動させる。腰に付けられている紐を強く引っ張る。すると背中から強烈な振動と熱が伝わる。この『鬼兜』の背後に装着されている機械こそ銀司さんが教えてくれた未だ軍ですら開発途中の装置『ブースターエンジン』。それから発生する青白い炎の推進力で僕は、一流の暗殺者ですら目に負えない速さを手に入れる。

数秒後。僕は暗殺者シンシャー達の目の前に来ると右手を握る。その瞬間、肘の部分が爆破し凄まじい速さで僕はパンチを繰り出す。

しかし僕の大ぶりなパンチはガトリングを撃つていてシンシャーには簡単に避けられる。

だったら！僕は勢いに任せて目の前のガトリングを殴りつけた。

「この化け物め！」

ラビに化けたシンシャーが拳銃を取り出すと僕に向ける。

あ、ヤバッ——……僕は腕を前にして防御の姿勢を取る。

その時、後方から銃撃音が聞える。そして、僕に向けられていた拳銃が弾かれる。流石、真央さん。この距離、この暗闇でシンシャアの拳銃をだけを撃ち抜くなんて。

真央さんは連続で弾丸を放ち、僕からラビに変装をしているシンシャアを引き離す。

僕は左手の拳を握る。左肘に小さな爆発が起こり、その爆風の勢いを使いパンチを繰り出す。

「食らえ！」

ただ、僕の渾身のパンチもガトリングのシンシャアには軽々と避けられる。シンシャアは後方に距離を取った。

「……その声。貴様、俺の暗殺を食止めた少年か」

暗殺を止めた？ 僕は暗殺を止めるなんて……あ！

「お前！ 復活祭の閉会式の変装してシャーロットを襲うとした奴か！ あんたに蹴られて痛い痛かったですよ！」

「フム、そうか。それはすまなかった」

言葉と共に暗殺者シンシャアはナイフを投げる。まあナイフ程度じゃ僕の『鬼兜』は傷つかないんだけど！

僕は『ヤミタカ改』の刃をシンシャアの足元に突き刺す。『ブースターエンジン』を使い再度、シンシャアの目の前に高速で移動。両手の拳を握り突き出す。しかし、シンシャアは僕の拳に滑り込むようにして避けると僕の背後に回る。

ヤバい！ 即座に僕は腰の紐を引き『ブースターエンジン』を噴かせ背後に回ったシンシャアを撃退。ただ驚異的な推進力を制御出来ず壁に激突する。

「なるほど。その機械の鎧。未だに完成していないようだな。驚異的なパワー、驚異的なスピード。しかし、それを扱う脳がない。つまり未完成。その証拠にその腰の機械がなければ上手く移動することもできない。貴様……死ぬぞ。このままオレと戦えば」

ば、バレてる。シンシャアに凶星をつかれたことと熱さから汗を掻く。

この『鬼兜』は僕の今まで作ってきた発明品の数々を統合して作ったもの。理由は、真央さんや銀司さん、そして目の前のシンシャアのような一流の存在から身を守るため。そして、それ以上に大事な人を守り通すため。

発明家としての誇りをかなぐり捨てて作ったのが、この『鬼兜』。

ただ、未熟な僕がいくら頭を捻ったところで結果、出来るのは二流の物ばかり。それは、この『鬼兜』も変わらない。

具体的に言うとしンシャアが言ったように、驚異的速さを制御する機工がない。だから『ヤミタカ改』を使わないとさっきみたいに壁に激突するまで止まらない。

そして、備えつけられた速さや力を支える耐久力が足りてない。銃弾をいくらか食ら

えば穴は空くし、さっきみたいな動きを続ければバラバラに分解してしまうだろう。

しかも廃熱機工すらないから、このまま『鬼兜』を装着し続ければ、中に籠もった熱で蒸し焼きになるか、熱を吸収した装甲によって全身火傷をおうか。いや多分、全身火傷になって死ぬ可能性のほうが高いだろう。実際、既に背中はいくじく痛むし……でも！それでも！

「アンタをここで倒さない理由にはならない！」

「なぜ、そこまでする。オレは。いや、俺達はお前を調べた。お前は不幸にも影狗家の次期党首の行いを知ってしまっただけだろう。しかも今回の我々の任務は直接的に倭国には影響がないはずだ。なのに、なぜ立ち向かう」

「そんなの決まっているでしょう。僕が、真・央・さん・の・番・犬・だからだ！」

『ヤミタカ改』を射出させシンシャアの足元に刃を突き刺す。そして『ブースターエンジン』を噴かせシンシャアに接近する。そして右手を握り肘部分を爆発させ、その威力で突きを繰り出す。

「ワンパターン、か」

シンシャアはナイフを抜くと僕の突きを軽々と避ける。そして右肩に手を置き、その腕を軸にクルリと背後に回る。

僕はさっきと同じく『ブースターエンジン』を噴かせて撃退しようとするが遅かった。シンシャアは持っているナイフを『ブースターエンジン』の隙間に突き刺す。青白い電光がほとばしる。

僕は左手を三回、連続で握る。左腕の肘から連続で三回爆破が起こる。その爆破の勢いを利用して僕は身体を捻り、背後にいるシンシャアを殴りつけた。シンシャアは吹っ飛び、僕の左腕を包んでいた『鬼兜』の装甲は砕ける。

ジジ、ジジジジ

ヤバ！ 嫌な音が僕の耳に聞える。急いで両足の太ももにある紐を強く引っぱる。すると鬼兜の装甲が勢いよく四方に飛んでいく。

「はぁ、はぁ涼しい」

身体中に掻いた汗が、空気に触れる。

直後、予想通り『ブースターエンジン』を取り付けていた背中の装甲が爆発した。

僕は殴りつけたシンシャアを見る。壁まで吹っ飛びグッタリとしている。やったのか？僕は勝利を感じ滴る汗を、汗まみれの腕で拭う。

その時だった。突き刺すような殺気が僕を襲う。

僕はすぐにその場を避ける。直後、さっきまで僕がいた所に弾丸は走る。弾丸が放たれたところを見るとユラユラとシンシャアが立ち上がる。ただし、その姿は無傷とはほど遠

かった。両腕は青紫色に腫れ上がり、姿勢は猫背。呼吸もヒューヒューと浅い。明らかに重傷。けれど、それでも……僕よりも強い！

シンシャーは確実に僕を殺すためにユラユラと近づく。僕は武器になる物はないか探す。「イチかバチか！」

僕は近くに落ちていた拳銃を拾い上げる。多分、真央さんじゃない。けど弾はある。なら、使い方は同じはず！

僕は拳銃を両手で構える。大事なものは目標を良くみること。そして肩の力を抜くこと！僕が銃を構えたことでシンシャーも銃を構える。

パァン！

一つの銃声が体育館に響く。引き金を引いたタイミングは同じ。そしてシンシャーが放った弾丸は僕の肉を抉り肩を撃ち抜く。

そして僕が放った弾丸は――

「これじゃあ……シンシャー……返上、しないとな」

シンシャーの胸を撃ち抜いていた。シンシャーは倒れ血の水たまりが出来る。

「はあはあはあ……はあはあ」

拳銃を地面に落とす。人の命を奪った罪悪感からか、それとも安堵からか分からないけれど身体から熱さから出る汗とはまた違う汗が噴き出る。

「このクソがあー！！」

直後、ラビに化けたシンシャーの声が体育館内に木霊する。見ると、真央さんがラビに化けたシンシャーの胸をナイフで貫いていた。

ナイフを引き抜くとラビに化けたシンシャーは地面に倒れる。

因みに真央さんには目立った傷も、疲労感もない。本当、逐一格の違いを見せつけられる。

視線に気付いたのか真央さんがコチラに向ってくる。また、何か小言を言われるかと身構えているとボンと僕の頭に手を置く。

「早くここから離れるぞ……どうした？ そんな鳩が豆鉄砲を食らったような顔をして」

「いや……その……何か言われると思っただけ」

「言われる……ああ、なるほど……藤堂葉。良くやった。さすが俺の番犬だ」

真央さんは朗らかな笑みを向けて、初めて僕を賞賛する。

その破壊力は僕の張っていた気を解きほぐすには十分で、僕の意識は……闇堕ちていった。

エピローグ

「分かっていたけど『鬼兜』は失敗だなあ」

僕は既に見慣れた天井を見ながらつぶやく。ここは学園の医務室。といっても設備は本国の下手な病院よりも揃っている。

そして、なぜ僕がここに運び混まれたかという表向きは、復活祭の夜に起こった大停電。僕は避難する時に不運にも転び、そのまま校下町まで落ちたから。ただし、本当の理由は『鬼兜』の籠もった熱による脱水症状からくる熱中症。そして、その熱による全身の火傷だ。

医務室の先生によれば一時はかなりヤバかったらしい。

僕はチラリと窓の下を見る。そこには中庭で談笑と共に昼食を食べる生徒達が映る。

こっちに入院した最初の時に銀司さんが今回の任務の事後について教えてくれたを思い出す。

今回の学園を襲った停電は事故。そして主に、僕と暗殺者シンシャーが破壊した体育館もその停電からくる事故として処理されたらしい。因みに、ラビとエヴァン先輩を含める魔術部の面々は今回のことを覚えていない。真央さんや千草先生が影狗家秘伝の薬と催眠療法？ という奴で今回の記憶全て忘れさせたらしい。

つまり、今回の件の真実を知っている人は僕や真央さん以外、誰も知らない。

その事実是谁かの平穏を守れたんだと誇らしくもあり、同時にどこか寂しくも思ってしまう。

「どうやら、ベッドから置きあがれる程度には回復したようですね。楽さん」

僕は声のするほうに視線を向ける。そこには、奈央さんが立っていた。その手にはお見舞いようの花束が握られている。

「安心しました。どうぞ」

奈央さんは笑顔で僕に花束を差し出す。

「ど、どうも」

僕は、差し出された花束をぎこちなく受け取った。

「……」

僕と奈央さんの間に沈黙が流れる。すると奈央さんは大きな溜息を吐く。

「面白みがないな。もう少し、喜ぶなりなんなりしたらどうだ？ せっかく、この俺が前好き奈央の姿で笑顔まで向けたと言うのに」

そして奈央さんは真央さんに戻る。

「すいません。その、いきなり過ぎて。脳が処理できなかつたと言いますか……だってしようがないでしょう！ いきなり好きな人が目の前に現われて笑顔向けたら誰だって緊張しますよ！」

「相変わらず気持ちは悪いなお前は」

真央さんの毒舌はどうやら怪我人であっても健在なようだ。



「はいはい。どうせ、気持悪いですよ。それで、何のようですか？」

「ただのお見舞いだが？」

「嘘ですね。僕の知っている真央さんはそんな利のないことはしない人です」

「お前は俺を何だと思っている」

冷徹傲慢主人って、ここで言ったら折角治りかけてきている傷を再度開きかねないので適当にはぐらかす。

「まあ、ただのお見舞いで来た訳ではないのはたしかなのだがな」

真央さんは僕が横に寝ているベッドに腰を下ろすと、懐から小瓶を取り出す。

「それは？」

「影狗家秘伝の薬だ。効能は記憶を消す」

「それってエヴァン先輩とかに使った奴ですか？」

「そうだ」

「それを何で僕に？」

「お前を僕の番犬から解放させてやろうと思ってな」

「えっ」

まさかの申し出に僕は驚く。しかし、真央さんはそんな僕の反応を無視して事情を話す。「お前も知っての通り一度、番犬になった物は一生番犬として過ごす。ただ、今回のことを本家に話すと、一般人のしかもただの学生であるお前を番犬にするのはいかな物か、とお達しがきた。まあ、ただ今回の件はお前の力無しでは解決できなかったのも事実。そこで特別にこの薬を使って番犬のことを忘れ、尚且つお前がこの学園を去るまで監視はつくという条件のもと番犬の任を解くことが許された。どうする？ 決めるのはお前だ」

真央さんが持っていた小瓶を僕に向ける。僕は、向けられた小瓶をジッと見る。

「因みに監視の方法だが、俺がお前の恋人となり監視するという物だ」

僕はその瞬間、真央さんの手から小瓶を取る。そして、窓から放り投げた。

「なっ！ お前なにを！」

真央さんはまさかの行動に驚く。その反応に僕は怒りを覚える。気がつく、僕は真央さんの頬を片手で掴み、引き寄せていた。

「舐めないでください！ 僕はアナタの前に誓いましたよね！ 番犬になるって！ なのに今更！ そんな甘言言われて、はいそうですかって言う訳ないでしょ！」

数秒の沈黙が、僕と真央さんの間に流れる。

「分かったから離せ！」

真央さんは顔を離す。

「まったくんだ駄犬を僕は飼い犬してしまったらしい」

そう言う真央さんの顔はどこか嬉しそうに見えた。

「ていうか、そんな薬があれば最初に使ってくださいよ」

「馬鹿お前は。あの薬は貴重で、それでいて使うには色々と手間がかかる。一般人のお前がたまたま番犬のことを知ってしまった程度ではとても使えん」

「なるほど……あの、僕……その基調な薬……投げちゃったんですけど」

僕はワナワナと中庭を指さす。

「安心しろ。あれはただの睡眠薬だ。お前のような駄犬の目の前に基調な薬を見せるかよ」  
そう言うとき真央さんはベッドから下りると出口に向う、とクルリと身体を回転してコチラに向き直る。

「では、速く傷を治してくださいね。楽さん」

そしてなぜか、奈央さんとして別れを告げ部屋を出て行く。

なんで、いきなり奈央さん？ 僕は頭を捻っているとき勢いよく扉が開く。

「らーく！！」

そして医務室に理沙とエヴァン先輩、ラビが入ってくる。

「ねえねえねえ！ 今のどういうこと！ どうして奈央さんがお見舞いに来たわけ！」

「ラク！ もしかしてついにアナタの愛がミス・ナオに伝わったのデスカ！」

「良かったな」

「いや、そうじゃなくて。一変に話さないで下さい！」

多分、真央さんが奈央さんとして分れたのは理沙達に本性がバレないため……後、僕を困らせるためだな。

「ラク！」

突如、名前を呼ばれ僕は再度入口を見る。僕の目線に釣られて里沙達も入口を見る。底には肩で息をするトワイライト様があった。

「久しぶりですね。トワイライト様」

僕は突然のトワイライト様の登場に驚いていると、トワイライト様は勢いよく僕の元に近づき抱きつく。

「いっ！」

「「えっ！！」」

あまりの唐突な行動に僕もそして里沙達も驚く。

しかし、そんな僕の驚きをよそにトワイライト様は抱きつき涙を流す。

「良かった。本当に良かった。ラクが聞いて、心配して」

僕はぎこちなくトワイライト様を慰めるために手を背中に当る。

手から伝わるトワイライト様の体温を感じて、僕は再度思った。

——番犬になって良かった。この人を、そして学園を守れて良かった。そして、これからも番犬として守っていいこうと。

